

靈界物語 第四〇卷 舍身活躍 卯の巻

出口王仁三郎

## 凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第四〇卷』愛善世界社

2001(平成13)年11月04日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

圖表などのレイアウトは完全に再現できるわけではないので適宜變更した。  
編纂・データ作成：飯塚弘明（オニド主宰）

2009年11月20日修正

〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵〵

## 目次

序文じよぶんに代かへて

緒言しよげん

總説そうせつ

第一篇 戀雲れんうん魔風まふう

第一章 大雲山たいうんざん〔一〇八五〕

第二章 出陣しゅつちん 〔一〇八六〕

第三章 落橋らくけう 〔一〇八七〕

第四章 珍客ちんきゃく 〔一〇八八〕

第五章 忍ぶ戀しのこひ 〔一〇八九〕

第二篇 寒梅照國かんばいせうこく

第六章 仁愛の真相じんあいしんさう 〔一〇九〇〕

第七章 文珠もんじゆ 〔一〇九一〕

第八章 使者ししや 〔一〇九二〕

第九章 雁使かりのつかひ 〔一〇九三〕

第三篇 靈魂の遊行れいこんいうかう

第一〇章	衝突 <small>しやうとつ</small> 〔一〇九四〕
第一章	三途館 <small>みづやかた</small> 〔一〇九五〕
第二章	心の反映 <small>こころ はんえい</small> 〔一〇九六〕
第三章	試の果實 <small>ためし このみ</small> 〔一〇九七〕
第四章	空川 <small>からかは</small> 〔一〇九八〕

第四篇 關風沼月くわんぷうせうげつ

第一章	氷囊 <small>ひよじなう</small> 〔一〇九九〕
第二章	春駒 <small>はるこま</small> 〔一一〇〇〕
第三章	天幽窟 <small>てんいうくつ</small> 〔一一〇一〕
第四章	沼の月 <small>ぬま つき</small> 〔一一〇二〕
第五章	月會 <small>つきあひ</small> 〔一一〇三〕
第六章	入那の森 <small>いるな もり</small> 〔一一〇四〕

序文に代へて

瑞月は大正十年十月十八日、舊九月十八日より、教祖神靈の示教のまにまに去る明治三十一年二月、高熊山の靈山に、天使に導かれて、幽齋の修業中、神幽二界を探索して見聞したる事柄を口述し、始めむとした時、非法の三玉とか自ら稱へて居る守護神どのの矢を射るやうな急忙な催促の下に、擬理天常非の出の神とか大小軍とか床夜姫とかの筆先を見て貰ひたいと申込まれました。けれども神様の御注意に由つて、『靈界物語』靈主體從第十二卷の口述を了るまでは一枚も見事出来ぬ。併し第一輯が出来上つたら一見してもよいと約しておいたのを履行すべく、澤山の筆先を読んで見た所、抱腹絶倒せざるを得ないやうになりました。要するにヒポコンデルの作用で出来たもので、採るに足らぬ支離滅裂の亂書狂の世迷言を竝べ立てたものであつた。全く狐狸の惡戯に出でたるもので、男子女

子の御靈を、松魚節に使つて、擬理天常非の出の神とかいふ邪靈妖神の淺薄なる  
奸計に出でたるもので、去る明治三十二年の夏、上谷に於て幽齋修業の際に憑依  
し來り、四方某の體内に入入して書いた筆先その儘の文句である。神界の事の分  
らぬ人々の中には一時は迷ふものもあるであらうが、實に困つたものである。萬々  
一こんな神の書いたことを信ずる人がありとすれば、それは決して心の正しい人  
ではない。假令正しい人でも、その精神上に大缺陷がある人々であることを表明  
しておきます。誰の靈魂はどうだとか、彼の靈魂は斯うだとか下らぬ事を謂つて、  
邪神が世人を誑惑して居るのである。有苗の輩が歡んで讀むべきものである。併  
し今何程言を盡して、注意を與へても、その一派のカンカン連は容易に耳に入れ  
ないから、茲に書き誌して後日の證に致しておきました。一寸参考のために、  
ぎりてん上ひのでのおおかみたいしよ十ういちねんの十うがつのに十うさんに  
ちのおんふでさき

(註) かなづかひ原文のまま(句點は編者が付す)

## 前文省略

あやのたかまのはらにおいては、なんしさまと、のしがあらわしてあるのも、よのもとからのいんねんで、みたまのはたらきのごよおが、てんちさまから、せかいおたてなおすための、りよかがみであるから、なんしさまは、かみのあがないなり、のしわ、せかいいばんにあらわれておいでるいきみやのしごおいたしておいでますしごおじんが、これがこのよのたいしようであると、いちにんかまうしごおじんが、うゑからしたまで、かみのしんりきよこどりいたして、ちからだけにはばりた、かみのそのなかでも、とくべつつみのふかい、つみびとのつみとるための、あがないとなりて、ごくるおなごよおであるのに、そのごよおしりつゝ、みわけがつかぬため、のしのいきみやにむかうときわ、けがらわしいともおして、しおできよめはらいおいたして、むこおたものがありたが、それはいたんまごころで、たかまのはらでは、たつとりもおとすよおにもおした、なかむらたけぞおともおしたかみであるが、そのかみは、あまりなんしと、のしとのなかで、かたよりがいたしたために、あとからのかみがみに、ぶちよほおがありては



ならぬから、こゆうことのないよおに、いとおになりかわりて、十うまんどおのせいばいのごとくのゑらいせめくで、われとわがでにおふでさきおまるのみいたして、わるいかがみにでておるから、これからさきが、なんしさまとのしのしよねんばのおしゑであるから、おおさかだいもんまさみちかいと、やしるじんしやのしんせいかいとが、りよかいなとなりて、まことのみちおたてる、ひのでのかみのちから、ごのかみのおおじであるによて、せかい十うの、おおひろきおおやしまに、ゑだはとなりてあらわれておいでますいきみやに、よのはじまりの、こぼんのかみのしんりきうけついで、いちいちしんりきさしこまねばならぬじせつがみなきたのであるから、いちにうといたして、おおもんじんじやにあつまるいきみやは、いんねんなしにはあつめてないから、みなかみのことであるから、うやまいよおて、ておひきよおて、あしなみがそろおてきたら、このうゑはしんかいのおしぐみが、げんざいにあらわれてきかけたのが、もとのかみよともおすのであるぞよ、とおときことである

マアざつと、ひのでのかみさんとやらの、おふでさきのよりだしが、こんなも  
のです、このなかにも、じゃしんのいんぼうが、ふくざいしてゐますから、かん  
がへてごらんさい。

大正十一年十月二十九日

### 緒言しよげん

大八洲彦命おほやしまひこのみことは再生さいせいして月照彦神つきてるひこのかみとなり、終つひには印度國いんどのくにに降誕かうたんして釋迦しやかとなつた。  
然しかるに肉體にくたいを具そなへた釋迦しやかには、別べつに何なにらの奇異きいもなければ特徴とくちやうもなかつた。言いは  
ば普通ふつう一般いっぱんの人間にんげんの如ごとく一いつの比丘びくである。否いな一の乞食こじきである。或ある時周那ときしうなと言いふ  
ものの供養くやうを受け、毒草どくたけを喰くはされて中毒ちゆうどくを起おこし、下痢げり激はげしく終つひに恆河かうが畔はんで倒たふれ  
死じをしたのである。是これ今日こんにちの所謂いはゆる行路病死者かうろびやうししやである。二十九歳にじふきうさいで出家しゆつげし三十五歳さんじふごさい  
で成道じやうだうし、爾來じらい行脚遊説あんぎやいうぜい八十年はちじふねんにして入滅にふめつして了しまつた。その舍利しやりの幾片いくへんは今日こんにち  
も猶なほ保存ほぞんされてあるとは謂いへ、兔とに角かく二千有餘にせんいうよねんぜんすで年前ぜんすで既に普通人ふつうじんと同おなじく死しし去さつ

て今日に於ては跡形もない人間である。斯の如く人間としての釋迦は死んで了つた。されど如来様としての釋迦牟尼佛は今も立派に生存して居るのみならず、今後幾億萬年の末に至るも決して絶滅する時機はないであらう。否獨り絶滅の期がないのみならず、出生の始めもなく無始無終、永遠に生死を超越したものである。是が則ち生きた釋迦であつて、三寶が所謂其生命である。三寶とは佛法僧である。釋迦在世當時の佛は釋迦それ自身であり、法は説法宣傳であり、僧は弟子であつた。入滅後の佛は木佛金佛石佛畫像佛であり、法は經藏であり、僧は遺弟や又は其後進者である。而も此三寶は之を區別する時は三種となるが、その眞實は唯一の佛寶に歸納すべきものであり、一體三寶である。今日に現存せる大藏經は即ち釋迦である。我日本のみに現存する百萬餘の佛像や佛畫は生きた釋迦である。十萬餘の僧侶も亦生ける釋迦である。釋迦滅後今日まで印度、支那、朝鮮、日本に於ける僧侶の累計は二千萬人に上る多數であるが、何れもその時代々々に於ける生きた釋迦で、少くとも其の半數以上は説法や感化の佛徳を備へ、佛道の宣揚、下化衆生の動作を爲さないものはない。斯の如く釋迦は佛法のあらむ限り、僧侶の

存する限り、否木像も金像も寺院も僧侶も共に滅亡すると雖も、その經論所説の眞理は學者哲人その他人類の腦裡に傳染し保留されて、人間のこの世界に存續する間は決して死滅するものではない。

出口教祖の教も、又瑞月の説法や著述も亦永遠に生存して、社會の光明となつて萬靈の世界を照明するものと信じて居るのである。故に吾人が現代人に頻りに批難攻撃されて、邪教だ妖教だと罵られても構はぬ。長年月の間に於て無限なる民衆のために師範たるを得ればよいのである。之を思へば一時の壓迫や批難や攻撃などは餘り苦にするに足りないと思ふ。

一體三寶即ち佛法僧が釋迦そのものである如く、神と法と弟子の三寶も亦出口教祖でなければならぬ。經絲の御役たる教祖が神ならば、緯絲の役も亦神であらねばならぬと信ずる。瑞月が「靈界物語」を編纂するのも、要するに法即ち經藏又は教典を作るので、即ち神を生みつつあるのである。又自己の神を現はし、又宣傳使といふ神を生む爲である。故にこの物語によつて生れたる教典も宣傳使も神言も皆神であつて、要するに瑞月そのものの神を生かす爲であると確信して居

る。『靈界物語』そのものは約り瑞月の肉身であり靈魂であり表現である。前述の如く人間として肉體としての釋迦は滅亡した。そして禪學的抽象的に説けば三寶一體の釋迦は今後幾千萬年を経るとも死滅せないことも述べた。一歩進んで不老不死の靈魂學の上より觀じ見れば、釋迦の靈魂即ち靈體は永遠無窮の生命を保ち給ふ宇宙主宰神の御分靈、御分體、一部の御表現佛として永遠に生き通しである。随つて釋迦に従つて宣傳布教に仕へた諸々の菩薩も比丘も比丘尼も龍王も諸天子も諸天王も皆今に生き通しでなくてはならぬ。月照彦神も其他の諸神の靈魂も、矢張り過去現在未來に亘りて生き活き、天地萬物の守り神となつてその神力佛徳を永遠無窮に輝かし給ふは勿論である。故にこの物語も、天地開闢の元始より死生を超越し給へる神々の神靈の幸ひに由つて口述編纂せしものなれば、過現未三界を通じて大生命を保ち、宇宙の寶典となると俱に、この物語の口述者も筆録者も淨寫者も印刷者も、皆神の活動を永遠に爲すものと謂つてもよいのである。ア、惟神靈幸倍坐世。

大正十一年十月廿九日

印度の國の種姓は其實刹帝利（略して刹利とも曰ふ）、婆羅門、毘舍、首陀四姓の外に未だ未だ幾種姓もあつたが、餘り必要もなければ、その中の重なる四姓のみを茲に表示しておきます。併し諸姓の多くあるなかに婆羅門種姓に大婆羅門とは豪族にして、勢力あるものの謂である。之を特に清貴と稱へ、天地を創造せる大梵天王の子、梵天の苗胤にて世々その稱を襲うて居るのである。義淨三藏が「寄歸内法傳」に曰ふ、「五天之地、皆以婆羅門爲貴勝凡有座席竝不與餘三姓同行、自外雜類故宜遠矣」とある三姓は即ち刹帝利、毘舍、首陀のことで、此の中でも刹帝利は王族なるにもかかはらず、同席同行せずと謂ふのを見ても印度にては貴勝族とされて居たことは明白であります。婆羅門と云ふ語は梵天の梵と同語なるが故に、貴勝と稱へられたのである。印度とは月の意義であるが、印度全體を通じては月とは云はずして婆羅門國と謂つて居たのである。婆羅門教徒の主唱する所によれば、

□ 大虚空上に大梵天とも梵自在天とも大自在天とも稱ふる無始無終の天界が在つて、その天界には大梵王とも那羅延天とも摩首羅天とも稱する大主宰の天神があつて、これもまた無始無終の神様なるが故に、無より有を出生せしめて是の天地を創造し、人種は云ふも更なり、森羅萬象一切の祖神である」

と語り傳へて來たのである。又曰ふ、

□ 所在一切の命非命は皆大自在天より生じ又大自在天に従つて亡滅す、自在天の身體は頭は虚空であり、眼は日月であり、地は肉體であり、河海の水は尿であり、山嶽は屎の固まつたものであり、火は熱又は體温であり、風は生命であり、一切の蒼生は悉く自在天が肉身の蟲である。自在天は常に一切の物を生じ給ふ」と信じられて居たのであります。支那の古書にも、

□ 盤古氏之左右目爲日月毛髮爲草木頭手足爲五嶽泣爲江河氣爲風聲爲雷云々とあるに酷似して居ります。また婆羅門の説に、

□ 本無日月星辰及地。唯有大水。時大安荼生如鷄子。周匝金色也。時熟破爲二段。一段在上作天一段在下作地。彼二中間生梵天名一切衆生祖公。作一切ノ有命無命

物。』

と謂つて居るが、支那の古傳に、

『天地渾沌如鷄子盤古生其中一萬八千歲而天地開闢。清輕者上爲天濁重者下爲地盤古在其中一日九變神於天聖於地天極高地極深盤古極長此天地之始也』

と謂へるによくよく似て居ります。又梵天王は八天子を生じ八天子は天地萬物を生ず。故に梵天王は一切衆生の父と云ひ威靈帝とも謂はれて居る。然るに神示の

『靈界物語』に依れば、大自在天は大國彦命であつて、其本の出生地は常世の國（今の北米）であり、常世神王と謂つてあります。大國彦命の子に大國別命があ

つて、この神が婆羅門の教を開いたことも、この物語に依つて明かである。常世國から埃及に渡り次でメソポタミヤに移り、波斯を越え印度に入つて、ハルナの都に現はれ、爰に全く婆羅門教の基礎を確立したのは、大國別命の副神鬼雲彦が大黒主と現はれてからの事である。それ以前のバラモン教は極めて微弱なものであつたのであります。このバラモン教の起元は遠き神代の素盞鳴尊の御時代であつて、釋迦の出生に先立つこと三十餘萬年であります。『靈界物語』（舍身活躍）



は主として印度を舞臺とし、三五教、ウラル教、バラモン教の神代の眞相を神示のままに口述する事になつて居りますから、『舍身活躍』（卯の巻）の總説に代へて少しくバラモン神の由緒を述べておきました。

惟神靈幸倍坐世

大正十一年十月三十一日

王仁識

第一篇 戀雲魔風

第一章 大雲山（一〇八五）

空すみ渡る初秋の風も涼しき月の國  
花は散れどもハルナの都 バラモン教を開設し  
大雲山の岩窟に 館を構へて鬼雲彦は  
大黒主と改名し 梵天王の直胤と  
此世を偽る曲津業 數多の軍隊引連れて  
左手に教書を捧げつつ 右手に劍をぬきかざし  
七千餘國の印度の國 刹帝利族の大半を  
おのが幕下に従へつ 飛ぶ鳥さへも落すよな

其勢の凄じさ 時しもあれやウラル彦

ウラルの姫の御教を 宣傳しゆく神司

常暗彦は月の國 デカタン高原に現はれて

教の旗をひらめかし これ又左手にコーランを

捧げつ右手に劍持ち バラモン教の向ふ張り

勢やうやう加はりて バラモン教の根底は

危殆に瀕し來りけり かけて加へてウブスナの

山に建てたるイソ館 神素盞鳴大神の

教を傳ふる日の出別 八島の主の聲望は

東の空に天津日の 豊榮昇る如くにて

氣が氣でならぬバラモンの 教司は岩窟に

集まり來りいろいと 對抗戦を開かむと

鳩首謀議の折柄に 早馬使ひのテルチーが

勢込んで馳せ歸り 神素盞鳴大神の

部下の面々イソ館

味方を集めて迫り来る

其勢はライオンの

速瀬の如く急がしく

旗鼓堂々と攻め来る

氣配と確に覺えたり

今此時に躊躇して

月日を仇に送りなば

臍をかむとも及ぶまじ

早く精銳の軍卒を

さし向け彼が計畫を

根本的に覆へし

一泡吹かしてこらさねば

ハルナの都は忽ちに

土崩瓦解の虞あり

用意めされと息早め

虚實交々取混ぜて

注進すれば神司

大黒主は驚いて

左守右守に相對し

如何はせむと謀る折

又もや入り来る足音に

何人ならむと眺むれば

カルマタ國に遣はせし

斥候隊のケリスタン

汗をタラタラ流しつつ

カルマタ國に割據する

常暗彦は日に月に

猛虎の勢加はりつ 數多の軍勢を引率し

山野をわたりはるばると 月の都に攻めよせて

一擧に城を覆へし バラモン教を根底より

絶滅せむと計りある 其計畫はありありと

手に取る如く見えにけり 今此時に此時に

一擧に彼を討ちすてて 國の災拂はねば

臍をかむとも及ぶまじ 一日も早く片時も

勇敢決死の軍卒を 差向け給へと汗拭ひ

風聲鶴唳におぢ怖れ 注進するこそ可笑しけれ

大黒主は色を變へ 大足別に打向ひ

如何はせむと尋ぬれば 大足別は肱を張り

われは武勇の神將ぞ 神素盞鳴大神や

常暗彦が現はれて 獅子奮迅の勢に

本城に攻めかけ來るとも 何かは恐れむバラモンの

教をしへの神力しんりき身に受うけて 刃はむか向むかふ奴輩やつばらことごとく  
追おつかかけちらし薙なぎ倒たふし 敵てきを千里せんりに卻しりぞけて  
君きみの危難きなんを救すくふべし 何なには免ともあれ諸々もろもろの  
神かみの司つかさと謀はからひて 其その上うへ着ちやく否ひを決けつせむと  
苦にがり切きつたる顔付かほつきに ドカリと其その場ばに胡坐あぐらかき  
豪傑がうけつ笑わらひに紛まぎらしぬ。

鬼雲彦おにくもひこを始はじめ左守さもりの鬼春別おにはるわけ、右守うもりの雲依別くもよりわけ、石生能姫いそのひめ、鬼熊別其他おにくまわけそのたし四五ごの幹部かんぶれ  
連ん、大雲山たいうんざんの岩窟がんくつ、大黒主おほくろぬしの隱家かくれがに集あつまつて、三五教あななひけう、ウラル教けうに對たいし取とるべき  
手段しゆだんを首くびを鳩あつめて謀議ぼうぎしつつかつた。鬼雲彦おにくもひこは鬼熊別おにくまわけの其妻そのさいし子が三五教あななひけうに歸順きじゆんし、  
宣傳使せんでんしとなつてバラモン教けうの教線けうせんを攪亂かくらんせりとの急報きふはうを屢々しばしば耳みみにし、猜疑さいぎの眼まなこを  
怒いからし、いつとはなしに二人ふたりの中なかには大障壁だいしやうへきが築きつかれ、大溝渠だいこうきよが穿うがたれ、鬼熊別おにくまわけ  
も怏々わうわうとして樂たのしまず、遂つひには自みづから左守さもりの職しやくを辭じし、部ぶ下かの神司かむつかさと共に、己おのが館やかたに  
潛ひそみて、梵天王ぼんてんわうを祀まつりたる神しん殿でんに端坐たんざし、何卒なにとぞ一日いちにちも早はやく大黒主おほくろぬしの教主けうしゆが善道ぜんだうに

たちかへ 立歸り、大自在天の教を完全に發揮し、且つ大國別の御子國別彦の所在の分りて、ハルナの都に大教主として臨まるる日の一日も早かれ……と祈りつつ、一方には妻子の所在を探ねむと、日夜祈願に餘念なかつたのである。然るに今日は大黒主の珍しき使に依つて、心ならずも主命もだし難く、此席に面を現はしてゐたのである。今此處に集まれる幹部は、何れも大黒主の股肱と頼む部下のみで、信任最も厚き人物ばかりであつた。そこへ鬼熊別が列席したのは恰も白米に粃の混つた如く、油に水を注したやうなもので、何とはなしに意思の疎隔を來したのも免れ難き所であつた。

大黒主は立上つて一同に向ひ、

「今日一同をここに召集したのは一日も看過す可らざる緊急事件が突發したからである。抑も吾バラモン教は常世の國の常世城より、大國別は神命を奉じて埃及に渡り、神徳を四方に輝かし給ふ際、憎き三五教の宣傳使、吾本城を攻撃して、神の聖場を蹂躪し、吾等も衆寡敵せず、大國別の教主と共に、メソポタミヤの顯恩郷に居を轉じ、漸く神業の端緒を開きし折、執念深き三五教の宣傳使輩は、言

靈軍を引率し、神素盞鳴尊の命と稱し、短兵急に攻めよせ來り、内外相應じて、再びバラモンの本城を破壊し去り、吾等は已むを得ず、涙を吞んで親子夫婦の生別れ、漸く忠勇義烈なる部下と共に自轉倒島に渡り、又もや神業を開始する折しも、三五教の神司の言靈に破られ、無念やる方なく再び殘黨を集めて、此都に來り、月の國の七千餘ヶ國の大半を征服し、今や旭日昇天の勢となり、神業を葦原の瑞穂國全體に擴充し、バラモンの威力を示さむと致す折しも、天の岩戸を閉鎖したると云ふ惡神の張本素盞鳴尊、再び部下をかりあつめ、黄金山、コーカス山、イソ館と相俟つて、再び吾本城を覆へさむず計畫ありと聞く。今に及んで敵の牙城に迫り、之を殲滅せざれば、バラモン教は風前の燈火の如し。汝等の忠勇義烈に依頼して、吾は此災を芟除せむと欲す。左守を始め、一同は吾旨を體し、最善の方法を講究すべし」

と宣示し、軽く一瞥を與へて、奥の間に姿を隠した。

石生能姫は、大黒主の立去りし後の席に儼然として立現はれ、いとおごそかに、只今大教主の仰せの如く、本教は危急存亡の機に瀕せり、速に評議を凝し、至



誠を吐露して、大教主の御心に應へ奉れよ」

と宣示するや、左守は立上つて、

「吾々はバラモン教の爲、大黒主の御爲ならば素より身命を惜まぬ覺悟でゐる。

就ては慎重に審議を致さねば、此大問題を輕々に決することは出来ませぬ。私は

斷言します。今に至りて考ふれば、此城内には二心ある有力なる幹部の伏在して、

三五教やウラル教に款を通じ、内外相應じて本教を轉覆せむとたくらむ曲者が

います。第一此悪人を取調べなくては、如何なる妙案奇策も敵に漏洩する虞が

り、到底目的は達せられますまい」

と目を瞋らし、ワザとに鬼熊別の面體を睨みつけた。鬼熊別は平然として顔の色

をも變へず控へてゐる。

右守の雲依別は立上り、卓を叩いて聲を勵まし、

「鬼春別様の仰せの如く、敵の巨魁は此城中に潛み居るは一目瞭然たる事實で

いませう。さうでなくては今日まで世界の祕密國として自由自在にバラモンの教

を擴張し、無人の野を行く如き有様でありしもの、俄に各地方の刹帝利は反旗を

ひるがへ、  
翻し、尊きバラモン神に向つて不順の色あり、人心恟々として安からず、天下の騷擾將に勃發せむとする兆ある時、ウブスナ山、カルマタ城より、數多の神軍を引連れ押寄せ來らむとの注進は、決して虚言ではありますまい。いざこれより、城内に潛む巨魁を誅伐し、首途の血祭となして、怨敵調伏の出師をなさむ、列座の面々如何思召さるるや」

鬼熊別は立上り、

「怪しき事を承はるものかな。バラモン教の本城に敵に款を通ずる巨魁ありとは、そは何人の事でムるか。左様な悪神は一時も早く誅伐し、國家の災を根底より除かねば、バラモン教は、いかに神力強くとも未だ安心する所へは参りますまい。左守殿のお言葉によれば、確に其巨魁は此城中に潛みゐる事を御承知のやうに聞きました。其悪人は何人なるか、速に御發表を願ひます」  
と言はせも果てず、鬼春別はクワツと目を見ひらき、聲を荒らげ、顔を眞赤に彩どりながら、

「お黙り召され、鬼熊別どの、其張本人と申すは鬼熊別といふ悪虐無道の佞人ば

らで△る。言はずと知れた、鬼熊別は此城内に一人より△るまい。速に事情を逐  
一白状致して其赤誠を現はすか、さなくば吾々が面前に於て男らしく切腹めされ  
よ』

鬼熊『こは心得ぬ左守殿の御言葉、何を證據に、左様な事を仰せらるるか。瘦せ  
ても枯れても、バラモン教の柱石鬼熊別、めつたな事を申さると、聞き捨はな  
りませぬぞ』

鬼春『アハ、ハ、ハ、悪人猛々しいとは此處の事、よくもマア、又ツケリと白々しい  
其言葉、ハルナの城には盲は一人も居りませぬぞ。左様な事が看破出来ないやう  
な事で、如何して大切な左守が勤まらうか』

『確な證據あつての仰せか。サアそれが承はりたい。サア如何で御座る』

『サア それは』

『サアサア如何で△る、御返答を承はりませう』

『サア それは』

『サア サア サア』

と二人は兩方より意氣まいてゐる。右守はツと立つて、

「アイヤ兩人暫らく待たれよ」

と制すれば、二人は不承々々に己が座につき、互に睨み合つてゐる。

雲依「左守の仰せは數多の斥候どもの種々の注進を綜合して、これは正しく鬼熊

別が、敵方に款を通ずる者ならむとの推定に過ぎますまい。私が考へますには鬼

熊別様の斯かる嫌疑を受けられたのも二三の原因があるだらうと思ひます。今茲

に羅列すれば、先づ第一に鬼熊別殿の妻蜈蚣姫殿は今三五教に歸順し、堂々た

る宣傳使となつて天下を布教し居らるる事、これが第一大黒主さまの御氣勘に叶

はぬ點で疑惑の起る導火線でゐる。……又第二は小絲姫殿が龍宮の一つ島へ渡り、

地恩城に於て女王となり三五教を擴め、部下の友彦までも三五教に歸順せしめた

るとの噂、これが第二の疑の原因。次には妻子は三五教に心酔し、最早バラモン

教に復歸する形勢もなきに、何時までも獨身生活を續け、惡虐無道の妻子と再び

家庭を作らむとの御所存と見える、これが第三の疑をまく種。次には大黒主さま

が鬼雲姫さまの不都合を詰り、別宅を造りて退隱を命じ給うた時、之に對して極

りよく反抗的態度を用ひ、新夫人の石生能姫に對し悪感情を抱き居らるる事、これも亦疑惑の種。大黒主と鬼熊別との間には深き溝渠が穿たれ、意思の疎通を缺きし事。…次に兵馬の權を握り、片手に教權を掌握し玉ふ大黒主よりも、武力なき身を以て、數多の國人の信用を受け居らるる事。これ亦疑惑の種となつて居るのだらうと私は推察致します。併し乍ら神に仕へ給ふ身を以て左様な疑惑の種を蒔く如き御精神では△いますまい…と私は信ずるのであります。今は斯様な内紛を繰返す時では△らぬ。一時も早く外に向つて敵の襲來に備へ、且つ敵を根底より滅亡させねばならぬ國家の危機だから、小異を棄て、大同に合し、協心戮力して此國家の大事に備へようではありませぬか。これ右守が偽らざる至誠の告白否忠告で△る。

と堂々として鬼熊別の冤罪を辨護しつつ説き來り説き去り座に着いた。鬼春別は不機嫌顔にて再び立上り、

如何にも心得ぬ右守の御言葉、吾々は一向合點が參らぬ。然らば右守どの、鬼熊別の一身に就ては、貴殿に一任しますから、キット過ちのなき様に御監督を願

ひます」

雲依「神徳高き鬼熊別さまの御監督とは思ひもよらぬ大役なれど、今日の場合止

むを得ませぬ、仰に従つて監督を承はりませう」

鬼熊「これは心得ぬ、御兩人の御言葉、悪虐無道の叛逆者ならばいざ知らず、吾々

如き忠臣義士に對して、何の爲に御監督を遊ばすか。あらぬ嫌疑をかけられ、憤

慨の至りに堪へねども、國家の一大事を慮り、陰忍自重しつつある吾に、其心遣

ひは御無用に願ひませう」

石生「此問題はどうぞ妾に任して貰ひませう。イヤ鬼熊別さま、エライ氣を揉ま

せました。今の世の中は誠の者が虐げられ、疑はれ、大悪人の時めく時代なれば、

あなたもそれだけの御疑を受けさせられる半面にはキット善い事があるでせう。

どうぞ御機嫌を直して、今日以後は日々國家の爲に、教の爲に、御登城御出勤を

願ひますよ」

鬼熊別は石生能姫の言葉に感謝の涙を祕かに流しながら、

「ハイ有難うムいます。然らば御言葉に従ひ、明日より出勤致すことにきめませ

う。今迄の都合は平にお赦しを願ひます」

石生能姫は儼然として言葉を改め、

「イソの館へは左守鬼春別殿、部下の軍卒を引連れ出發さるべし。又大足別は軍勢を引率して、カルマタ國のウラル教が本城へ向つて攻め寄せらるべし。鬼春別が目出度く凱旋ある迄は元の如く鬼熊別殿、左守となつて奉仕されたし。右守は従前のまま、何れも神妙に心を併せ、手を引合ひ神務に従事されよ。大教主の命に依りて、石生能姫、代理權を執行致す」

一同は此言葉に、

「ハハア」

と首を傾け、承諾の意を示した。

因に右守の雲依別は時の勢に抗し難く、左守と表面バツを合せてみたが、其實鬼熊別の美はしき心と日夜の行動に感激し、心中潜かに鬼熊別を畏敬尊信してゐた。それ故鬼熊別の無辜を憐れみ辨解的辨論をまくしたたてたのである。又石生能姫は鬼熊別のこともなく男らしく、威儀備はる容貌に、心私かに戀着してゐた。

それ故大黒主の餘り好まぬ鬼熊別を代理權を執行して左守となし、鬼熊別に同情をよせつつある右守を止め、常に鬼熊別を讒言する鬼春別、大足別を出陣させて了つたのであつた。女の美貌は城を傾けるとか云ふ。實に女位恐ろしきものはない。大黒主も此石生能姫には戀愛の雲に包まれて、善惡に關らず、一言半句も背いた事はなかつたのである。

(大正一一・一一・一 舊九・一三 松村眞澄録)

## 第二章 出陣(一〇八六)

バラモン教の神司

鬼春別は大教主

大黒主や石生能姫

二人の旨を奉戴し

片彦、ランチ二將軍

左右の翼となしながら



三千餘騎に將として　　ハルナの都を出發し  
 陣鐘太鼓を打ちながら　　法螺貝ブウブウ吹きたてて  
 旗鼓堂々と三五教　　イソの館へ進み行く  
 其勢ひの勇ましき　　鬼神も肝を挫がれて  
 絶え入るばかり思はれぬ　　軍の司と仕へたる  
 大足別も同様に　　釘彦、エールの二將軍  
 三千餘騎に將として　　旗鼓堂々とウラル教  
 立籠りたるカルマタの　　根城をさして攻めて行く  
 何れ劣らぬ勇士と勇士　　山野の草木も自ら  
 靡き伏しつゝ虎熊や　　獅子狼もおしなべて  
 戦き逃ぐる思ひなり　　實に勇ましき進軍の  
 駒の嘶き響の音　　蹄の音も夏々と  
 鬨を作つて攻めて行く　　實に勇ましき次第なり。

出陣しゅつげんの用意よういは急速きふそくに整ととのうた。大黒主おほくろぬし、石生能姫いそのひめ、鬼熊別おにくまわけ、雲依別くもよりわけ其他そのたの幹部かんぶは出陣しゅつげんを見送りみおく成功せいこうを祝しゆくし、終をはつてハルナの本城ほんじやうの奥殿おくでんに進すすみ入り此處ここに簡單かんたんなる酒宴しゆえんを催もよほし、鬼熊別おにくまわけは一先ひとまづ吾館わがやかたへ立歸たちかへる事こととなつた。雲依別くもよりわけも亦また其日そのひは己おのが館やかたに歸かへり、神前しんぜんに戰勝祈願せんしよきぐわんの祝詞のりとを奏そうし寢しんに就ついた。

夜よは深々しんしんと更ふけ渡わたり、咫尺しせき暗愴あんたんとして閑寂かんじやくな氣きに包つつまれ、夜嵐よあらし吹き荒すさぶ丑滿うしみつの頃迄ころまで、大黒主おほくろぬしは石生能姫いそのひめと共に來こし方行末かたゆくすゑの事等語ことなとかたらひ夜よを更ふかしつつかつた。

大黒おほくろ「あゝあ、吾われこそはバラモン教けうの大教主だいけうしゆとなつて以來いらい、世よの爲ため、道みちの爲ためにあらゆる艱難かんなん辛苦しんくを嘗なめ盡つくし、漸やうやくにして月つきの國くにに根城ねじろを定さだめ、稍安心ややあんしんと思おもふ間まもなく好事かうず魔多ましとやら、三五教あななひけう、ウラル教けうの奴輩やつばら吾教わがをしへの隆盛りうせいを妬ねたみ、今いまや雙方さうほうより此本城このほんじやうを攻撃こうげきし吾等われらを亡ほろぼさむと致いたす憎にくき奴やつ、餘あまりの事ことに神經過敏しんけいこわびんとなり、夜よも碌々ろくろくに此頃このころは寢ねた事こともない。せめて石生能姫いそのひめの優やさしき言葉ことばを心こころの頼たのみとして日夜にちやを送おくる苦くるしさ。あゝあ世よの中なかは如何どうしてこれほど災わざはひの多おほきものだらうか。思おもへば思おもへば浮世うきよが嫌いやになつて來きたわい。早はやく大教主だいけうしゆの役やくを倅せがれに繼承けいしやうさして其方そなたと共に山林さんりんに隱かくれ、光風霽月くわうふうせいげつを樂たのしみ餘生よせいを送おくりたいと思おもふ心こころは山々やまやまなれど、倅せがれは

あの通り文弱に流れ世間知らずの坊んちゃん育ち、實に前途は心細いものだ。何とか致して此苦難を免るる道はあるまいかな」  
とハアハアと吐息をつき梢げ返る。石生能姫は打笑ひ、  
「ホ、ホ、旦那様の其お言葉、何とした弱音をお吹き遊ばすのでせう。そんな弱い事で如何して此月の國を背負つて立つ事が出来ませうか。神様は此チツポケな月の國ばかりか、豊葦原の瑞穂國全體をバラモンの教に歸順せしめ、恵みの露をば萬民に霑し與へむとの御神慮では御座りませぬか。左様な意志の薄弱な事では月の國さへも保つ事は出来ませぬ。チト心を取り直して元氣を出して下さいませ。一國の王者たる身を以て妾の如き卑しき女に心魂を蕩かし、偕老同穴を契り給ひし鬼雲姫様、特に内助の功多き奥様をあの通り退隱させ、日夜涙の生活を續けて御座るのを他所にして、旦那様は妾の様な女を弄び給ふは御神慮に叶はぬ事ではありますまいか。それを思へば妾も安き心はムりませぬ。何卒一日も早く奥様を本城に招き入れ、夫婦睦まじく神業に参加して下さいませ。そして妾の位置を下して婢女となし下されば、御夫婦に對し力限りの忠勤を勵む石生能姫の覺悟、

何卒許して下さいませ。これが妾の一生の願ひで御座います」

「ハ、ハ、ハ、其方は此大黒主を氣が小さいと申すが、あまり其方も氣が小さ過ぎるぢやないか。其方が始めて吾と褥を一つにした時、其方は云つたぢやないか。

旦那様が妾のやうな不躰なものを斯うして可愛がつて下さるのは實に有難涙にくれますが、然し乍ら奥様の事が氣になつて心も心ならず、そればかりが心配だと申したではないか。それ故、永らく連れ添うて共に苦勞を致した鬼雲姫を別家させ、其方の希望通りにしてやつたではないか。今となつて左様な事を云つてくれば大黒主も困つてしまふ。俺が許した女房、誰に遠慮は要らぬ。大きな顔をして本城の花となり女王となつて、吾神業を陰に陽に極力助けてくれなくては困つてしまふよ」

「旦那様、妾は奥様の事が氣にかかると云つたのは勿體ない、奥様を放り出して欲しいと願つたのぢや御座りませぬ。奥様のある旦那様に可愛がられては誠に濟まない。奥様に會はず顔がないと云つたまでで御座ります」

「さうだから其方の心配の種を除くために鬼雲姫を遠ざけたのではないか」

「それはチト了簡が違ひませう。何程奥様が遠ざかつて居らつしやいましても妾の心は如何しても濟みませぬ。今までよりも一層お氣の毒で堪りませぬ。數多の部下や國民には妖女ぢや、鬼女ぢや、謀叛人だと口々に罵られ、如何して之で妾の胸が安まりませう。御推量なさつて下さりませ。貴方は如何しても、口先で私を愛して下さるが、本當の妾の心を汲みとつて下さらぬ故、つまり妾を苦しめ憎み給ふ事となるのでムります」

と袖を顔にあてサメザメと泣き沈む。

「其方の云ふ事ならば何一つ背いた事はないぢやないか。今日も今日とて鬼熊別の如き教の道の妨害になる、蟄居を命じてある男を俺に相談もせず代理權を執行すると申して、人もあらうにあれほど俺の嫌ひの鬼熊別を左守に任じ城内の權を一任したではないか。俺にとつては天下の一大事、承諾致す限りではなけれども、其方の言ひ分をたて、其方の機嫌を損じまいと憤りを抑へて辛抱をしてるではないか。萬一此國が外教の手におちる様の事あらば、俺は到底此處に安心して居ることは出来ない。吾等にとつての一大事を忍んで居るのも其方が可愛いばかり

だ  
」

「あの鬼熊別は貴方の目からは、それ程悪い人と見えますか。貴方はお人がよいから悪人輩の讒言を、一々御採用遊ばし智者賢者の言を用ひ給はず。あれほどバラモン教を思つてゐる神司は何處にゐりませう。それは貴方の一大事、又私の一大事に關する事、さう易々と少しの感情や氣まぐれ位に、そんな大事がきめられませんか。何卒心の雲を取り拂ひ、正しく鬼熊別の心を汲みとつてやつて下さいませ」

「さう聞けばさうかも知れないが、鬼熊別の女房は到頭三五教に寝返りをうち、娘の小絲姫も矢張り三五の道の立派な宣傳使となつてバラモン教の畑を蠶食し、色々雑多と道の妨害を致す奴、ハルナの都の内幕は何も彼も三五教に知れ渡つて居るのも、側近く仕ふる者の中に内通するものがなくてはならぬ。若し内通するものありとすれば、鬼春別の言葉の如く鬼熊別の外にはない道理、石生能姫、其方は之でも鬼熊別を信用致すか」

「そりや貴方お考へ違ひでせう。あの方に限つて左様な卑しい根性をお有ち遊ばす道理はゝりませぬ。人を疑へば何處までも限りのないもの、人の善惡正邪は神

様が直接にお審き遊ばしませう。假令貴方は神の代表者としても矢張り人間の肉體を有つた神様、如何して人の心の善惡正邪が判りませう。一切の心の雲霧を拂拭し惟神の心に立ち歸り、胸に手をあててお考へ遊ばしたらチツと御合點が參りませう。もしも鬼熊別さまに左様な野心がありとすれば、あれだけ國民の信用を一身に擔うたお方、どんな事でも出來ませう。貴方は兵馬の權を握つておいで遊ばす故、國王とも大教主とも仰いでゐるものの、人心は既に離れて居りますよ。髭の塵を拂ふものばかりお側に近寄つて貴方を益々深い淵に陥れるものばかり、本當に貴方の力になる誠の者は此澤山な御家來の内、妾の公平なる目より見れば鬼熊別様より外に只の一人もありませぬ。何卒一時も早く鬼熊別と胸襟を開いてお道の爲、國の爲、最善の力をお盡し遊ばす様に石生能姫が眞心をこめてお願ひ致します」

大黒主は石生能姫の云ふ事ならば一旦は拒んで見ても、徹底的に排除する事は戀の弱味で出來なかつた。大黒主は遂に我を折つて、  
「それなら鬼熊別の身の上は其方に任す。隨分氣を付けて彼に謀られぬ様、此方

のため力ちからを盡つくすやうに云いひ聞きかしてくれ」

「早速さつそくの御承知ごしやうち、石生能姫いそのひめ満足まんぞく致します。左様さやうならば明日みやう早朝さうてう妾わたしより彼かれが館やかたを訪たうね充分じゅうぶんに其意中そのいちちうを探り果はたして善人ぜんじんならば日々にち登場とうじやうを命めいじ旦那様だんなさまの相談柱さうだんばしらと致いたしますなり、もしも心こころに針はりを包つつむ様な形跡けいせきが鵓うの毛けの露程つゆほどでもありませんなら、それこそ斷乎だんこたる處置しよちを執とらねばなりませんまい。それなら明日あすの早朝さうてう鬼熊別おにくまわけの館やかたに参まゐりますから御承知ごしやうちを願ねがつておきます」

「其方そなたが態々わざわざ行かないでも此處ここへ呼び寄よせて調べたら如何どうだ。女をんなと云いふものはさう易々やすやすと門もんを跨またげるものではない」

「オホ、旦那様だんなさまの今いまのお言葉ことば、今日こんにちの女をんなは、社交界しゃかうかいの花はなと謳うたはれねば女をんなではありませんせぬ。夫をつとの成功せいこうは凡すべて女の社交しゃかうの上手下手じやうづへたにあるものでムごいます。妾わたしが鬼熊別おにくまわけの屋敷やしきへ参まゐつたとて、決けつして旦那様だんなさまのお顔かほにかかはる様な汚けがれた事ことは致いたしませんから、そこは御安心ごあんしん下さいまして、鬼熊別おにくまわけの眞しんの精神せいしんをトコトン探さぐらして下さいませ」

「それなら何事なにごとも其方そなたに一任いちにんする。明日あすは早朝さうてうよりソツと餘あまり人ひとに判わからぬやうに



彼の館に訪ね行き篤と心中を見届けてくれ。サア夜も大分に更けたやうだ。就寝致さうか」

「はい」

と答へて石生能姫は寢具をのべ、夫婦は茲に漸く久し振りで心を落着け、安々と寢に就いた。

(大正一一・一一・一 舊九・一三 北村隆光録)

### 第三章 落橋「一〇八七」

空一面にドンヨリとかき曇り、あたり陰鬱として風もなく蒸暑き秋の夕べ、内地の秋とは事變はり、初秋の今日此頃は松蟲鈴蟲の聲もなく、梢にとまつて千切れ千切れに鳴く蝉の聲、轡蟲等喧しく騒ぎ鳴きたつる有様は、月の都のハルナ城の内内外に穩かならぬ事の勃發する前兆にはあらずやと思はるるばかりであつた。

館やかたの主鬼熊別あるしおにくまわけは大雲山たいうんざんの岩窟がんくつに於おける會議くわいぎを終をへて、悄然せうぜんとして吾家わがやに歸かへり、奥おくの一閒ひとまに座ざをしめて、雙手もろてをくみ、青息吐息あをいきといきの體ていであつた。

斯かかる所ところへ家老職からうしよくを勤つとめてゐた熊彦くまひこは襖ふすまを押しあけ入り來きたり、叮嚀ていねいに會釋あしやくしながら、

「モシ旦那様だんなさま、承うけたまはりますれば、貴方様あなたさまに大變たいへんな嫌疑けんぎがかかり、大黒主様おほくろぬしさまが近侍きんじの誰彼たれかれを遣つかはして、夜陰やいんに紛まぎれ、旦那様だんなさまの命いのちを取りに來くるとの急報きふほうを自分じぶんの親友しんいうよりソツと聞ききました。どうぞ御用心ごようじん下くださいませ。今いまにも刺客しきやくが參まゐるかも知しれませぬから……」

鬼熊別おにくまわけは平然へいぜんとして打笑うちわらひ、

「アハ、ハ、ハ、風聲鶴唳ふうせいかくれいに驚おどろいてはならぬ。眞心まごころを以もつて眞心まごころの神かみに仕つかふる鬼熊別おにくまわけに如何どうして不義ふぎの刃やいばが當あてられようか。決して心配しんぱいは致いたすものではない。かやうな騒々さうさうしい時にはいろいろの噂うはさの立つものだから、お前まへも冷靜れいせいに物ものを考かんがへ、決して騒さわいではならないぞ」

「私わたくしも大抵たいていの事ことならば騒さわぐ男おとこではムいませぬが確たしかな證據しやうこがムいます。大黒主様おほくろぬしさまの

近侍に仕へてゐる友行といふ男、實は私の義理の兄弟でゐますが、彼がソツと私まで耳うちをしてくれました。グツグツしては居られませぬ。キツと今夜攻寄せて来るに間違ひはないのでゐます。これが違つたら、此熊彦は二度とあなたのお目にはかかりませぬ」

「現に俺は今、大雲山の岩窟に集會に參り、大黒主様の面前に於て議論を戦はし、種々雑多の疑惑を解き、漸く氷解されて、遂には石生能姫の推薦に依り、元の如く左守に任せられ歸つて來た所だ。決して左様な事はあるまい。大方何らかの間違ひだらう」

「イヤ其事は友行から聞く聞いて居ります。併しそれが今晚の大事變を起した原因です。大黒主は嫉妬の深い人物、そこへ寝ても醒めても忘れられぬ惚れ切つた石生能姫さまが、旦那さまの肩を持ち、大黒主の最も嫌ひ給ふ旦那さまを左守に任じ、城内一切の教務及び國務を總括せしめむとされたので、大黒主は氣が氣でならず、ぢやと云つて最愛の女房石生能姫の言を打消す譯にもゆかず、イヤイヤながら承諾したのでゐます。それより大黒主は一時も早く旦那さまを亡き者に

致さねば大變だと考へ、石生能姫さまに極内々で今夜の内に鬼熊別をやつつけて了へと、數多の近侍に命じて今宵御館へ襲來することになつたのでムいます。其中の一人なる友行がソツと密書を以て私迄知らしめてくれたのでムいますから、メツタに間違ひはムいますまい。サア旦那さま、さう安閑としてゐる時ぢやムいませぬ。一時も早く防戦の用意を致されるか、但は今の内に此館を逐電なさらねば、呑噬の悔を残すとも及びませぬ。及ばぬながらも熊彦がどこ迄もお供を致し、苦勞艱難を共々に嘗めても、旦那様の御身邊を守らねばなりません。サア早く御決心を……」

と促せば、鬼熊別は高笑ひ、

「アハ、何とマア世の中は面白いものだなア。昨日の敵は今日の味方、今日の味方は明日の敵、昨日に變る大空の雲、千變萬化は世のならひ、どうなり行くも宿世の因縁だ。騒ぐな、あはてな。只何事も此世を造り給ひし梵天帝釋自在天の御心に任すより外に取るべき手段はない」

「それはさうでもムいませうが、ミスミス敵に襲撃されるのを前知しながら傍觀

してゐるのは餘り氣が利かぬぢやありませんか。何とかそれに対する方法手段を講ぜねば、如何してあなたの善が世の中に分りませう。今宵やみやみと彼等に亡ぼされなば、何時の世にかあなた様の恨が晴れませう……否疑ひがとけませう」

「吾々は人も恨まない、又敵も憎まない。妻子には離れ、何程結構な身の上になつたとて、一寸先は分らぬ人の身の上、ただ何事も神に任すより手段がない。神さまが吾々を殺さうと思へば、人の手をお殺し遊ばすだらうし、まだ娑婆に必要があると思召したら、殺さずにおかれるだらう。一寸先は人間の目からは暗だ。只刹那の心を樂しみ、神司としての最善のベストを盡せばいいのだ」

「エ、これ程申上げてても、旦那さまはお聞き下さりませぬか。最早是非には及びませぬ。誠にすまぬ事ながら、旦那さまのお痛はしい姿を見ぬ間にお暇を賜はり、ここに切腹仕ります。左様ならば旦那様」

と涙を夕立の如くパラパラとこぼしながら、早くも懐劍を引抜き、腹十文字に掻切らむとするを、鬼熊別はグツと其手を握り、

「アハ、ハ、ハ、何と氣の早い男だなア。暇をくれと云つても暇はやらぬ、死なし

てくれと申しても決して死なしはせぬぞ。主従の間柄といふものは左様な水臭いものではない。お前が死にたければ、俺の先途を見届けて其後に死んだがよからう。主人より先に勝手氣儘に自殺するとは不心得千萬だ」

ときめつけられて、熊彦は氣を取り直し、  
「これはこれは若氣の至り、血氣にはやり、誠にすまない事を致しました。主人の意志に従ふのは下僕の役、モウ此上は何事も申しませぬ。どうぞ主従の縁切ること文は赦して下さいませ。決して旦那さまより先へは早まつた事は致しませぬ。同じ死ぬのならば、寄せ来る敵と渡り合ひ、旦那さまの馬前に於て、斬死を致します」

「コリヤコリヤ斬死などとは不穩當きはまる。如何なる敵が来るとも、彼がなすままに任しておけ、神さまがよきやうにして下さるだらうから……」

熊彦は、

「ハイ」

と答へてさし俯むき、左右の肩を上げ下げしながら、聲を忍ばせ、しやくり泣き

つつあつた。

大黒主の側近く仕へたる侍従の面々は、丑満の刻限を伺ひ、裏門よりソツと脱け出し、檳榔樹の林に包まれたる鬼熊別が館を指して、黒装束に身をかため、草鞋脚絆を穿ちながら手槍を提げ進み行く。如何はしけむ、如時の間にやら横幅五間ばかりの深溝の橋梁が苦もなく墜落して居た。一同は立止まり、甲「ヤアこりや大變だ。鬼熊別の奴、早くも俺達の行くのを天眼通力にて前知したと見え、橋を落して了ひよつた。下手の橋へまはれば、これより一里半ばかり、さうかうしてる間に夜が明けて了ふ。困つたことが出来たワイ」  
と呟いてゐる。これは熊彦がひそかに部下數人に命じ、主人の危難を救ふべく落させておいたのであつた。

乙「オイ、橋を落して用意をして居るくらいなれば、先方にも準備をして居るだらう。何程鬼熊別に部下がないと云つても館の中に抱へてある部下の者は七八十人は確に居る。何奴も此奴も皆命知らずの強者ばかりだ。到底吾々の力では及ぶ

まい。騙討ならば彼奴等の眠つてゐる内に、奥の間へふみ込んで仕止められぬ事もないが、モウ斯うなつては公然の戦ひだ。オイ今晚はモウ中止したら如何だ。そして敵に油断をさせ、二三日経つた所で、ソツと夜襲を試みることにしようかい

甲「それだと云つて、御主人様が俺達を御信任遊ばし、是非お前達の手をからねばならぬと、涙を流して仰有つたでないか。澤山な強者もあるに、俺達のやうな奥勤めをする者に御命令が下つたのは、實に光榮といはねばらぬ。御信任が厚ければこそ、こんな秘密の御用に立たして下さつたのだ。其御信任に對してもノメ

ノメと引返す譯には行くまいぞ

乙「何程御命令だと言つても、橋は落され、敵は數倍の勢力、到底駄目だ。何とか口實を設けて、今晚はゴミを濁しておかうぢやないか

甲「怪しからぬことをいふな。家來の分際として、旦那様を詐るといふことがあるか。假令命はなくなつても、此使命を果すのが吾々の勤めだ。事の成否はさておき、如何しても良心が承知をせぬ。何とかして此橋を向方へ渡り、吾良心に満



足を與へ、精忠無比の奴と褒められねばならないではないか」

乙「ハ、ハ、ハ、ハ、良心や精忠無比が聞いて呆れるワイ。とは云ふものの、俺も主人の爲、身を粉にしてでも此目的を達したいのだが、翼なき身を如何にせむ、此橋を渡ることが出来ねば何と云つても駄目だ。見よ、大雲山より流れ来る此激流、もし過つて水中に陥りなば、それこそ一もとらず二もとらず、犬に咬まれたやうなものだ」

甲「イヤ實の所、俺もかうはいふものの、俺の良心も良心だ。チツとは怪しくなつて来たよ。不精忠無比の副守護神が、ソロソロ頭をもたげて来さうで……ないワイ。斯うしてゐる内に夜も明方に近くなる。さうすりや、却て俺達の言譯が立つ、あの橋が落ちてゐた爲に、架橋工事に暇取り、とうとう夜があけて了つたら、又出直して夜襲に参りませうと、甘い口實が出来たぢやないか。これ全く大自在天様が吾々を愛し給ふ慈悲の大御心、あゝ有難し勿體なし、願はくは自在天様、此橋はいつ迄もかからず居ります様に……とは申しませぬ。それは鬼熊別の申す言葉、どうぞ一時も早く完全な橋が架り、旦那様の恨みの敵が亡びますや

う、御守護を偏に希ひ上げ奉ります』

乙『ウフ、ウフ、』

一同『イヒ、イヒ、』

(大正一・一・一 一 舊九・一三 松村眞澄録)

#### 第四章 珍客(一〇八八)

鬼熊別の館に午前の五ツ時、妙齡の美人が深編笠を被り、面を包み門前に現はれた。これは讀者の耳には新たななる石生能姫たることは間違ひのない事實である。石生能姫は涼しき細き聲にて、

『もしもし門番さま、一寸此門をあけて下さい。早く早く』

とせき立てる。門番の朝寢坊は漸く起き上り、まだ手水もつかはず、寢ぶた目を擦つてゐた所であつた。

「エー何だ。【やもめ】の御主人の家へ、なまめかしい女の聲で「もしもし門番さま、此門をあけて下さい。早く早く」なんて馬鹿にしてけつからア」と云ひながら門の節孔から一寸外を覗き、

「やあ何だ。深編笠を被つてゐるから、どんな御面相か拜見する事は出来ないが、あの姿のいい事、花顔柳腰とは此事、「窈窕嬋娟たる美人門を叩いて戀しの君を訪ふ」と云ふ幕だな。家の主人も餘程堅造だと思つたが、こんな代物が訪ねて來るとは油斷のならぬものだ。三五教が世が變るとか何とか云つてるが、本當に、

こんな事があると世が變るかも知れない。どれどれ開けてやらうか」と起き上らうとする。一人の門番は寢そばつたまま、

「オイ捨公、無暗に此門をあけちやならないぞ。夜前、遅う家老職の熊彦様が俺を呼んで、此門は寢ずに警戒して居れ。まして此二三日は特に注意しろと云ひ渡した。トツクリ調べてからでないが無暗に開けてはならないぞ。捨公、【すてておけ】」

捨公「それでも權さま、あんな立派なシヤンが鈴の様な聲で頼んで居るのだもの、

これが開けずにをれようかい。男なら又劍呑と云ふ案じも要るが、あんな纖弱い女一人位、門を通してやつた處で劍呑な事があるものか。あまり取越苦勞をせないでも俺はもう堪らぬ様になつた。開けてやるわ」

權公「待てと云つたら待たぬかい。上官の命令に服従せぬか」

「上爛の命に服従して昨夜も餘程酔拂つたぢやないか。お前は、あれほどの上爛を「こりや、一寸熱爛だ」なんて、人に爛させやがつて、あつかましい叱言「ほざ」きやがつて、二日酔で肝腎の使命を忘れやがつて頭も上らぬ癖に、何俺の職權を干渉するのだ。俺は俺の特權を以て開門するのだ」

とふりきつて行かうとするのを、權公はグツと引き戻し、

「待て待て、俺が一つ調べてやらう」

「こりや着物が破れるぢやないか。お前等の様な荒くれ男に袖を引つ張られても、根っから葉っから勘定が合ひませぬわい。同じ引かれるならあのシヤンに引つ張つて破つて貰ふわい……へ、へ、やア、ぼろいぼろい「ぼろけつ」ぢや。これだから門番は止められぬと云ふのだよ。あのスタイルでは随分美人だらう。あの風

體の高尙、言辭の盡すべき限りに非ずと云ふ代物だ。エへ、へ、へ、

權公は委細構はず門戸の節孔から外を眺め、

「ヤア此奴ア大變だ。ウツカリ開ける事は出来ない。どうも合點の行かぬ風體だ。そしてどこかに見覚えのある風體だ。兔も角、御家老様に伺つて來る迄此處に待つて居てくれ。それまで決して何程外から請求しても開けちやならないぞ」

と言ひすて奥をさして權公は驅け出した。門の外より、  
「もしもし門番さまエ、ジレツタイ、早く開けて下さい。鬼熊別様に折入つて急ぎの用があるのだ。サア早う早う、人に見られちや大變だから」

捨公「何、人に見られちや大變だと、愈以て怪しいわい。然し無理はない。家の御主人も奥様の行衛は知れず、たつた一人のお嬢様も永らく何處へお出で遊ばしたか行衛は知れず、こんな立派なお身の上になつても唯一人空閨を守つてゐらつ

しやるのだから、感心なお方だ……と思つてみたが、矢張何處かへあんなものが圍うてあつたものと見えるわい。油斷のならぬ御主人だ。磁石が鐵をひきつける様に何と云つても男と女とは遠いやうで近いものだな。エへ、へ、へ、もしお女中

さま、あなたの腕前は大したものですな。私も木石漢ではありませぬよ。チツとは戀を語る資格のある男、そんな粹の利かぬ、私ぢやムいませぬわい。當家の家の熊彦といふ不粹の男や權助の門番奴が無茶苦茶に糊付物の様に固ばりやがつて、「此門は許しがなけりや勝手にあけちやならないぞ」なんて吐しやがるのですよ。御主人だつてお前さまのやうな「シヤントコセ」の「シヤン」がおいでになつても、心の中ではお喜びでも表向は故意と七むつかしい顔して「當家の主人は一人暮しだから女に用はない、一時も早く追ひ拂へよ」なんて口と心と正反對の事を仰有る事はキマつた生粹だ。そこを御主人様とお前のために粹を利かしてやるのが、家の隅にも捨てておけぬ此捨さまだ。捨てる神さまもあれば拾ふ神もあると云ふ世の中に、拾ふばかりで一寸も捨てぬと云ふ捨さまだ。「すつて」の事で此捨さまが居らなかつたならば權公の奴が、ゴーンと肱鐵砲をかまし、膠も杓子もなく榎で鼻を擦つた様な惨い挨拶でおつ放り出しでもされようものなら、それこそステテコテンのテンツクテンだ。さうなれば折角お前さまも「山野を越えて遙々と訪ねて来て捨てられようとは知らなんだ。エーもう捨鉢だ、捨てて甲斐

ある吾命だ」と自暴自棄を起し、スツテに自害と見えけるが「アイヤ暫く待たれよ。死は一旦にして易し、死にたくば何時でも死ねる、死んで花實が咲くものか」と鼻の下の長い男が飛んで出る幕だが、此捨さまは捨身になつて、職を賭してもお前さまを通過さしてあげませう。あまり捨てた男ではありませぬぞや」

と捨臺詞を振りまきながらガラガラと門を開いた。石生能姫は會釋もせず、ツツと門を跨げるや否や、捨公は小袖をグツと引掴み、

「まゝゝゝ待つて下さい。お前さま、何處の女郎衆か知らぬが、門番にこれだけ厄介をかけて心配をさせながら目禮もせず、御苦勞だとも云はず這入らうとはあまり無躰ぢやムいませぬか。卑しい門番だと思つて輕蔑なさるのか知らぬが、神様のお目から見れば人間として貴賤の別は御座りませぬぞや」

「ヤアこれは門番さま、濟まなかつた。まア許して頂戴、さア早く鬼熊別のお側へ案内しや」

「案内を申上げたいは山々なれど、私には此門を守るだけの役で、大奥まで御案内する権限はムりませぬ」

「何とまア、人種平等の唱へられる世の中へ頑迷固陋な御家風だこと……」

「これこれ女中さま、何仰有います。御無禮千萬にも門口を這入るや否や御家風までゴテゴテ云ふ事がムいますか。サア サア トツトと自由に奥へ行かつしやい。熊彦の家老が屹度居りませうから、それと交渉をした上、御主人様にトツクリと積る海山の話を遊ばし、久し振りに泣き満足をなさいませや」

「これ門番の捨とやら、お前は何と云ふ嫌らしい事をいふのだい。ちと心得なされや」

「ちヨツコと仰有いますわい。へん」

と鼻の先で笑つてゐる。そこへ羽織袴厳めしくバサバサと袴の音をさせながら權助を伴ひやつて來たのは熊彦であつた。熊彦は一目見るより腰をかがめ叮嚀に會釋し、

「あゝ貴女はイ……」

と云ひかけて、

「何處の御女中か知りませぬが、何卒奥へ御通り下さいませ。さア私が御案内を



致いたしませう。オイごんすけ權助、捨造すてぎょう、門番もんばんを確しつかり致いたせよ。さア御案内ごあんない致いたませう。失しつ禮れいながらお先さきへ参まゐります。私わたしの後あとについて御出おいで下ください。主人しゅじんもさぞお喜よろこびでムごんりませう」

といそいそとして石生能姫いそのひめを伴ともなひ、館やかたの奥深おくふかく姿すがたをかくした。

捨公すてこう「オイごん權、權ごんさま、一體いつたいありや何なんだい。家うちのレコぢやあるまいかな」

と親指おやゆびと子指こゆびとを出だして見みせる。

權公ごんこう「ウン」

捨公すてこう「(熊彦くまひこの聲色こゑいろ)これはこれはハイ、貴女あなたはイ……いやお女中ぢよちゆうさま、さぞさ

ぞ御主人ごしゅじん様さまがお喜よろこびでムごんりませう。サア私わたしが御案内ごあんない致いたしますから失禮しつれいながらお先さき

へ……なんて吐ぬかしやがつて、お竈かまどの不動ふどうを焼木杭やけぼくくひでたたかれた様やうな顔かほをしてゐる

熊彦くまひこさまの顔かほの紐ひもがサツパリ解ほどけて了しまひ、奥おくへ這入はいりやがつた時ときの態さまは見みられた

ものぢやないな。男をとこばつかりの此館このやかたへ偶たまに女をんながで出でて來くると騒さわがしいものだ。萬綠ばんりよく

叢中紅そうちゆうこう一點いってんだから、此館このやかたもチツとは春はるめき渡わたるだらう。今迄いままではあまり陰氣いんきなも

のだから、此このお屋敷やしきの梅うめまで何なんとなく陰氣いんきに咲さき、鶯うぐひすまでがド拍子びやうしのぬけた鳴なき

聲をしやがると思つてゐたが、これからは天國淨土が出現するだらうよ。アーア俺も俄に女房が欲しくなつて來たわい」

「ウフ、、馬鹿だなア」

「馬鹿は貴様の事だよ。あんなナイスを見てニツコリともせぬ奴が何處にあるかい。無情無血漢奴、戀の味を知らぬ人情を解せぬ奴だ。あゝ困つた奴と同じ門番をさせられたものだな。朝から晩まで酒ばつかり喰つて、お前は門を開くことと酒を喰ふことより藝がないないア」

とまだ昨夜の酒の残りが祟つて無性矢鱈に吐いてゐる。權助は物も言はず拳骨を固めて捨の頭を三つ四つカツンカツンと殴りつけ、悠々として門の傍の番所に歸り行く。

館の大奥には宣傳歌が聞えて來た。

「バラモン教の御教を  
開き給ひし常世國  
大國別の神様は  
普く世人を救はむと

心を盡し身を竭し

遠き海原乗り越えて

筑紫の島やイホの國

埃及都に現れまして

教を開き給ひしが

三五教の言靈に

打ちはじめられて顯恩の

郷に數多の郎黨を

率ゐて世をば忍びまし

教の基礎を開く折

フトした事より幽界の

神とはならせ給ひけり

教司を初めとし

信徒等も悲しみて

上を下へと騒ぎしが

鬼雲彦の神司

漸う之を鎮めまし

自ら代つて後をつぎ

大棟梁と自稱して

大國彦の神靈に

仕へ居たりし折もあれ

神素盞鳴大神の

生ませる八人乙女等

太玉神の司等が

又もや現はれ來りまし

生言靈を發射して

きたため給へば大棟梁

鬼雲彦を初めとし

一同此處を立ち逃れ

天ヶ下をば遠近と

彷徨ひ巡りし悲しさよ

鬼雲彦と吾々は

心を協せ力をば

一つになしてバラモンの

再起を圖りし甲斐ありて

空照り渡る月の國

花咲くハルナの都にて

再び開くバラモン教

七千餘國の大半は

残らず教に歸順して

稍安心と思ふ折

油斷を見すまし曲津神

大黒主の體に入り

神の司にあるまじき

惡逆無道の振舞を

日に夜に勧め給ひつつ

道を汚すぞうたてけれ

側に仕ふる惡神の

輩の者に遮られ

二人の仲に溝渠をば

穿たれたるぞ嘆てけれ

あゝ惟神々々

バラモン教の嚴靈

幸はひまして逸早く

大黒主の身魂をば

拂ひ清めて眞心に

かへらせ給へ惟神

神の御前に祈ぎまつる

と一絃琴を弾きながら聲も靜かに歌ひゐるのは、此家の主人鬼熊別であつた。かかる處へ熊彦の案内につれて恥かしげに靜々と入り來る女は石生能姫である事は云ふまでもない。

熊彦は襖を押開け兩手を支へ、

「旦那様、遙々と石生能姫様が只一人御訪問になりました。何事が起つたのでは

御座いますまいか。何卒詳しくお話を聞き下さいませ」

と云ひながら吾居間に下る。鬼熊別は一目見るより驚いて、

「よう、貴方は石生能姫様、どうして又お一人、拙宅をお訪ね下さいましたか。

何は兔もあれ、そこは端近、先づ先づこれへお直りを願ひます」

「ハイ、突然お邪魔を致しまして申譯が御座りませぬ。左様なれば御免蒙りまして通らして頂きますせう」

(大正一一・一一・一 舊九・一三 北村隆光録)

## 第五章 忍ぶ戀（一〇八九）

鬼熊別、石生能姫の二人は奥の間に端坐し、雙方から互に顔を見合せ、暫し沈黙の幕がおりた。鬼熊別は心の中にて……夜前の熊彦の報告と云ひ、又途中の大橋を落しおきたるにも拘らず、女の身として供をもつれず、身分をも辨へず訪ね來りしは何か深き仔細のあるならむと、口をつぐんで石生能姫の言葉の切出しを待つてゐた。石生能姫も亦今更の如く鬼熊別の儼然たる態度に氣を吞まれ、胸に積りし數々を述べ立てむとしたる事の、何時の間にやら、どこともなく消え失せて、出す言葉も知らず稍躊躇狼狽の態にて首を傾け、默然として差俯むいてゐる。かくして四半時ばかり沈黙の内に時は容赦なく過去つた。思ひ切つたやうに石生能姫は稍顔を赤らめて、

「獨身生活を遊ばす貴方様のお宅を女の分際として供をもつれず只一人、御訪問申上げましたに就ては、貴方も嘸御迷惑でムいませう。奥様やお嬢様は三五教とやらに入信遊ばして、貴方は只一人苦節を守り、獨身生活をつづけて、お道の爲

お國の爲に晝夜御辛勞を遊ばす、其見上げたお志、實に感服の至りでゝいます。鬼熊別は漸くにして口を開き、

「御用は何でゝいますか。どうぞ手取り早く仰有つて下さいませ。又々大黒主様の嫌疑を受けては互の迷惑、サ、早く御用の趣を」

とせき立てれば、石生能姫は悲しげに、涙聲にて、

「ハイ何から申上げて宜しいやら、只今迄斯うも申上げたい、あゝも申上げたいと胸に一杯になつて居りましたが、貴方の儼然たるお姿を拜して、俄にどつかへ隠れて了ひました。どうぞゆるゆると申上げますから氣を長くお聞取り下さいませ」

せ

「私は御存じの通り、大黒主様に種々雑多の嫌疑を蒙り、左守の聖職まで取剥がれ、何となく兩者の間には、形容し難き妖雲漂ひ、今にも雨が風が雷鳴かといふ殺風景な空氣が包んで居りましたが、昨日の外教征伐の相談の際、貴方様のお取成しに依つて再び元の左守に任せられ、私としては身に餘る光榮でゝりますが、之が却て私の爲には大なる災とならうも知りませぬ。大黒主様が心の底より御任

命ならば私も喜んでお受けを致しますが、代理權の御執行とはいへ、決して大黒  
主様は私を御信任遊ばしてゐる筈は無いませぬ。早速御辭退申さむかと其場で思  
ひましたが、さうしては物事に角が立ち、圓滿解決が出来難い、又外に向つて勁  
敵を控へ、兵馬の勢力は大部分外に出で、ハルナ城は守り薄弱となつた此際、兄  
弟牆にせめぐ如き愚を演じてはお道の不利益と存じまして、口まで出かけてゐた  
辭退の言葉を呑みこみ、無念をこらへて、左守たることをお受け致したやうな次  
第でゝいます。實の所を申せば、私の心は最早浮世が厭になり、地位も名望も財  
産も女房も欲しくはありません。暫く山林に隱遁して、光風霽月を友とし餘生を  
送りたいきは山々なれども、バラモン教の今日の内情を見ては、左様な勝手なこと  
も出来ませず、大神様に對し奉り、これ位不孝の罪はないと存じ、心ならずも御  
用を承はることに致しましたやうな次第でゝいます。そして貴女、途中に何か變  
つたことは有りませなんだかな」

「ハイ別に變りもなかつた様ですが、此方へ參る途中、九十九橋が何者にか打落  
され、已むを得ず一里ばかり下手へ參り、百代橋を渡つて、お館を訪ねて參りま



した。途上傳ふる所によれば、何でも斯う申すとお氣に「さへ」られるか存じませぬが、貴方様の身内の者が、何等かの考へで打落したとか云ふ噂でムいます。どうぞ此事が大黒主に聞えねばよいがと實は心配を致しつつ参つたのでムいます。又一つ嫌疑の種がふえましたな。モウ私は何事も覺悟を致して居ります。一切萬事神様に任した身の上、如何なる災難がふりかかつて來ようとも、少しも恐れは致しませぬ。併し又貴女が一人でお越しになつたに付いては合點のゆかぬことがムいます。あれ丈鬼雲彦様が嫉妬心深く、束の間も貴女の側を離れないといふ御方が今日に限つて、只一人外出を許されるとは、合點のゆかぬことでムいます。大方夫婦喧嘩でも遊ばして、貴女は城内をぬけ出して來られたのぢやムいませぬか」

「イエ決して決して、夫の諒解を得て、只一人忍んで参りました」

「ハテ、益々合點が行かぬ。これには何か深い計略のあることだろう……イヤ石生能姫殿、打割つて申さば、貴女の如き毒婦に物申すのも汚らはしうムる」

「エ、何と仰せられます。それほど妾をお憎みでムいますか。そりやマア如何し

た譯で……」

「譯は言はなくても、貴女のお心にお尋ねなされば、キツと分るでせう。よく考へて御覽なさい。大切な奥様を放出し、貴女は「のめのめ」と其後釜にすわり、平氣の平座で女王面をさらしてゐる。そのお振舞が鬼熊別には氣に入りませぬ。左様なことをなさるものだから、神様の御怒りにふれ、三五教やウラル教がハルナの都に向つて攻め寄せて来るやうになつたのです。一日も早く前非を悔い、奥様に一つはお詫の爲、一つは大黒主様の御改心の爲に、立派に自害をしてお果てなされ。それ丈の眞心がなくては、到底此神業はつとまりませぬぞ」

と儼然として叱るやうに言つてのけた。其權幕の烈しさに、石生能姫は返す言葉もなく、ワツとばかりに其場に泣き倒れた。

暫くにして目をおしぬぐひ、顔をあげ、細き聲にて、

「あなたの御言葉は眞に御尤もでゝいます。妾もあなたと同感、此事に就いてはどれ丈胸を痛めて居るか分りませぬ」

「それ程胸を痛めるやうなことを何故なさいますか。貴女の決心一つで、如何で

もなるぢやありませんか

「夫の恥を申上げて不貞くされの女だとおさげすみを蒙るか存じませぬが、モウ斯うなつては一伍一什を申しあげねばなりませんまい。どうぞ暫く聞いて下さいませ。私は元は三五教の信者の娘、石生子と申しました。幼少より兩親に生別れ、彼方此方と彷徨ふ中、大黒主様が狩に散歩の途中、私を一目見るより、吾家へ來れと仰有つて連れ歸り、奥様の小間使として御夫婦の方に可愛がられ、仕へて居りました所、ある夜、恥かしながら、大黒主様の無理難題、奥様にすまぬことは知りながら女の心弱き所から、御機嫌を損ねまいと、大黒主様の要求に應じました。それより御主人は朝から晩迄、私を手許に引寄せ、奥様に對して小言ばかり仰有る様になり、私は立つても居られないので、いろいろと御意見申し上げましたけれども、お聞き遊ばさず、とうとう奥様を、あの通り追出してお了ひになりました。私も世間からいろいろと悪評を立てられ生きてゐる甲斐もなく、外を歩くのも恥かしく、一層のこと自害して心の潔白を示し、奥様にお詫致さうかと幾度となく自害の覺悟をきめました。が、どこともなく中空に聲聞え、待て待

てと止められるので、面白からぬ月日を今日迄永らへて来たのでムいます。所が  
お館に奸者佞人跋扈し、あなた様の御身の上を悪しきさまに大黒主に申上ぐる者、  
日々其數を加へ、主人は御存じの通りの短氣者故、あなた様をふん縛り、厳しき  
刑罰に處せむと息まくこと一再ならず、之を思へば私は今死んでも死なれない。  
主人が如何なる事でも、私の言ふ事なら聞いてくれるのを幸ひ、バラモン教の柱  
石をムザムザ失つては大變だと、いろいろと今日まで諫言を致し、蔭乍らあなた  
の御身邊を守つて来た者でムいます。どうぞあなたもお道を思ひ、國を思ふ眞心  
をモ一つ發揮して、私と共に此教と國を守つて下さいませうまいか。今私が自害し  
て果てたならば、あなた様の身邊は忽ち危くなるでせう、否々あなたは神力無雙  
の神司、ヤミヤミ討たれはなさいませうまいが、内憂外患の烈しき今日、兩虎共に  
鎬を削つて争ふ時は、勢共に全からず、どちらか傷ついて倒れ、バラモン教國の  
覆滅は火を睹るよりも明かです。何卒この道理を聞分けて、私の精神を  
お悟り下さいませう様に御願ひ申します。此事の御相談を申上げたさに、主人の手  
前を甘くつくるひ、あなたの腹中を探つて來ると申して參りました。

と涙ながらに一伍一什を物語った。鬼熊別は稍顔色を和らげ、

「石生能姫殿、左様でムったか。かかる清き尊きお志とは知らず、今まで貴女を毒婦、奸婦と見くびり憎んで居りましたのは誠に私が不明の致す所、どうぞ赦して下さい。何を言ふも暗黒の世の中、到底人間の心の底は分るものでは無いませぬ。私だつて其通り、數多の佞人ばらに讒訴され、圓満なるべき大黒主様との仲に垣が出来たのも全く互の誤解からで無いませう。大黒主様もあの様な悪い方ではなかつた筈ですが、何時の間にやら稍御安心なさつた虚に乗じ、曲神に身魂を襲はれ給うたのでムりませう。あゝ何とかして其惡魔を退散させたいものでムいますなア」

「ハイ有難う、よく云つて下さいました。どうぞあなたはお道の爲、國の爲と思召し、不愉快を忍んで、御登城下さいまして、左守としての職責を完全にお盡し下さいませ。私が及ばずながら内助の勞を取りますから。併し乍ら前以て申し上げておきますが、大黒主様は中々容易に改心は出来ません。イソの館に向つた鬼春別やカルマタ國に向つた大足別が一敗地にまみれ、往生をした上でなくては、

到底あのキツイ我は折れますまい。どうぞ、あなたはお道の爲、國の爲に身を挺して刃の中をくぐる大覺悟を以て御出勤を願ひます。幸ひ私は大黒主の寵愛を得て居りますから、其段は大變に好都合でムります。折を見て鬼雲姫様を元の奥様に直つて貰ふやうに取計らひませう。それに付いては到底私一人の力で及びますまいから、あなたと私と力を併せて、ハルナの城内を先づ清め、惡魔を卻けようではムいませぬか」

「そこ迄の女の貴女の御決心、イヤもう實に感服仕りました。左様なれば、私も貴女の眞心に感じ、身を挺して大改革にかかりませう。何卒御内助を願ひます様、實の所昨夜あなたは御存じなけれども、大黒主様の御内命にて近侍の者等數十名、吾館へ襲來し、夜陰に紛れて吾命を奪はむと致されました。其計略を或者より承はり、家老の熊彦が計らひにて、あの橋を落させておいた様な次第でムいますから、何れ大黒主様より一問題が私に對し持上がるものと、覺悟は致して居ります石生能姫はこれ聞いて驚き呆れ、身を震はしながら、ソリヤマあ眞實でムいますか、大變な事になるとここでムいました。ヤ私がこれ

から歸りまして、それとはなしに探つてみませう。又あなたに難題のかかるやうなことは決してさせませぬから……あゝモウ暫く御邪魔が致したのでムいですが、餘り長くなると又疑惑の種を蒔きますから、お名残惜しうムいますが、これにて失禮致します……」

と妙な目使いひにて鬼熊別を見守つた。あゝ斯くの如き心正しき石生能姫も戀には迷ふ心の闇、上下の隔なしとはよく云つたものである。鬼熊別は石生能姫に左様な心ありとは、夢にも知らず、嬉し涙を流しながら、石生能姫の手を固く握り、「コレ姫様、随分氣を付けなさいませ。貴女の體は大切なお身の上、私と貴女と力を合はして居りさへすれば、ハルナの都は大丈夫でムいます」

と一層強く手を握りしめた。石生能姫は日頃思ひ込んだ鬼熊別に手を固く握られ、嬉しさに胸を轟かせ、覺束なげに細き手を伸べて、力限り鬼熊別の手を握り返し、流し目に顔を見上げて、ホロリと一雫涙の雨と共に名残惜しげに後振り返り、館をしづしづと立つて歸り行く。鬼熊別は玄關口まで姫を見送り、そこに別れを告げ、午後は必ず參勤すべきことを約して、暫しの別れを告げた。後に鬼熊別

は神殿しんでんに向むかひ、感謝かんしゃ祈願きぐわんの祝詞のりとを奏上そうじやうし………あゝ未だいまバラモン神しんは吾等われらを捨すて  
給たまはざるか、有難ありがたし勿體もつたいなや………と兩手りやうてを合あはせ、感謝かんしゃの涙なみだを瀧たきの如ごとく流ながすので  
あつた。

(大正一一・一一・一 舊九・一三 松村眞澄録)

## 第二篇 寒梅照國かんばいせうこく

## 第六章 仁愛の真相じんあい しんざう「一〇九〇」

照國てらくにわけ別は岩彦いはひこ、照公てらくこう、梅公うめこうを從したがへ清春山きよはるやまの岩窟がんくつを立出たちいでて、西南せいなんの原野げんやを跋渉ばつせふ  
しながら漸やうやくにしてライオン河がはの二三里にさんり手前てまへのクルスの森もりまで進すすみ來きたり、爰ここに一いつ



行は足を休めながら神徳の話に時を移し、照、梅二人の間に答へむと身を起して  
厳かに至仁至愛の真相を歌ひ始めた。

その歌、

三千世界の救世主

五六七神の眞實は

大慈大悲の大聖者

垢なく染なく執着の

心は卵の毛の露もなし

天人象馬の調御師ぞ

道風徳香萬有に

薫じ渡りて隈もなし

智慧恬かに情恬か

慮凝いよいよ静なり

意悪は滅し識亡じ

心は清く明かに

永く夢妄の思想念

断じて水の如くなり。

身は有に非ず無に非ず

因にもあらず縁ならず

自他にもあらず方に非ず

短長に非ず圓ならず

出にも非ず没ならず

生滅ならず造ならず

爲作にあらず起に非ず

坐にしも非ず臥にあらず

行住に非ず動ならず

閑靜に非ず轉に非ず

進にも非ず退ならず

安危にあらず是にあらず

非にしもあらず得失の

境地に迷ふ事もなし

彼にしもあらず此にあらず

去來にあらず青にあらず

赤白ならず黄ならず

紅色ならず紫にあらず

種々色にもまた非ず

水晶御魂の精髓を

具足し給ひし更生主

是ぞ彌勒の顯現し

世界を照らす御真相

仰ぐもたかき大神の

絶對無限の御神徳

蒙る神世こそ樂しけれ

戒定慧解の神力は  
知見の徳より生成し

三昧六通は道品より  
慈悲十方無畏より起る

衆生は善業の因より出す  
之を示して丈六紫金

無限の暉を放散し  
方整に照らし輝きて

光明遠く明徹す  
毫相月の形の如

旋りて項に日光あり  
旋髮色は紺青に

項に肉髻湧出し  
眼は淨く明鏡と

輝き上下にまじろぎつ  
眉毛の色は紺に舒び

口頬端正唇舌は  
丹華の如く赤く好く

四十の齒竝は白くして  
珂雪の如く潔らけし

額は廣く鼻脩く  
面門開けてその胸は

萬字を表はす師子の臆  
手足は清く柔かく

千輻せんぶくの相さうを具そなへまし  
腋やぐと掌しやうとに合がふ纒まんありて

内外ないげに握にぎり臂ひぢ脩ながく  
肘かいなも指ゆびも纖ほそく長ながし

皮膚ひふ細こまやかに軟やほらかく  
毛髮まうはつ何いづれも右いうせん旋せんし

踝らしつ露あらはに現あらはれて  
陰馬いんめの如ごとくに藏かくれたり

細ほそけき筋すぢや銷とちの骨ほね  
鹿しかの膊ふち腸やうの如ごとくなり

表裏へうり映えい徹てついと淨きよく  
垢あかなく穢えなく濁たく水すゐに

染そまることなく塵ちり受うけず  
三十三相さんじふさんさう八十種はちじつしゆかう好かう

至嚴しげん至聖しせいの靈相れいさうなり  
相さうや非相ひさうの色いろもなく

萬有ばんいう一切いつさい有相いうさうの  
眼力がんりき對絶たいぜつなしにけり

五み六ろく七しちは無相むさうの相さうにして  
而しかして有相いうさうの身みに坐いまし

衆生しゆじやうの身相しんさうその如ごとく  
一切いつさい衆生しゆじやうの歡喜くわんきし禮れいし

心こころを投とうじ敬うやまひを  
表へうして事ことを成じやうぜしむ

是これぞ即すなはち自高じかう我慢がまん  
被除ばつぢよされたる結果けつくわにて

かくも尊たふとき妙色めうしきの  
軀くをこそ成就じやうじゆし給たまひぬ

一切衆生悉く いっさいしゅじやうしゅとく その神徳に敬服し しんとく けいふく

歸命し信仰したてまつり きみやう しんかう 無事泰平の神政を ぶじ たいへい しんせい

歡喜し祝ひ舞ひ狂ひ くわんき いは まま くる 千代も八千代も萬代も ちよ やちよ よるづよ

榮ゆる神世を仰ぐなる さか かみや あふ 原動力の太柱 げんどうりよく ふとばしら

仰ぐも畏き限りなり あふ かしこ かぎ 三五教は神の道 あななひけう かみ みち

佛の道の區別なく ほとけ みち くべつ 只々眞理を楯となし ただただしんり たて

世人を救ふ道なれば よびと すく みち 神の教に表はれし かみ をしへ あら

彌勒の神の眞實を みろく かみ しんじつ 佛の唱ふる法により ほとけ とな のり

爰にあらあら述べておく ここ あゝ惟神々々 かむながらかむながら

御靈幸はひましまして みたま さち 三五教の御教は あななひけう みをしへ

古今を問はず東西を ここん と とうざい 區別せずして世の爲に くべつ せよ ため

研き究めて神儒佛 みが きは しんじゆぶつ その他の宗教の眞諦を た しうけう しんたい

覺りて世の爲人の爲 さと よ ためひと ため 誠を盡せ三五の まこと つく あななひ

教司はいふも更 をしへつかさ さら 信徒たちに至るまで まめひと いた

あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸はひましませよみたまさち

神素盞鳴大御神かむすさのをのおほみかみ

巖の御前に願ぎ奉るいづみまへにねまつ

照公てるこう 宣傳使様せんでんしさま、今の歌いまうたは五六七大神様の御真相みろくのおほかみさまごしんさうぢやなくて木この花姫はなひめの神様の様かみさまやう

ですなあですなあ

照國てるくに 木花姫このはなひめの神様かみさまも矢張りやは五六七大神様みろくのおほかみさまの一部いちぶ又は全部ぜんぶの御活動ごくわつどうを遊あそばすのだ

よ。又また天照大御神あまてらすおほみかみと顯現遊けんげんあそばすこともあり、棚機姫たなばたひめと現あらはれたり、或あるひは木花咲耶このはなさくやひ

姫めと現あらはれたり、觀自在天くわんじざいてんとなつたり、觀世音菩薩くわんぜおんぼさつとなつたり、或あるひは蚊取別かとりわけ、蚊々かがと

虎ら、カール、丹州等たんしうなどと現あらはれ給ふ事たまもあり、素盞鳴尊すさのをのみこととなる事こともあり、神様かみさまは申まを

すに及およばず、人間にんげんにも獸けだものにも、蟲族むしけらにも、草木くさきにも變現へんげんして萬有ばんいうを濟度さいどし給たまふの

が五六七大神様の御真相みろくのおほかみさまごしんさうだ。要えうするに五六七大神みろくのおほかみは大和魂やまとたましひの根源神こんげんしんとも云いふべき

神様かみさまだだ

大和魂やまとたましひとはどんな精神せいしんを云いふのですか、神心かみこころですか、佛心ほとけこころですか

神心かみこころよりも佛心ほとけこころよりも、もつともつと立派りっぱな凡すべての眞しん、善ぜん、美びを綜合統一そうがふとういつした

身魂を云ふのだ。これを細説する時は際限がないが大和魂と云ふのは、佛の道で云ふ菩提心と云ふ事だ」

「神と佛との區別は何處でつきますか」

「神と云ふのは宇宙の本體、本靈、本力の合致した無限の勢力を總稱して眞神と云ふのだ。佛と云ふのは正覺者と云ふ事で、要するに大聖人、大偉人、大眞人の別稱である」

「大和魂について大略を聞かして下さい」

「大和魂は佛の道で云ふ菩提心の事だ。此菩提心は三つの心が集つて出来たものだ。其第一は神心、佛心又は覺心と云つて善の方へ働く感情を云ふのだ。要するに慈悲心とか、同情心とか云ふものだ。第二は勝義心と云つて即ち理性である。理性に消極、積極、各種の階級のある事はもとよりである。理性の階級については到底一朝一夕に云ひ盡されるべきものでないから略する事として、第三は三摩地心と云ふのだ。三摩地心とは即ち意志と云ふ事である。尚よき感情とよき意志とよき理性と全然一致して不動金剛の大決心、大勇猛心を發したものが三摩地心

であつて、以上三者を合一したものが菩提心となり大和魂ともなるのだ。何程理性が勝れてゐても知識に達してゐても、知識では一切の衆生を濟度する事は出来ない。知識あるもの、學力ある者のみ之を解するもので、一般的に其身魂を救ふ事が出来ない。これに反して正覺心所謂神心、佛心は感情であるから、大慈悲心も起り、同情心もよく働く。此慈悲心、同情心は智者も學者も鳥獸に至るまで及ぼすことが出来る。これ位偉大なものはない。ウラル教は理智を主とし、バラモン教は理性を主とする教だ。それだから如何しても一般人を救ふ事は出来ないのだ。三五教は感情教であるから、一切萬事無抵抗主義を採り、四海同胞博愛慈悲の旗幟を押立てて進むのであるから、草の片葉に至るまで其徳に懐かぬものはない。今日の如く武力と學力との盛んな世の中に慈悲心のみを以て道を拓いて行かうとするのは、何だか薄弱な頼りないもの様に思はるが、決してさうではない。最後の勝利はよき感情即ち大慈悲心、同情心が良をさすものだ。それだから清春山の岩窟に行った時もバラモン教の悪人どもを赦したのだ。これから先へウラル教、バラモン教の連中と幾度衝突するか知れないが、決して手荒い事をして



はなりませぬぞ。どちらの教派も左手に經文を持ち、右手に劍を持つて武と教と相兼ねて居るから、餘程膽力を据ゑて居らぬと、無事に此目的は達成しないのだ。岩彦「おい梅彦、オットドッコイ照國別様、隨分醜の岩窟の探險時代とは變りましたね。言依別様のお側近くみられたと見えて、實に立派なお話が出来るやうになりました。序に一つお尋ね申したいのは、此岩彦が何時も心の中に往復してゐる疑問がある。それはバラモン宗と云つたり、時によつてはバラモン教と云つたり、或はバラモン藏とか、乗だとか部だとか云ひますが、此區別はどう説いたら宜いのですか」

照國「教と云ふのも、宗と云ふのも、乗と云ふも、藏と云ふも、部と云ふも、矢張り教と云ふ意味だ。如何云つても同じ事だ」

「いや有難う。それで諒解しました。然し乍ら佛教の教典を經文と云ひますが、其經文の經は教の教とは違ひますか」

「それは少しく意味が違ふ。經と云ふ字は、經絲と云ふ字だ。今迄の教は凡て經絲ばかりだ。緯絲がなければ完全な錦の機が織れない。それだから既成宗教はど

うしても社會の役に立たない。經絲ばかりでは自由自在に應用する事が出来ぬ。あななひけうくにはるたちのみことさま三五教は國治立尊様の靈系が經絲となり、豊國姫尊様の靈系が緯絲となり經緯相揃うて完全無缺の教を開かれたのだから、如何しても此教でなくては社會の物事は埒があかない。要するに今迄の凡ての教は未成品だ、未成品と云つても宜い様なものだ。故に三五教では教典を經文ともコーランとも云はず、神諭と稱へられてゐるのだ」

「やあ、それで胸の雲がサラリと晴れ渡つて、眞如の日月が身邊に照り輝く様な氣分となつて來ました。流石は照國別と云ふお名前を頂かれた丈あつて變つたものですな」

斯く話す折しも、向ふの方より數十騎の人馬の物影、此方に向つて蹄の音勇ましく一目散に驅來るのであつた。照國別は三人に目配せし、木の茂みへ姿を隠し、乗馬隊の何者なるかを調べむと、息を凝らして窺ひみる。先鋒に立つた馬上の將軍はバラモン教にて可なり名の聞えた片彦であつた。彼等の一隊は今やライオン河の激流を渡り、急速力を以てウブスナ山のイソ館へ進撃せむとする途中であつ

た。體からだの疲つかれを休やすめむと四よにん人が潛ひそむ此この森林しんりんに馬うまを乗のり捨すて、暫しばし腰こしを卸おろして雜談ざつだんに耽ふけつてゐる。

(大正一一・一一・一 舊九・一三 北村隆光録)

## 第七章 文珠〔一〇九一〕

照國てるくに別わけは照公てるこう、梅公うめこう、岩彦いはひこの宣傳使せんでんしと共にクルスの森もりに休息きうそくする折をりしも、前方ぜんぱうよりイソ館やかたに向むかつて進擊しんげきする鬼春別おにはるわけの部將ぶしやう片彦かたひこの一隊いったいの來きたるに會あひ、潛ひそかに木きの茂しげみに隠かくれて様子やうすを窺うかがひつつあつた。片彦かたひこの一隊いったい數十騎すうじつきはライオン河がはを渡わたり、百ひやく丁餘ちやうあまりの道みちを疾驅しつこして、漸やっやくクルスの森もりに到着たうちやくし、人馬じんばの休息きうそくをなさむと馬うまを乗のり捨すて、森もりの中なかに逍遙せうえうする者もの、又または横よこたはつて雜談ざつだんに耽ふける者ものもあつた。此この一隊いったいはイソ館やかたに向むかふ攻撃軍こうげきぐんの先鋒隊せんぽうたいとも斥候隊せきこうたいともいふべき重要ぢゆうえうの任務にんむに就ついてゐる隊列たいれつである。

暫く休息の上、片彦は再び馬にヒラリと飛乗り、人員點呼をなし、馬上より大音聲を張り上げて下知して曰く、

「之より先は三五教の勢力範圍ともいふべき地點である。清春山は大足別將軍、今やカルマタ國へ進軍の爲不在中なれば、守り少く、到底力とするに足らず。本隊のランチ將軍は、後より進み來るべしと雖も、吾等は吾等としての任務あり。四邊に心を配り、左右を窺ひつつ、之より以北は最も注意を要す」と命令しつつあつた。木蔭に隠れし照國別一行はイソの館に進軍の先鋒と聞き、假令少數と雖も此儘通過せしむる事は出來ない。何とかして此先鋒隊を追ひ捲らねばならない。後より來る玉國別に對しても、照國別は敵に遭ひながら之を見のがし、ウブスナ山に近付かしまたりと言はれては、吾々の職務が盡せない………と腕を組み思案に暮れてゐた。

岩彦は心を焦ち、  
「照國別さま、大變な事になつて來ました。片彦の一隊と見えます。之を奥へ進ませてはなりませんから、一つここで何とか方法を講じようではありませんか。」

最前のお話に依れば、三五教は何處までも無抵抗主義とは云はれましたが、敵は武力を以て進み来るもの、いかに言靈の妙用ありとて、十數倍の敵に向つて戦ふは容易の業ではありませんまい。如何しても武力に訴へなければ駄目でせうから、あなたは宣傳歌を歌ひ魔神の靈を畏服させて下さい。此岩彦は得意の杖を使ひ、敵の眞只中に躍り込んで、一步も之より奥へは進入させない様に致しますから、決して敵を殺傷する様な事は致しませぬ。只敵を威喝して、元へ追つ返す迄の事ですすから………」

照國「先鋒隊として黄金姫、清照姫が行つて居る筈だから、後へ追つ返せば、却て兩人を後より攻め来る敵軍と共に挟み撃ちに遭はず様なものだ。ハテ困つたことが出来たものだ。吾々の目的はハルナの都の大黒主を歸順さすのが使命の眼目で、彼等如き木端武者を相手にすべきものではない。ぢやといつて、みすみすイソ館へ進撃する一隊と知つて、之を防止せざるは吾々の職務を果さざるといふもの。兔も角言靈を以て彼片彦が一隊に向ひ戦鬪を開始してみよう。それでゆかない時は岩彦の考への通りに杖を使つて敵を散亂させる方法を採るより仕方はある

まい。先づ第一に神様のお力を借つて善戦善闘する事にせう。照公、梅公もその用意を致すがよからう」

照公「始めて敵の軍隊に出會し、こんな愉快な事はありません。わが言靈の神力を試すは此時でムいませう」

と潔く言つてのけたものの、何とはなしに其聲は震うてゐた。

梅公「宣傳使様、萬々一敵の馬蹄に踏み躪られ、命危くなつた時は抵抗するかも知れませぬから、それ丈御承知を願つておきます。私は岩彦さまのやうに武器を使ふ事は不得手です、が何とかして防衛をなし、一身を守らねばなりません」

と大事の使命を忘れて只自分の安全に就てのみ心を痛めて居る様子であつた。岩彦は早くも杖をしごいて、弦を離れむとする間際の矢の如く、體を斜に構へて、照國別の命令を今や遅しと待つて居た。此時敵は已に馬首を竝べて北進せむとする様子が見えて來た。

照國別は聲も涼しく宣傳歌を歌ふ。

常世の國の自在天

バラモン教の神館

ハルナの都に現はれて

大黒主が郎黨を

再び勢盛り返し

自高自慢の鼻高く

鎮まりいますイソ館

其扮装の勇ましさを

天地を揺がせ雷電や

三五教の言靈に

あゝ惟神々々

無謀の戦を起すより

立復りませ片彦よ

尊き神の貴の御子

大國彦を祀りたる

空照り渡る月の國

鬼雲彦の又の御名

呼び集ひつつ日に月に

傲り驕ぶり今は早

神素盞鳴大神の

進撃せむと進み來る

片彦いかに勇あるも

風雨を自由に叱咤する

いかでか敵し得ざらむや

神の心に見直して

一日も早く眞心に

われも神の子汝も亦

御子と御子とは睦び合ひ

誠まこと一つの天地あめつちの

神かみの大道おほぢに叶かなひつつ

天あめの下したなる神人しんじんを

救すくひ助たすけて神國かみくにの

柱はしらとならむ惟神かむながら

神かみに誠まことを誓ちかひつつ

汝なれが軍いくさに立たち向むかひ

言靈車ことたまぐるま挽ひき出いだす

われは照國てるくに別の神かみ

此世このよを照てらす照公てるこうや

神かみの御稜威みいづも一時いつときに

開ひらいて薰かをる梅公つめこうや

心こころも固かたき宣傳使せんでんし

岩彦司いはひこつかさの四人連よたりづれ

イソの館やかたを立出たちいでて

ここ迄まで進すすみクルス森もり

木蔭こかげに潛ひそみ横よこたはり

汝なが一隊いったいの物語ものがたり

完全うまらに委曲つばらに聞終ききはり

覺さとりし上うへは如何いかにして

汝なれを此儘このまま通とほさむや

鬼春別おにはるわけの部下ぶかとます

汝片彦將軍なんぢかたひこしやうぐんよ

言靈隊ことたまたいの神軍しんぐんが

勇士ゆうしと現あれし三五あななひの

照國別てるくにわけの言ことの葉はを

いと平たひらけく安やすらけく

心こころの鏡かがみにうつし見みて



省み給へ惟神

神に誓ひて宣り傳ふ

俄に森の中より聞え來る宣傳歌の聲に、片彦始め一同は案に相違し、暫し馬首を止め、稍躊躇の色が見えて來た。後に控へし四五人の騎士は言靈に討たれて、何となく怖氣づき、早くも馬首をめぐらし、馳け出さむとする形勢さへ見えて來た。片彦はこの態を見て、氣を焦ち、躊躇してゐては、却て味方の不統一を來し、不利益此上なしと聲を勵まし、

「ヤアヤア一同の騎士、三五教の宣傳使の一行現はれたり、大自在天大國彦神の神力を身に受けたる吾々神軍の勇士は、彼等に躊躇することなく、馬蹄にかけて踏み殺せよ」

と厳しく下知すれば、駒に跨り、照國別の方に向つて、鞭をきびしく馬背に當てながら踏碎かむと進み來る。照國別は泰然自若として天の數歌を奏上し、又もや宣傳歌を歌ひ出した。されど心の曇り切つたる曲神には、宣傳歌の力も充分に透徹せず、敵は命限りに攻め來る。其猛勢に腕を叩いて待構へてゐた岩彦は「照國

別殿お許しあれ」と言ひながら弦を放れた矢の如く、金剛杖を上下左右に唸りを立てて振り廻しながら、敵に向つて突撃し、瞬く間に馬の脚を片つ端から擲り立てた。馬は驚いて立上り、馬上の騎士は眞逆様に地上に轉落し、馬を乗り捨て四方八方に逃げ散りゆく。片彦は騎馬の儘、一目散に南方さして驅け出すを、岩彦は敵の馬に跨り杖にて馬腹を鞭ちながら片彦の後を追うて一目散に驅り行く。照國別は泰然自若として尚も宣傳歌を歌ひつつあつた。數多の騎士は思ひ思ひに四方八方に轉けつ輾びつ散亂した。されども北へは一人も恐れてか逃げ行く者はない。岩彦に膝頭を打たれて倒れてゐる馬匹は七八頭、彼方此方に呻き聲をあげてゐる。馬から轉落する際、首を突込み、肩骨を外して九死一生の苦みを受け呻吟してゐる二人の敵を、照公、梅公が手分けして介抱してゐる。照國別は敵の負傷者に向つて一生懸命に鎮魂を與へた。漸く首の骨は二人の介抱に依つて元に復し、外れた肩胛骨も元の如く治まつた。

三人の介抱を受けて漸く元に復したる二人の騎士は、味方は一人もあたりに居らず、三人の三五教の宣傳使や信者の顔を見て大に驚き、

「わたしは片彦將軍の見出しに預かり、バラモン教の宣傳使となつてゐるケーリス、タークスといふ二人の者でゐます。どうぞ今日只今より三五教に歸順致しますから、命ばかりはお助けを願ひます」とハラハラと涙を流して頼み込んだ。照國別は言葉を改めて、いと慇懃に勞はりながら、

「あなた方は矢張バラモンの宣傳使でゐたか。世の中は相見互だ、互に助け助けられ、持ちつ持たれつの中、三五教は決してバラモン教の如く敵を殺傷するといふやうな非人道的なことはやらないから安心してゐるがよい。就ては汝等兩人に申付くことがある。之より清春山へ立寄り、イソの館へお使に行つてはくれまいかなア」

「ハイ最早貴方のお弟子となつた以上は如何なることも承はりませう。併し乍らイソの館へ參るの丈は何だか恐ろしい心持が致します」

「決して三五教は敵でも助ける役だから、汝等を苦めるやうなことはない。又照國別の弟子だといへば屹度大切に扱つて下さるであらう。今手紙を書くから、之

を持つて清春山へ立寄り、其次にはイソの館に行つて日の出別神様に面會し、暫くイソ館にて三五の道の修業を致すやう取計らうてやらう』

二人は、

「ハイ」

と云つたきり有難涙にくれ、再び馬に跨り北へ北へと進むこととなつた。一通の手紙は清春山のポ一口に宛て、歸順を促す文面であり、一通は照國別が出陣の途中遭遇したる一伍一什を日の出別神に報告し、且つ此兩人をして三五教の教理を學ばしめ、將來宣傳使として用ひ給はば、相當の成績をあぐる者なるべし、何分宜しく頼み入るとの文面であつた。二人は心の底より照國別の慈愛に感じ、遂に清春山に立寄り、ポ一口に手紙を渡し、次いでイソ館に進んで教理を學び、且又バラモン教のイソ館を攻撃する一伍一什の作戦計畫を残らず打開けて物語り、非常な便宜を與へたのである。

清春山に二人が立寄り、ポ一口其外を歸順せしめたる一條や其他の面白き経路は項を改めて述ぶることとする。

話は元へ返つて、岩彦は駿馬に跨り、逃げゆく片彦の後を、己も馬に跨つて一隊又もや數十騎、片彦と共に岩彦一人を目がけて弓を射かけ、攻めかかる。岩彦は一隊の的となり、身體一面矢に刺され、蝟の如くなつて了つた。されど生死の境を超越したる岩彦は獅子奮迅の勢を以て、馬の蹄にて一隊を踏み躪らむと、前後左右をかけ巡りつつあつたが、身體の重傷に疲れ果て、ドツと馬上より地上に轉落し、人事不省となつて了つた。片彦、釘彦將軍は今此時と、馬を飛び下り、岩彦の首を刎ねむとする時、何處ともなく山嶽も崩るるばかりの大音響と共に數十頭の唐獅子現はれ來り、其中にて最も巨大なる獅子の背に大の男跨り、眉間より強烈なる神光を發射しながら、釘彦の一隊に向つて突込み來る、其勢に辟易し、得物を投げ棄て、或は馬を棄て、四方八方に散亂して了つた。獅子の唸り聲に岩彦はハツと氣が付きたりを見れば、巨大なる獅子の背に跨り、眉間より靈光を發射する神人が側近く莞爾として控へてゐる。岩彦は體の痛みを忘れ起直り、跪いて救命の恩を謝した。よくよく見れば嵩計らむや、三五教にて名も高き英雄豪

傑けつの時置師神ときおかしのかみであつた。岩彦いはひこは驚おどろきと喜よろこびの餘あまり、

「ヤア貴神あなたは空助様もくすけさま、如何どうして私わたしの遭難さうなんが分わかりましたか、よくマア助たすけて下くださいました」

空助もくすけはカラカラと打笑うちわらひ、

「イヤ岩彦いはひこ、今こんご後は決けつして亂暴らんぼうなことは致いたしてはなりませぬぞ。苟いやしくも三五教あななひけうの宣傳せんでん使したる身みを以もつて暴力ばうりよくに訴うつつたへ敵てきを惱なやまさむとするは御神慮ごしんりよに反はんする行動かうどうである。飽迄あくまで善戰ぜんせん善鬪ぜんとうし、言靈ことたまの神力しんりきを發射はつしゃし、それにしても行ゆかなければ、隙すきを覗ねらつて一時退却いちじたいきやくするも、決けつして神慮しんりよに背そむくものではない。汝なんぢは之これより此獅子このししに跨またがり、ライオン河がはを渡わたり、黄金姫わうごんひめ、清照姫きよてるひめの遭難さうなんを救すくふべし、さらば」

といふより早はやく空助もくすけの姿すがたは煙けむりと消きえ、數多あまたの獅子ししの影かげもなく、只一頭ただいっとうの巨大きよだいなる唐獅子からししのみ兩足りやうあしを揃そろへ、行儀ぎやうぎよく坐すわつてゐた。今いま空助もくすけと現あらはれたのは、其實そのじつは五六むろ大神おほかみの命めいに依より、木花姫命このはなひめのみことが假かりに空助もくすけの姿すがたを現あらはし、岩彦いはひこの危難きなんを救すくはれたのである。岩彦いはひこは之これより只一人ただひとり唐獅子からししに跨またがり、ライオン河がはを打渡うちわたり、黄金姫わうごんひめの危き急きふを救すくふべく、急いそぎ後あとを追おふこととなつた。

此時、岩彦の姿は何時の間にやら透き通り、恰も鼈甲の如くなつてゐた。佛者の所謂文殊菩薩は岩彦の宣傳使の靈である。之より岩彦は月の國を縦横無盡に獅子の助けに依りて、所々に變幻出沒し、三五の神軍を、危急の場合に現はれて救ひ守ることとなつたのである。

惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・一一・二 舊九・一四 松村眞澄録)

## 第八章 使者〔一〇九二〕

ケーリス、タークス兩人は 照國別の命令を  
喜び勇み守りつつ 栗毛の駒に跨りて  
クルスの森を驅け出し 一目散に大野原

吹き來る風に頭髮を

梳りつつ鶯地

谷を飛び越え山涉り

秋野にすだく蟲の聲

いと悲しげに聞ゆなる

荒野ヶ原を辿りつつ

勢ひ込んで村肝の

心も勇み魂も

青春山の岩窟に

進み行くこそ健氣なれ

青春山の麓にて

駒を乗りすて兩人は

崎嶇たる坂を登りつつ

三五教の宣傳歌

歌ひ歌ひて進み行く。

ケーリス、タークス兩人は青春山の山麓に駒をつなぎ、  
らエイヤ エイヤと一歩々々力をこめて登るのであつた。

烈しき山嵐に當りなが  
ケーリスは道々歌ふ。

☐ 神が表に現はれて  
人は神の子神の宮

善神邪神を立分ける  
とはいひながら人の身の



いかでか神を審きえむ  
あななひけう 三五教の神司

神素盞鳴大神は  
じんじむげん 仁慈無限の御聖徳

五六七の神と現れましぬ  
バラモン教を統べ給ふ

大黒主の神司  
たふと 尊き神と聞ゆれど

其源をたづぬれば  
とこよ 常世の國に生れませる

常世神王自在天  
おほくにひこ 大國彦の御裔なる

大國別の神司  
ひら 開き給ひし御教

此正統は貴の御子  
くにわけひこ 國別彦が現はれて

バラモン教を守りまし  
す 統べさせ給ふ道なるに

鬼雲彦が現はれて  
くにわけひこ 國別彦を放逐し

自ら教主となりすまし  
おほくろぬし 大黒主と名を變へて

月の都に威勢よく  
あら 現はれ來りし曲津神

善と悪とは明かに  
これにて思ひ知られけり

ウラルの教を奉じたる  
ウラルの彦も源を

詳しくたづね調べれば 此世を開き給ひたる

鹽長彦の神柱 盤古神王の正系を

疎外しながら傲然と 八王大神の御裔なる

ウラルの彦やウラル姫 その正系と詐りて

枉の教を遠近に 拓いて此世を亂し行く

其やり方の物凄さ あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして 三五教やウラル教

バラモン教の障壁を 一時も早く撤回し

天地を造り固めたる 國治立大神の

一つの教に服ひて 神の御爲め世の爲めに

世界揃うて一日も 早く誠を盡すべく

守らせ玉へ三五の 尊き神の御前に

ケーリス、タークス兩人が 慎み敬ひ願ぎまつる

朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも 誠一つの三五の

教を守る事ならば 如何なる事か成らざらむ

如何なる枉も恐れむや 神は吾等と俱にあり

人は神の子、神の宮 これの尊き御諭は

三五教の御教 バラモン教に比ぶれば

天地霄壤の違ひあり 月日は空に明かに

輝き渡り吾々が 頭を照らし給ひつつ

心にかかる村雲を 神の息吹に拂ひ除け

清く照らさせ給ひけり 此世を造りし神直日

心も廣き大直日 只何事も人の世は

直日に見直せ聞き直せ 身の過ちは宣り直せ

かく明けき御教を 守り給へる神司

照國別は吾々の 百の罪をば赦しまし

生命を助け勞りて まだホヤホヤの信徒をば

少しも疑ひ給はずに

かくも尊き御使を

任さし給ひし有難さ

心は海の如くなり

魂は空の如くなり

あゝ惟神々々

神の守りの深くして

今まで迷ひしバラモンの

胸は全く覺め來り

至仁至愛の大神の

教に仕ふる嬉しさよ

あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

と歌ひながら清春山の峻坂を登りつつあつた。最早山の三合目迄登りついた。これより坂は益々険しく道悪しく容易に登る事は出来ない難路である。タークスはひとあしひとあし指先に力を入れながら、息を喘ませ登りつつ拍子をとつて歌ひ出した。

ウントコドツコイ、ハアハアハア　　フウフウフウ息苦し  
断崖絶壁きつい道　　こんな處で倒けたなら

からだは忽ち千仞の谷間にドツコイ轉落し

頭はめしやげ腕は折れ手足も五體もグタグタに

なつて猛獸のウントコシヨ うまい餌食になるだらう

ウントコドツコイ、ハアハアハア コリヤ コリヤ ケーリス氣をつけよ

これから先が難關だ 照國別の御命令

首尾よく御用をウントコシヨ 濟まして目出度く復り言

申し上げねば命をば 助けて貰うたウントコシヨ

御恩報じが出来まいぞ 又もや烈しい風が吹く

そこの樹木をしつかりと 掴まへながら指先に

力をこめて登らうか こんな烈しいドツコイシヨ

凧風に吹かれては 俺の體は散りさうだ

ポーロヤシヤムの連中は 嘸今頃はドツコイシヨ

目玉の光つたウントコシヨ 大足別の司等が

カルマタ國へ出陣し 主人の留守の間鍋焚き

奥おくの一ひと間に胡坐あぐらかき　　ウントコドツコイ、ドツコイシヨ  
味あぢよい酒さけを取り出だして　　鱈腹たらふく飲のんで管くだを卷まき  
ウントコドツコイ、へべレケに　　なつて頭かっへを右左みぎひだり  
張子はりこの虎とらのウントコシヨ　　様やうにプリプリふりながら  
駄だ法螺ぼらを吹ふいて居をるだらう　　照國てるくに別の御手紙おてがみに  
如何いかなる事ことがドツコイシヨ　　書かいてあるかは知しらねども  
ポ―口の奴やつはドツコイシヨ　　定さだめて驚おどろく事ことだらう  
ウントコドツコイ其顔そのかほが　　今目いままのあたり見みるやうに  
思おもひなされて仕様しやうがない　　雨あめか霰あられか又また風かぜか  
地震ぢしん雷火かみなりひの雨あめか　　何いづれはドツコイ悶錯もんさくが  
起おこつて來くるに違ちがひない　　其時そのときケーリス、ドツコイシヨ  
シツカリ致いたして曲神まががみに　　ちよろまかされてはならないぞ  
一旦いつたん誠まことの御教みをしへを　　悟さとつた上うへはウントコシヨ  
ハアハアハアハア後返あとがへり　　してはならない神かみの道みち

登り難きは坂道だ  
誠の道を進むのは

此坂道をのぼるやうな  
ウントコドツコイものだらう

チツとの油断があつたなら  
ガラガラガラガラ後戻り

鋭く尖つたガラ石の  
車に乗つて谷底へ

落ちてはならぬドツコイシヨ  
神が表に現はれて

善悪邪正を立分ける  
其功績はドツコイシヨ

天地に廣く鳴り渡る  
雷の如ドツコイシヨ

眠れる人の目を覺まし  
心の枉を追ひやりて

水晶玉の神の宮  
救はせ給ふ有難さ

あゝ惟神々々  
ドツコイ ドツコイ 御霊

幸はひ給ひて吾々が  
堅き心を彌固に

練らせ給へよ三五の  
神の司の太柱

神素盞鳴大神の  
御前に願ひ奉る

朝日は照るとも曇るとも  
月は盈つとも虧くるとも

ウントコドツコイ山は裂け 海はあせなむ世はありとも

一旦悟つた三五の 神の教は忘れなよ

あゝ惟神々々 ケーリスしつかり肝玉を

据ゑてかかれよ今暫し 登つて行けば岩窟だ

ポーロヤシヤムの顔を見て もとの如くに撥返り

バラモン教に墮落して 神の怒りに觸れざらめ

俺はお前の親友だ お前を思ふ心から

くどい事とは知りながら 一寸此處にて氣をつける

ウントコドツコイ、ドツコイシヨ アイタタツタ、アイタツタ

あんまり喋つて足許に 眼を配るを忘れたか

尖つた石のウントコシヨ 坂の車に乗せられて

したたか打つた膝頭 赤い血潮がドツコイシヨ

タラタラタラと流れ出す 此血の色を眺むれば

餘程俺の魂は 清められたに違ひない



鮮血淋漓と迸り

東の空に茜さす

日の大神の如くなり

誠の道に服ひて

朝な夕なに肉體を

活動させて居るならば

筋肉次第に活動し

血液流通よくなつて

ウントコドツコイ、ドツコイシヨ

鬱血するよな憂ひない

體をヂツと遊ばせて

體主靈従の事ばかり

考へ暮す枉神の

血潮の色は眞黒氣

ヤツトコドツコイ小人は

閑居しながらウントコシヨ

不善を爲すと聞くからは

人と生れし此上は

月日の如く朝夕に

タイムを惜んで活動し

ウントコドツコイ光陰を

空しく費やすウントコシヨ

不道理至極の事をせず

朝から晩まで道のため

誠のために働けば

こんな美しい血が循る

あゝ惟神々々

三五教の神様の

貴の御前に眞心を

捧げて感謝し奉る

漸くにしてポロ、シヤム等が守つて居る岩窟の前に兩人は辿りついた。岩窟の口に二人はソツと佇み、中の様子を密に窺へば、奥には何となく騒々しい阿鼻叫喚の聲が聞えて居る。ケーリス、ターリス兩人は腕を組み頭を傾けながら、  
「はてな」

(大正一一・一一・二 舊九・一四 北村隆光録)

第九章 雁使(一〇九三)

フサと月との國境 アフガニスタンの北方に  
雲を壓してそそり立つ 清春山はバラモンの

教をしへに取とつて第一だいいちの 要害えうがい堅固けんこの關所せきしよぞと  
 名なも遠近をちこちに轟とどろきぬ 大黒主おほくろぬしの命めいに依より  
 清春山きよはるやまの神柱かむばしら 大足別おほだるわけは軍卒ぐんそつを  
 數多あまた率ひきゐてカルマタの 國くにの都みやこに蟠わたかまる  
 ウラルの彦ひこの魂たまの末すゑ 常暗彦とこやみひこの集團しふだんを  
 只一戰ただいっせんに相屠あひほぐり バラモン教けうの安泰あんたいを  
 守まもらむ爲ために出いでゆきし 後あとは藻ぬけの殼からとなり  
 難攻なんこう不落ふらくの絶所ぜつしよをば 力ちからとなしてポ一口くちをば  
 臨時りんじ岩窟いはやの司つかさとし 出いでゆきし後あとの岩窟がんくつは  
 制度せいども秩序ちつじよも紊みだれはて 夜よを日ひに次ついで十數じふすうの  
 番卒ばんそつ共どもは腸はらわたを 腐くさらす牛飲馬食會ぎつういんばしよくわい  
 盛さかんに行おこなひ居あたりしが 三五教あななひけうの神司かむつかさ  
 照國てるくに別のわけ一行いっかうに 言靈線ことたませんを放射はうしゃされ  
 右往左往うわうさわうに逃にげ惑まどふ 其慘状そのさんじやうを見みのがして

先を急ぎし宣傳使

兩親妹を守りつつ

歸りし後は又元の

牛飲馬食の會となり

飲めよ騒げよ歌へよ舞へよ

一寸先は暗の夜ぢや

暗の後は月が出る

月は月ぢやが運の盡

キヨロつき、マゴつき、ウソつきの  
バラモン教の神柱

戦に勝たうが負けようが  
國家の興亡は吾々の

敢て關するところでない  
朝から晩まで酒を呑み

甘い物食て樂々と  
暮して其日を送るのが

文明人種の行方と  
ウラル教もどきに惡化して

ポーロ、レールを初めとし  
ハール、エルマヤシヤム、キルク

其外残りの信徒は  
飲まな損ぢやと争うて

へべレケ腰になりながら  
岩窟の中を這ひまわり

大蛇の正體現はして  
騒ぎ狂ふぞ可笑しけれ。

ポー口はもつれ舌を無理に動かせながら、

「オイ、レール、とうとう爺いと婆アを取返され、折角陥穽へ落した三五教の宣傳使一行も亦、ヤツコスの裏返りに依つて、サツパリ掠奪され、最早俺達の使命はこれで盡きたと言ふものだ。こんな淋しい岩窟に頑張つて居つたのも、あの夫婦を押込め、彼奴の口から菖蒲を口説き落させ、大足別さまの女房にする爲に勤めてゐたのだが、モウ斯うなつちやア仕方がない。本館へ立歸らうぢやないか。大足別さまは不在でも、小足別の神司がまだ澤山の部下を伴れて守つてゐるから、そこまで一つ退却しようかい。グツグツしてゐるとあの宣傳使奴が【むし】返しにやつて來よつたら、それこそ今度はポー口もボロクソにやられて了はねばならぬかも知れない。さうだから今の間にポー口い汁を吸うて、後に未練のないやうにしておかうと思つて、特別破格を以て、貴様たちに勉強さして牛飲馬食を勤めさしてゐるのだ。此頃は貴様も一向不勉強ぢやないか。初めの間は僅かに十六人を以て四斗も五斗も飲んでくれたが、何だ、此頃は十七八人も寄つて僅かに一斗五六升の酒にへべレケになりよつて、そんな事で此岩窟の酒が何時なくなるか分

つたものぢやないぞ。レール、ちつと皆の奴を鞭撻して、モ少し活動させたら如何だい」

レール「俺だつて何時もレールから脱線する所まで奨励してるのだから、モウこの上勉強せいと云つても仕方がないワ。ウラル教の奴でもよると、五六人新手を加へて、吞ましてやつたなら、それはそれは随分「はか」がゆくだけれどなア。酒を吞むなら薬罐で吞めよ、薬罐がいやなら壺口で吞めよ。壺口がいやなら飛込んで吞めよ、狸々の奴めが膽つぶし、呆れ返つて逃げるよに吞めよ、吞めよ吞めよドツサリ吞めよ、吞めば吞む程身の徳利だ。デカタンシヨウ デカタンシヨウ……とやつたら、随分面白からうがな。アーン」

ポーロ「オイ、シヤム、貴様は此頃は一向酒に勉強をせぬぢやないか。何だか口汚ないシヤムシヤムと飯ばかり食ひやがつて、そんなことで牛飲黨の幹部になれるか。グツグツしてゐると酒のなくならぬ間に三五教がやつてくるかも知れぬぞ。さうなつたら俺達は三五教ぢやないが、無抵抗主義だから、甘い酒が残つてると、後に執着心が残つて潔う逃げられぬからなア。敵に酒を吞ますも餘り氣が利かぬ

ぢやないか」

シヤム「ナア二、三五教だつてヤツパリ人間だ。彼奴が呑んでもヤツパリ甘い酒は甘いのだ。ウラル教の奴に手傳はずより、餘程八カが行くかも知れぬぞ。何ぼ呑んでも三五教だから、腹にたまる氣遣もなし、俺達のやうに、直に「づぶ」六メンタルになる虞はなからうぞ。なあ、ハール、三五教がやつて來たら……これはこれはようこそ御入來下さいました。何分惡の御大將が不在でムいますから、結構な毒酒をあげる譯にもゆかず、とつときのよい酒で濟みませぬが、一獻どうでげせう……と「かます」のだ。さうすると、酒見て笑はぬ奴アないから、何程三五教だつて、すぐに相好をくずし、喉をグルグル言はして……ヤアこれはこれは思ひがけなき御馳走を頂戴致しました……といつて、目を細うしてグツと一杯やつたらもう大丈夫だ。一杯のんでも甘い、二杯のんでも亦甘い、三杯のんでもまだ甘い、四杯五杯、百杯千杯と、しまひの果にや土手を切らし、三五教も何も忘れて了ひ、キツと牛飲馬食會の會員になるにきまつとる。さうなると、餘り俺達は酒を呑まぬやうにするのだ。向方が十分酔うた潮合を計つて、來る奴來る奴

をあの陥穽へ埋葬さへすれば、三五教の百匹や二百匹來たつて、さまで驚くには及ばぬよ。何と妙案奇策ぢやないか

かく話す時しも、エルマ、キルクの兩人は今迄酔ひ倒れてゐたが、何に感じたかムクムクと起上り、

「コーリヤ、どいつも此奴も、計略を以ておれ等兩人を殺そうとしたなア。俺も死物狂ひだ」

と夢を誠と思ひ僻め、矢庭に奥の間に驅け入り、兩人は長刀をスラリと引抜いて、ポ一口、レール、シヤム、ハール其他十二三人の群に向つて、無性矢鱈に切込んだ。頬の肉をけづられた奴、鼻の先を切られた奴、耳を落された奴、腕を切られ、指を飛ばされ、

「コラコラ何をすする」

といひながら徳利や鉢や杯や膳を以て防ぎ戦ふ。徳利や鉢の破れる音パチパチガチャヤガチャヤ、ウン、キヤア、アイタと咆吼怒號の聲一時に起り來り、岩窟の外迄聞えて來た。ケーリス、タークスの兩人は何事の變事突發せしやと、足許に



注意しながら奥深く進み入れれば、岩窟の中は阿鼻叫喚、修羅の巷と激變してゐる。  
ケーリスは矢庭に雷の如き聲を張り上げ、

「コラッ」

と一喝した。どこともなく其言靈に三五教の威力備はつてゐたと見え、エルマ、  
キルクは其聲と共に刀をバタリと落して尻餅をつき、仰向けに倒れる。ポ一口以  
下の連中も手に持った得物を悉く其聲と共にバタリと落し、同じく仰向けに、残  
らず倒れて了つた。何れもケーリスの言靈の威力に打たれて身體強直し、首から  
上のみをクルクルと廻轉させ、蒼白な顔して呻いてゐる。  
タークスは聲も涼しく宣傳歌を歌ひ出した。

大黒主の命を受け

イソの館へ立向ふ

鬼春別の將軍が

先鋒隊と仕へたる

片彦さまに従うて

ライオン河を打渡り

駒に跨り堂々と

クルスの森に来る折

あななひけつ 三五教の宣傳使 照國別の一行に

おも 思はぬ所<sup>ところ</sup>で出會<sup>でつくは</sup>し 互<sup>たがひ</sup>に挑<sup>いど</sup>み戰<sup>たたか</sup>ひつ

みかた 味方は脆<sup>もろ</sup>くも敗<sup>はい</sup>北<sup>ぼく</sup>し 吾等<sup>われら</sup>二人<sup>ふたり</sup>は言<sup>こと</sup>靈<sup>たま</sup>に

う 打たれて馬<sup>うま</sup>より轉<sup>てん</sup>落<sup>らく</sup>し 命<sup>いの</sup>危<sup>あや</sup>くなりけるが

じんじ 仁慈無限<sup>むげん</sup>の三五<sup>あななひ</sup>の 神<sup>かみ</sup>に仕<sup>つか</sup>へし神司<sup>かむつかさ</sup>

てるくにわけ 照國別<sup>てる</sup>は照<sup>うめ</sup>、梅<sup>つめ</sup>の 二人<sup>ふたり</sup>の供<sup>とも</sup>と諸<sup>もろ</sup>共<sup>とも</sup>に

われら 吾等<sup>たす</sup>を助<sup>いた</sup>け勞<sup>いた</sup>はりて 尊<sup>たふと</sup>き教<sup>をしへ</sup>を宣<sup>の</sup>り給<sup>たま</sup>ひ

あななひけつ 三五教<sup>まめひと</sup>の信徒<sup>ゆる</sup>と 許<sup>ゆる</sup>され給<sup>たま</sup>ひし身<sup>み</sup>の上<sup>うへ</sup>ぞ

かむながらかむながら あゝ惟<sup>かみ</sup>神<sup>かみ</sup>々々 神<sup>かみ</sup>の御<sup>み</sup>靈<sup>たま</sup>の幸<sup>さち</sup>はひて

われら 吾等<sup>いさ</sup>二人<sup>ふたり</sup>は勇<sup>いさ</sup>み立<sup>た</sup>ち 栗<sup>くり</sup>毛<sup>げ</sup>の駒<sup>こま</sup>に跨<sup>また</sup>りて

きよはるやま 清春山<sup>ふもと</sup>の麓<sup>ふもと</sup>まで 風<sup>かぜ</sup>に髮<sup>かみ</sup>をば梳<sup>くし</sup>けつ

すす 進<sup>すす</sup>み來<sup>きた</sup>りし者<sup>もの</sup>なるぞ 此<sup>こ</sup>こに駒<sup>こま</sup>をば乘<sup>のり</sup>捨<sup>す</sup>てて

なんぢ 汝<sup>なんぢ</sup>ポ一<sup>あ</sup>口<sup>あ</sup>に會<sup>あ</sup>はむ爲<sup>ため</sup> 照國別<sup>てるくにわけ</sup>の信<sup>しん</sup>書<sup>しょ</sup>をば

もたら 齋<sup>もたら</sup>し來<sup>きた</sup>る吾<sup>わ</sup>が一行<sup>いっかう</sup> 岩<sup>いは</sup>窟<sup>や</sup>の外<sup>そと</sup>にて窺<sup>うかが</sup>へば

阿鼻叫喚の慘状は 手にとる如く聞えたり

只事ならじと吾々は 進み來りて眺むれば

落花狼藉ここかしこ 血潮の雨は降りしきり

井鉢は舞ひ狂ひ 徳利は宙に飛上がり

さながら戦場の如くなり ポーロ、レールよシヤム、ハール

エルマヤキルク其外の 神の司よ、よつく聞け

人は神の子神の宮 一つの神の造らしし

同胞なれば村肝の 心を合せ睦じく

天地の神の御使と なりて仕ふる身なるぞや

汝等一同神柱 大足別の出でましし

不在を幸ひ甘酒に 酔ひくづれつつ此様は

神の司と任けられし 人のなすべき事ならず

一日も早く心をば 改め直せ惟神

神に誓ひてタークスが 汝を戒め諭すなり

あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸はひましませよみたまさち

一二三四五つ六つ

七八九つ十百千ななやこのたりもち

萬の神の御恵によろづかみみめぐみ

ポ一口を始め一同のはじめいちどう

心の園に花開きこころそのはなひら

正しき教の御柱とただをしへみはしら

救はせ給へ惟神すくたまかむながら

神の御前にねぎまつるかみみまへ

と歌ひ了るや、ポ一口を始めレール其他一同はムクムクと漸くにして起上り、二人の前に恐る恐る手をつかへ、あやまり入るのであつた。

ポ一口、レールは同じバラモン教にて顔を見知つたるケーリス、タークスの兩人が俄に不可思議の神力を身にそなへ、且つ三五教式の宣傳歌を歌ひたるに膽を潰し、其靈徳に打たれて一言も發せず又反抗的態度もとらず、唯々諾々として兩人のなすが儘に服従せむと、期せずして互の心は一致してゐた。

ケーリス「コレ、ポ一口さま、大將の不在中だと思つて、随分活躍したものですな、少しタガがゆるんでゐるやうですよ。かかる忠臣に留守を守らせておけば、

おほだるわけさま 御安心でせう、アハ、ハ、ハ、

タークス「きまつた事よ。鬼の居ぬ間に心の洗濯を遊ばしたのだ。誰だつて今の

人間は面従腹背とかいつて、本人の前ではペコペコと頭を下げ……お前さまの

ことなら命でも差上げますと、二つ目には巧妙な辭令を使つてゐるが、其前を離

れると、すぐに打つて變つて悪口を言つたり反對的の行動を執るものだ。それが

所謂現代思潮だ。いはば時勢に忠實な行方と言はば云へぬことはない。何事も神

直日、大直日に見直し聞直し、善意に此場は解釋しておく方が穩かであらうよ。

俺だつて、昨日までならキットさうだ。ポーロさまに決して負けるものぢやない。

吾々だつて片彦將軍に何といつた……假令三五教の宣傳使幾萬騎押寄せ來ると

も、命の限り奮闘を續け、不幸にして命がなくなれば、七度生れ變つて、バラモ

ン教の爲に三五教の司を殲滅致さねばおきませぬ……と誓つた間もなく直に此

通り三五教へ歸順して了つたのだから、人間のやる事は如何しても矛盾は免がれ

ない。オイポーロさま、實は俺達は最早三五教の信徒だ。これからイソの館へ修

行に參る所だ。其途中に於て三五教の宣傳使……つまり俺達の親分、照國別命

から信書をことづかつて来たから、何が書いてあるか知らぬが、よく検めて読んでくれ」

ポーロは照國別と聞いて、胸をビクつかせながら信書を受取り、封おし切つてソロソロと読み下した。信書を持つ手は頻りに慄へてゐる。其文面は左の通りである。

「一、三五教の宣傳使照國別より清春山の岩窟の留守職ポーロに一書を送る。吾兩親は、永らく汝の手厚きお世話になり、安樂に月日を送り、あらゆる世の艱難を嘗めた爲、漸くにして尊き神の恩恵を悟り、又吾妹も同じく神徳の廣大無邊なるを悟り、正しき三五の信徒となりしも、要するに汝等が迫害的同情の賜物たることを深く信じ深く感謝する。又岩彦の宣傳使はヤツコスと名を變じ、汝が岩窟の館に忍び込み、種々雑多のバラモン教の教理を探り得たるは、向後に於ける彼が活動上、最も便宜を得たるものと確信し、これ又謹んで感謝する次第である。次に吾々始め一行の者、暗黒なる陷穽に放りこまれ、否陷落したるより、不注意の最も恐るべきを悟りたるは、今後の吾々が活動上に於ける良き戒めにして、

まったく汝等の恩恵に依るものと、これ又謹んで感謝する。人は凡て尊き造物主の分靈分體なれば、狹隘なる教の名を設けて、互に信仰を争ひ、主義を戦はずは、大慈大悲の元つ御祖の神に對し、不孝の罪、これより大なるはなかるべし。

ケーリス、タークス、タクスの兩人は直ちに三五の教理を悟り、速かに入信したれば、今よりウブスナ山のイソ館に遣はし、天晴れ誠の神柱となさむ爲に差遣はす途中、此手紙を汝に謹んで呈する。萬一汝等にして照國別の言を肯定するならば、此二人と共にイソの館に参り、日の出別の神始め其他の神司より教を受けられよ。恐惶頓首」

と記してあつた。ポー口は涙を流して感歎し、再び此神文を読み上げ、一同に聞かせた。レール、シヤム其他一同は異口同音に照國別の宣傳使を稱讚し、且三五の教の教理の十方無礙、光明赫灼たるに打驚き、心を改め、二人に従つてイソ館へ参進することとなつた。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・一一・二 舊九・一四 松村眞澄録)

第三篇 靈魂の遊行

第一〇章 衝突（一〇九四）

レーブレ 初秋しゅうしゅうの風かぜはザワザワと 峰みねの尾上おのへを吹ふきまくる

玉山たまやまたうげ峠たけの坂道さかみちを 黄金わうごんひめ姫ひめを初はじめとし

清照きよてるひめ姫ひめの母娘おやこづ連れ 神素かむすさの盞を鳴のおほ大神かみの

御言みことかしこ畏つみ月つきの國くに ハルナみやこの都みやこに蟠わたかまる

八岐やまたの大蛇をろちに憑つかれたる 大黒おほくろぬし主しの枉まが神かみを

言向ことむけ和やはし天地あめつちの 尊たふとき神かみの御光みひかりに

救すくはむものりやうにんと兩人にんは 險けはしき山川やまかは打渡うちわたり

雨あめにはそぼち荒風あらかぜに 吹ふかれながらもやうやうに



此處迄進み來りけり

險しき坂の傍に

スツクと立てる千引岩

これ幸ひと立寄つて

母娘二人は腰をかけ

息を休むる折もあれ

矢を射る如く峻坂を

地響きさせつとんと

下り來れる男あり

よくよくすかし眺むれば

玉山峠の登り口

思はず出會うた神司

レーブの姿と見るよりも

母娘は聲をはり上げて

手招きすれば立止まり

行き過したる坂道を

再び登りて兩人が

側に近寄りシトシト

流る汗を押し拭ひ

貴方は母娘の神司

私はレーブでムります

尊き神の引合はせ

思はぬ處で會ひました

貴方に別れた其時は

酷いお方と心にて

きつく怨んで居りました

一人の男は森林へ

姿を隠し行衛をば

尋ぬる折しも河渡り

向ふへ越えた釘彦の

手下の武士二騎三騎

再び河を打渡り

レーブの前に現はれて

今居た母娘の巡禮は

蜈蚣の姫に小糸姫

テツキリそれに違ひない

後追つかけて引捕へ

大黒主の御前に

引連れ行かむと唼鳴る故

ハツと當惑しながらも

早速の頓智此レーブ

そしらぬ顔の惚け面

馬の轡を引掴み

こりやこりや待つた、こりや待つた

鬼熊別に仕へたる

私はレーブの司ぞや

吾も汝等と同様に

母娘二人の巡禮は

蜈蚣の姫の母娘ぞと

疑ひながら近寄つて

よくよく顔を調ぶれば

似ても似つかぬ雪と墨

片目婆さまの皺苦茶に

痘痕をあしらふ御面相

娘は如何にと眺むれば

これ亦偉いドテ南瓜

下賤げせんの姿すがたの母娘おやこづれ 決して探ぬたづねる人ひとでない

くだらぬことに骨ほねを折をり 貴重きちような光陰くわういん潰つぶすより

一時いちじも早くはやカルマタの 都みやこに進すすみ拔群ばつぐんの

功名こうみやう手柄てがらをしたがよい 何なんぢやかんぢやと口極くちきはめ

罵ののり散ちらせば釘彦くぎひこの 手下てしたの騎士きしは首肯うなづいて

再びふたたび河かはを打渡うちわたり 歸かへり行くこそ嬉うれしけれ

つらつら思おもひ廻まはらせば 貴女あなたが私わたしを捨すてたのは

深い仕組しくみのありしこと 前知ぜんちの明めいなき此このレーブ

今更いまさらの如感嘆ごとかんたんし 勢込いきほひこんでスタスタと

お後あとを慕したひ玉山たまやまの 峠たうげを越こえて後あとを追おひ

此處ここに目出度めでたく面會めんくわいし これほど嬉うれしい事ことはない

あゝ願ねがはくば兩人りやうにんよ レーブの司つかさを月つきの國くに

ハルナの都みやこに伴ともなひて 鬼熊別おにくまわけの館やかたまで

進すすませ給たまへ惟神かむながら 神かみに誓ちかひて願ねぎまつる

途中に如何なる枉神の

現はれ來りて騒やるとも

神に任せし此レープ

命を的に投げ出して

無事に貴女の目的を

達成せしめにやおきませぬ

何卒お供を許されよ

あゝ惟神々々

神の御前に祈ぎまつる

と歌に代へて所感を述べ、ハルナの都まで隨行を許されむ事を懇願した。黄金姫

は言葉嚴かに、

折角の其方の親切な願なれど吾々母娘は日の出別の神様の特命を受け、もとより供を許されなかつたのだから、今になつて何程お前が頼んでも連れて行く事は出来ない、さうだと云つて貴方を排斥するのではない程に、何卒悪くとらぬ様にしてお呉れ

レープ。さう仰せらるれば、たつてお頼み申すわけには参りませぬ。それなら私も是非が御座いませぬから單獨行動をとり、貴女方母娘の前後を守つて参りませ

う

清照「何卒吾々母娘の目に見えない範圍内で行つて下さいや。もしもお供をつれて行つたと云はれては吾々母娘の申譯が立ちませぬからな」

レーブ「左様なれば、たつて無理にはお願を申しませぬ。私は之より不離不即の態度を保ち、兔も角もハルナの都へ参ります、どうぞハルナの都へおいでになつたら私を一度御引見下さる様に御願を致しておきます。私も貴女様お二人の所在を尋ねべく御主人様に命令を受けたものでムいますから、貴方等の所在さへ分れば、それで宜いのでムいます。それなら之から見え隠れにお供をしますから、こればかりはお含みを願ひます」

黄金「あゝ仕方がない。お前の勝手にしたがり宜からう」  
レーブ「はい、有難う」

と落涙に咽んでゐる。此時谷底より聞え來る法螺貝、陣太鼓、鐘の音、矢叫びの聲、木笏を驚かして響き來る。

「素破こそ一大事、バラモン教の大黒主が部下の者ならむ。彼に捕まつては大變」

と母娘は岩の後に身を隠し、一隊の通過を待たむとした。レーブは勇み立ち、

「やあ、愈忠義の現はし時、もしも御兩人様、貴女は此岩影に身を忍びお待ち

下さいませ。此軍隊をイソの館へ進ませてはなりません。これより私が力限り戦

つて敵を退却させて見ませう」

黄金「決して敵を傷つけてはなりません。善言美詞の言葉を以てお防ぎなさい。

此細谷道、而も急坂、何程數多の敵が攻め上り來るとも、一度にドツとかかる事

は出來まい。片端から言向和すが神慮に叶うたやり方、先づ其方が第一戦を試み

たが宜からう。とても叶はぬと見てとつた時は此黄金姫が立ち代つて言靈戦を開

いて見ようから」

レーブ「承知致しました。一卒これに據れば萬卒進むべからずと云ふ此難所、私

一人で大丈夫です」

と武者振ひして勇み立つた。

かかる處へブウブウと先登に立つた武士は法螺貝を吹き陣容を整へ登り來る。

旗指物、幾十となく風に翻り單縦陣を作りて進む其光景、恰も繪卷物を見る如く

であつた。レーブは千引の岩の上に直立し、此光景を眺め敵軍の近づくのを今や遅しと待つてゐる。

先頭に立つた武士は急坂を上りつつ勇ましく軍歌を歌つてゐる。

□ 東西南の三方に 青海ヶ原を巡らせる

世界で一の月の國 神の御稜威も明かに

照り輝きしバラモンの 教の柱は畏くも

大黒主と現れましぬ 此度イソの神館

神素盞鳴の枉神が 手下の者共集まりて

朝な夕なに武を練りつ 一擧に月へ攻め寄せて

バラモン教の本城を 覆へさむと企み居る

其曲業を前知して 吾等が奉ずる神柱

大黒主は畏くも 鬼春別を將となし

ランチ將軍片彦の 大武士を任せ給ひ

悪魔の征途に上ります

其神業に仕へ行く

吾等の身こそ樂しけれ

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも

三五教の本城を

覆へさずにおくべきか

常世の國の自在天

大國彦の御守り

愈深くましませば

如何なる枉の猛ぶとも

鬼神を挫ぐ勇あるも

などか恐れむバラモンの

教に鍛へし此體

刃向ふ敵はあらざらめ

進めよ進め いざ進め

神素盞鳴の曲神の

手下の残らず亡ぶまで

枉津の軍の失するまで

と歌ひながら旗鼓堂々と進み来る物々しさ。

ランチ將軍の部下は早くもレーブの立てる岩の麓まで進んで来た。レーブは大音聲を張り上げながら、



「ヤアヤア、吾こそはバラモン教の神司、鬼熊別が身内の者、只今自由自在天のお告げにより汝等一行此處に来る事を前知し、今や遅しと待ち構へ居たり。汝も亦バラモンの部下に相違はない。云はば味方同士だ。案内するは本意なれども、汝等は今の軍歌によつて聞けば仁慈無限の神素盞鳴大神の館に押寄するものと聞えたり。かう聞く上は少しも猶豫はならぬ。片端から神變不思議の言靈を發射して一人も残らず言向和し呉れむ。暫く待て」

と呼ばはつた。先頭に立つた武士はカルと云ふ一寸氣の利いた小頭である。カルはレーブの此聲を聞くより立ち止まり、

「ハテ、心得ぬ汝の言葉、汝バラモン教の神司でありながら、何を血迷うて左様な事を申すか。大方發狂致したのであらう。そこ退け、邪魔になるわい」

と進まむとするをレーブは早くも尖つた石を何時の間にか岩の上に幾十となく積み重ね、一步たりとも前進せば、此岩を以て腦天より打挫かむと右手に岩をささげて睨めつけてゐる。カルは目を瞋らし、

「こりや、こりやレーブ、左様な石を捧げて如何致す心算だ。チツと危険ではな

いか

レープ「ハ、ハ、ハ、チツとも、やつとも危険だ。何程汝の味方は澤山押寄せ來るとも此一條の難路、一人も残らず討滅すに何の手間暇要るものか。一時も早くここを引き返せよ」

カルはレープの顔を睨めつけ、互に無言のまま睨みあつて居ると、後の方より、  
「進め進め」

と登り來る其勢にカルもやむなく後より押されて前進せむとする時、レープは無法にも其岩をとつて一つ嚇かし呉れむと、敵に中らぬ様にと狙ひを定めて投げつけられ、岩はカツカツと音をたてて谷底へ轉落して了つた。

カル「こりやこりや危ないわい。何を致すか」

レープ「何も致さない。其方等を片端から殲殺しに致さねば俺の心が得心せぬのだ」

と云ひながら今度は兩手に二つの石を引摺み、又もや登り來る敵に向つて投げつけむとする氣色を示した。ランチ將軍は稍後の方より、

「進め進め」

と下知をする。已むを得ずしてカルは前進せむとするを、レーブは道の真中に立ちはだかり、第一着にカル的首筋を掴んで谷底目がけて投げつけた。又来る奴を引掴み十人ばかりも谷川目蒐けて投げつくる。かかる處へ遙か下の方より數多の軍卒を押し分けて登り来る大の男、忽ちレーブの前に現はれ、

「何者ならばわが行軍を妨害致すか。吾こそはランチ將軍の懐刀と聞えたる若芽の春造だ」

と云ひながらレーブの素首引掴み、谷川目がけてドスンとばかり投げ込んで了つた。此態を窺ひ見たる黄金姫、清照姫は、

「今は最早是までなり、天則違反かは知らね共、何とかして敵を追ひちらし、只一人も此峠を越えさせじ」

と腕に撚をかけ金剛杖を前後左右に打振り打振り、單縦陣を張つて登り来る敵に向つて打込めば、素破一大事とランチ將軍は弓に矢をつがえ、二人を目がけて發矢と射かけた。續いて數多の軍勢は弓を背より下し雨の如く二人に向つて射かけ

る。其間を杖を以て避けながら獅子奮迅の勢を以て前後左右に母娘が荒れまはる。二人は遂に坂道より足踏み外し、谷底にツデンドウと母娘一時に轉落した。流石の黄金姫、清照姫は武術の心得あれば少しも體に負傷をなさず、谷底の眞砂の上にはヒラリと體を下し敵軍來れと手に唾して待つてゐる。ランチ將軍は母娘兩人を逃すなと下知すれば、數多の軍卒は都合よき谷川の下り口を探し求めて、雲霞の如く二人を取圍み弓を頻りに射かけ出した。二人は進退惟谷まつて最早運命盡きたりと覺悟の臍をかたむる折しもあれ、谷底よりウーウーと狼の呻聲聞ゆると共に、幾百とも知れぬ狼軍はランチ將軍に向つて牙を剥き目を瞋らして暴れ入る。其勢に辟易し、ランチ將軍を始め一同は玉山峠を雪崩の如くバラバラバツと逃げて行く。

黄金姫、清照姫は前後に心を配りながら、數十の狼に送られて玉山峠を宣傳歌を歌ひながら悠々として下り行く。谷口に到り見れば、ランチ將軍の部下は如何なりしか、影だにも見えずなつて居た。これは玉山峠を登れば餘程の近道なれども、危険を恐れて道を東に向ひて進軍したものと見える。黄金姫、清照姫は無入

の野を行く心地して悠々と進み行くのであつた。

(大正一一・一一・二 舊九・一四 北村隆光録)

第一章 三途館(一〇九五)

四面寂寥として蟲の聲もなく 際限もなき枯野原を

形容し難き魔の風に 吹かれながらに進み行く。

道の片方の眞赤な血の流れたやうな方形の岩に腰打掛け、息を休めてゐる一人の男がある。そこへ「ホーイホーイ」と怪しき聲を張上げながら、杖を力にトボトボと足許覺束なげにやつて来る七八人の男、何れの顔を見ても、皆土の如く青白く、頭に三角の靈衣を戴いてゐる。之は言はずと知れた幽界の旅をしてゐる亡

者の一團であつた。先に腰打掛けて休んでゐたのは、玉山峠の谷底から、春造に投込まれて氣絶したレーブである。後から來るのが、カルを始め七八人のバラモン教の家來であつた。カルは黄金姫に投込まれて氣絶し、其他の亡者は残らずレーブの爲にやられた連中ばかりである。

カルはレーブの姿を見て、

「ヨー、お早う、お前も矢張こんな所へやつて來たのかなア、附合のいい男だな。死なば諸共死出三途、血の池地獄、針の山、八寒地獄も手を曳いて、十萬億土へ参りませう。モウスうなつちや現界と違つて、幽界では名譽心も要らねば、財産の必要もない。従つて争ひも怨恨も不必要だ。只恨むらくは、生前にバラモン神様を信じてゐたお神徳で、至幸至樂の天國へやつて貰へるだらうと期待してゐたのが、ガラリと外れて、こんな淋しい枯野ヶ原を涉つて行くだけが残念だが、これでも仕方がない。サア、レーブさま、一緒に参りませう」

レーブ「ヤア皆さま、お揃ひだなア。カルさまは根つから俺に覺えがないが、はたの御連中は残らず俺が冥途の旅をさしてやつたやうなものだ。併し俺はまだ死

んでほゐないのだから、亡者扱ひは御免だ。千引の岩の上うへに於おいて激戦苦闘をつづけた英雄豪傑えいゆうがうけつのレーブさまが、年の若いわかのに今頃死しんで堪たまるかい。此このレーブさまには生いきたる神かみの御守護ごしゆごがあるから、メツタに死しんでる氣遣きづかひはないのだ。お前達まへたちは甘うまいことをいつて、俺おれを冥途めいどへ引張ひっぱりに來きよつたのだな。切きても切きても肚はらの惡わるい男おとこだ、モウいいかげんに娑婆しやばの妄執まうしふを晴はらさないか。斯かやう様な所ところへふみ迷まようて來くると結構けつこうな天國てんごくへ行ゆかれないぞ。南無なむ力ちから頓生とんしょう菩提ぼだい、願ねがはくば天國てんごくへ救すくはせ給たまへ。惟神靈かむながらたまちはへませ幸倍坐世さいざい』  
と手てを合あはす。

「オイ、レーブ、貴様何呆なにとぼけてゐるのだ。ここは娑婆しやばぢやないぞ。幽冥界いうめいかいの門口かどぐち、枯野かれのヶ原がはらの眞中まんなかだ。サア之これから前進ぜんしんしよう。何いづれいろいるの鬼おにがでて來きて、何なんとか彼かんとか難題なんだいを吹ふつかけるかも知しれないが、それも自業自得じじうじとくだ、各自かくじに心こころに覺おぼえがあることだから何なにがでても仕方しかたがない。皆俺みなおれたちが心こころの中なかに造つくつた御親類筋ごしんるみすぢの鬼おにに責せめられるのだから、諦あきらめるより道みちはなからうぞ」

「ハ、ハ、ハ、亡者まうじやの癖くせに、何なにを吐ぬかすのだ。氣樂きらくさうに、青あを、赤あか、黒くろの鬼おにが鐵棒かなぼうを

持つてやつて來たら、貴様それこそ肝玉を潰して、目を眩かし、二度目の幽界旅行をやらねばならなくなるぞ。此レーブさまは何と云つても死んだ覚えはない」  
「マアどうでも可いワ。行くところ迄行つてみれば、死んでゐるか生きてるか、能く分るのだからなア」

斯く話す折しも、枯草の中から忽然として現はれた、仁王の荒削りみたやうな、眞赤の角を生した裸鬼、虎の皮の禪をグツと締め、蒼白い牡牛のやうな角、額から二本突き出しながら、

「オイ亡者共」

と大喝一聲した。レーブは初めて、自分が冥途へ來てゐるのだなア……と合點した。されど自分は誠の神様のお道を傳ふる眞最中に死んだのだから、決して斯様な鬼に迫害されたり虐げらるるものではない。善言美詞の言靈さへ使へば即座に消滅するものだとして固く信じて、外の亡者のやうに左程に驚きもせず、平然として鬼共の顔を打眺めてゐた。鬼はレーブ、カルの二人に一寸會釋して、比較的優しい顔で、



「エー御兩人様、貴方等は之から私が御案内しますから、三途の川の岸まで来て下さい。外の奴等は……オイ黒赤兩鬼に従つて、此處を右に取つて行くがよからう。サア行けッ」

と疣々だらけの鐵棒を持つて追つかける様に、八人の亡者はシホシホと赤黒の鬼に引かれて茫茫たる枯野ヶ原の彼方に消え去つた。

青鬼はレーブ、カルを送つて、漸くに水音淙々と鳴り響いてゐる廣き川邊に着した。川邊には何とも知れぬ綺麗な黄金造りの小ざつぱりとした一軒家が立つてゐる。青鬼は鐵門をガラリとあけ、中に這入つて、

「只今、娑婆の亡者を二人送つて來ました。どうぞ受取り下さいませ」  
と叮嚀に挨拶してゐる。レーブ、カルは互に顔を見合せ、小聲で、

「レーブ、オイ、コリヤ怪體な事になつて來たぢやないか。此大川を渡れといはれたら、それこそ大變だぞ。今鬼が……二人の亡者を送つて來ました、受取つて下さい……なんて言つてるぢやないか。一寸見ても強さうな小面憎い鬼が、あれ丈叮嚀に挨拶してゐるのだから、餘程強い大鬼が此處に居るに違ひないぞ。今の間

に元の道へ逃げ出さうかなア」

カル「逃げ出すと云つたつて、地理も分らず、何一つ障碍物がない此枯野原、直に見つかつて了ふワ。それよりも神妙にして甘く交渉を遂げ、よい所へやつて貰ふ方が何程得かも知れないぞ」

かく話す時しも、青鬼は二人は向ひ、叮嚀に頭をピヨコピヨコ下げて、

「私は之からお暇を申します。館の主人さまに何も彼も一伍一什申上げておきましたから、どうぞ御勝手に入つて、悠くりお話をなさいませ」

と云ひながら大股にまたげて、鐵棒を輕さうに打振り打振り元來た道へ引返すのであつた。

後に二人は怪訝な顔しながら、

レーブ「オイ、如何やら此處は三途の川らしいぞ、何と妙な川ぢやないか。三段に波が別れて流れてゐる。まるで縦に流れてゐるのか、横に流れてゐるのか見當が取れぬやうな川だのう」

カル「オイ、そんな川所かい、此館はキツと三途川原の鬼婆の番所かも分らぬぞ。

ここで俺達はサツパリ着物を剥がれて了ふのだ。さうすればこれから前途は追々  
冬空に向くのに赤裸になつて、八寒地獄に旅立といふ悲劇の幕がおりるかも知れ  
ぬぞ。困つたことが出来たものだなア

かく話す所へ館の戸を押開いて現はれて来たのは十二三才の美しい娘であつた。  
レーブ「ヤア偉い見當違をしてゐたワイ。三途の川の脱衣婆アといへば、エグつ  
たらしい顔をした、人でも喰ひさうな餓鬼が控へてゐるかと思へば、まだ十二三  
才の肩揚の取れぬ少女が而も二人、優しい顔して出て来るぢやないか。矢張現界  
とは凡てのことが逆様だといふから、現界の所謂小娘が幽界の婆アかも知れぬぞ。  
娘と云つたら幽界では婆アのことだらう。婆アと云つたら幽界では少女のことだ  
らう。娘と云つたら……」

カル「コリヤコリヤ同んなじことばかり、何をグツグツ言つてるのだい。娘が聞  
いたら態が悪いぞ」

「餘りの不思議で、ツイあんな事が言へたのだ」

二人の少女は叮嚀に手をつかへ、

「あなたはレーブさまにカルさままでムいますか。サアどうぞお姫さまが最前から  
お待兼でムいます。お辨當の用意もしてムいますから、どうぞトツクリとお休みの  
上お食り下さいませ」

レーブ「イヤア、洒落て「けつ」かるワイ、さうすると矢張ここは現界だな。此  
風景のよい川端でどこの奴か知らねども澤山のおチヨボをおきやがつて、茶代を  
ねだつたり御馳走を拵へて高く代價を請求し、剥取りをしやがるのだな。オイ氣  
を付けぬと着物位ならいいが、魂まで女に抜取られて了ふかも知れぬぞ。鬼婆よ  
りも何よりも恐ろしいのは美しい女だからなア」

少女「モシモシお客さま、そんな心配は要りませぬ、どうぞ早くお入り下さいませ」

カル「ヤツパリ夢だつたかいな。ネツからとんと合點がゆかぬやうになつて來た  
ワイ。どこともなしに娑婆臭くなつて來たぞ」

レーブ「それだから、貴様が亡者氣分になつてゐやがつた時から、俺はキット死  
んでゐるのぢやないと言つただらう。兔も角警戒して女に魂を抜かれぬやうに入

つて見ようかい。併し此家を見るだけでも大變値打があるぞ。屋根も瓦も壁もど  
こも黄金造りぢやないか。こんな所に居るナイスはキット世間離れのした高尚な  
優美な顔る……に違ひない」

といひながら少女に引かれて二人は鬪を跨げた。外から見れば金光燦爛たる此館、  
中へ入つてみれば、荒壁が落ちて骨を剥きだし、まるで乞食小屋のやうである。

そして其「むさ」苦しいこと、異様の臭氣がすること、お話にならぬ。二人は案  
に相違し、思はず知らず、

「ヤア此奴ア堪らぬ、エライ化家だなア。こんな所にゐやがる奴ア、どうで碌な  
ものぢやあるまいぞ。オイ氣を付けぬと蟲が足へ這上るぞ、エーエ氣分の悪いこ  
とだ」

と口々に咳いてゐる。破れた襖障子をパツとあけて奥からやつて來たのは、こは  
そもいかに、汚い座敷に似合はぬ、立派な衣裳を着した妙齡の美人、襠姿の儘、  
破れた畳の上を惜氣もなく引きずりながら、現はれ來り、

「あゝ、これはこれはお二人様、待つて居りました。大變早うお越しでムいまし

たなア。奥に御馳走が拵へてありますから、一つ召上つて下さい」

と打解けた言ひぶりである。レーブは合點ゆかず、家の中をキヨロキヨロ見上げ見下し、隅々迄も見廻しながら、

「何と隅から隅迄完全無缺なムサ苦しい家だなア、何程山海の珍味でも、此光景を眺めては、喉へは通りませぬワイ。コレコレお女中、一體此處は何といふ所ですか」

女「ここは冥途の三途の川といふ所でムいますよ」

レーブ「さうすると矢張私は亡者になつたのかいなア」

「ホ、ホ、ホ、亡者といへば亡者、生きてゐるといへば少し息が通うてゐる。三十三萬年後の二十世紀の人間の様な者だ。半死半【せう】泥棒とはお前さまのことですよ。私は三途川の有名な鬼婆で、辭職の出来ぬ終身官だよ。ホツホ、ホ」

「オイオイ馬鹿にすない、そんな鬼婆があつてたまるかい、年は二八か二九からぬ、花の顔容月の眉、珂雪の白齒、玲瓏玉の如き其肌の具合、如何して之が鬼婆と思へるものか、あんまり擲揄ふものではありませぬぞ、お前さまは丁度二十一

世紀せいきのハイカラをんな女のやう様なことを言いふぢやないか。こんな娘むすめが婆ばばアとはどこで算用さんによが違ちがうたのだらうなア」

「ホ、譯わけの分わからぬ男をとこだこと、百年目ひゃくねんめに二三年にさんねんづつ人の壽命じゆみやうが縮ちぢまつてゆくのだから、二十一世紀にじふいちせいきの末すゑになると、十七八才じふしちはっさいになれば大變たいへんな古婆ふるばばだよ。モ三歳みつつになると夫婦ふうふの道みちを悟さとるやうになるのだから……お前まへさまも餘程頭よつほどあたまが古ふるいね」

カル「さうすると、ここは二十一世紀にじふいちせいきの幽界いうかいの三途せうづの川かはだな」

女をんな「三途せうづの川かはは何萬年なんまんねん経たつても、決けつして變かはるものではない。此婆このばばアだつて、何時いつま迄でも年としも老よらず、いはば三途せうづの川かはのコゲつきだ。サア早はやく奥おくへ來きて、餛飩うどんでも喰たべたがよからうぞや。大分だいぶんに玉山峠たまやまたうげで活動くわつどうして腹はらがすいてゐるだらう」

レ「ブ」それなら兔とも角かくも奥おくへ通とほして貰もらはう。オイ、カル、俺おれ一人ひとりでは何なんだか氣き分ぶんが悪わるい、貴様きさまもついて來こい」

カル「ヨシヨシ從ついて行ゆかう、此女このをんなはバの字じとケの字じに違ちがひないから油斷ゆだんをすな。そして一歩いっぽ一歩いっぽ探さぐり探さぐりにゆかぬと、陷穽おとしあなでも拵こしらへてあつたら大變たいへんだぞ。亡者まうじやでも矢張命やつぱりいのちが惜をしいからなア」

と云ひながら美人の後に従いて行く。奥の間かと思へば草莽々と生えきつた川の堤であつた。其向方を三途の川が滔々とウネリを立てて白い泡を所々に吐きながら悠悠々と流れてゐる。

レーブ「コレコレ婆アさまとやら、お前の所の奥の間といふのは、こんな野つ原か。矢張冥途といふ所は娑婆とは趣が違ふものだなア。娘を婆と云つたり、野原を奥と言つたり、サツパリ裏表だ。なア、カル公、ますます怪しくなつたぢやないか」

女「ここはお前さまの仰有る通り野つ原だ、奥の間といふのは次の家だ。此向方に立派な奥の間が建つてゐるから、そこへ案内を致しませう」

レーブ「又外から見れば、金殿玉樓、中へ入つて見れば乞食小屋といふやうなお館へ御案内下さるのですかなア。イヤもうこれで結構でムいます」

カル「何で又これ丈外に金をかけて、立派な家を建てながら、中はこんなにムサ苦しいのだらう。なアお婆アさま、コラ一體何か意味があるだらうな」

女「ここは三途の川の現界部だから、こんな家が建ててあるのだ。現界の奴は表



面計り立派にして、人の目に見えぬ所は皆こんなものだ。口先は立派なことを言ふが、心の中は丁度此家の中見るやうなものですよ。私だつて斯んなナイスに粉飾してるが、此家と同様で肝腎要の腹の中は本當に汚いものだよ。お前さまもバラモン教だとか、三五教だとかのレツテルを被つて、宣傳だとか萬傳だとか言つて歩いてゐただらう、腐つた肉に宣傳使服を着けて糞や小便をそこら中持ち歩いて、神様を「だし」に、物の分らぬ婆嬭に隨喜湯仰の涙をこぼさしてゐたのだらう。私も此着物を一つ剥いたら、二目と見られぬ鬼婆アだよ。白粉を塗り口紅をさし白髪に黒ンボを塗り、身體中に蠟の油をすり込んで、こんなよい肉付にみせてゐるが、一遍少し熱い湯の中へでも這入らうものなら見られた態ぢやない。サア是から本當の家の中へ伴れて行つてあげよう。イヤ奥の間へつれて行きませう。レーブ「何と合點のいかぬことをいふ娘婆アさまぢやなア。何だか氣味が悪くなつて來た。斯う言はれると自分等の腹の中を淨玻璃の鏡で照らされたやうな氣分になつて來たワイ。のうカル公」

カル「さうだな、丸切り現代の貴勝族の生活の様だなア。外から見れば刹帝利か

淨行じやうぎやうが何かなに貴いたふと方が住すんでゐるお館やかたのやうだが、中なかへ這入はいつてみると、毘舍びしゃよりも首陀しゆだよりも幾層いくそう倍劣ばいおとつた旃陀羅せんだらの住家すみかの様やうだのうう」

女をんな「せんだら」萬まんだら言いはずと早はやく此方こつちやアへ來きなされよ。サア此處ここが神界しんかいの人ひとの住すむ館やかただ、かういふ家うちに住居ぢゆうきよをするやうにならぬとあきませぬぞやう」

レーブ「どこに家うちがあるのだい、野原のほら計りばかぢやないか。向むかふには川かはが滔々たうたうと流ながれてる計りばかで、家いへらしいものは一つひとつもないぢやないか」

カル「オイ、レーブ、貴様きさま餘程よほど悟りさとの悪いわる奴やつぢやなア。神界しんかいの家いへといつたら娑婆しゃばのやうな木きや石いしや竹たけで疊たたんだ家いへぢやない、際限さいげんもなき此宇宙間このうちうかんを稱しょうして神界しんかいの家いへと云いふのだう」

レーブ「こんな家いへに住すんで居をつたら、それでも雨露うろろを凌しのぐ事ことが出来できぬぢやないか。神界しんかいの家いへといふのは所謂いはゆる乞食こじきの家いへだ。何なにがそんな家うちが結構けつこうだい。貴様きさまこそ譯わけの分わからぬことを言いふぢやないかう」

女をんな「コレコレお二人ふたりさま、何なにをグツグツいつてらつしやるのだ、此家このうちが見みえませぬか。水晶すゐしやうの屋根やね、水晶すゐしやうの柱はしら、何なにもかも一切いっさい萬事ばんじ、器具きぐの端はしに至いたる迄まで水晶すゐしやうで拵こしらへ

てあるのだから、お前さまの曇つた眼力では見えませうまい。私の體だつて神界へ這入れば、これ此通り、見えますまいがな』  
と俄に透き通つて了つた。

レーブ『目は開いてゐるが家の所在が一寸も分らぬ、これでは盲も同然だ。何程結構でも家の分らぬやうな所へやつて来て、水晶の柱へでもブツカツたら、大變だから、ヤツパリ俺は、最前の現界の家の方が何程よいか分らぬわ。コレコレ娘婆アさま、どこへ行つたのだい。お前の姿丈なつと見せてくれないか』

耳のはたに女の聲、

『ホ、何とまあ不自由な明盲なこと、モ少し靈を水晶に研きなさい。そしたら此立派な水晶の館が明瞭と見えます』

レーブ『どうしても見えないから、一つ手を引いて案内して下さいな』  
女『それなら案内して上げませう』

と言ひながら、水晶の表戸をガラガラと音をさせて開けた。

『ヤア顔は見えぬが、確かに戸のあいた音だ』

といひながら二人は手をつなぎ、レーブは女に手を引かれて、水晶の館に這入つて了つた。

レーブ「何だ家の内か家の外か、ヤツパリ見當が取れぬぢやないか。アイタタ、とうとう頭をうつた、ヤツパリ家の内と見えるワイ、コレコレ娘婆アさま、こんな所に居るのはモウ嫌だ。モ一遍手を引張つて出して下さいな」

女「お前さま等二人勝手に出なさい。這入つたものが出られぬといふ筈がない」  
カル「何とマア意地の悪い女だなア。そんなことを言はずに一寸の手閒ぢやないか、出口を教へて下さいな」

女「お前さまの身魂さへ研けたら、出口は明瞭分りますよ。自然に靈の研ける迄、千年でも万年でもここに坐つてゐなさい、こんな綺麗な所はありませぬからなア」  
レーブ「餘り汚い靈が水晶の館へ入つたものだから、とうとう神徳敗けをしてしまつて、出口が分からなくなつて了つた。エ、構ふこたない、盲でさへ一人道中をする世の中だ。頭を打たぬ様に手で空をかきながら、出られる所へ出ようぢやないか」

カル「さうだな、なんぼ廣い家だつて、さう大きいはあるまい。小口から撫で廻したら出口はあるだらう。本當に盲よりひどいぢやないか。外が見えて居りながら出られぬとは、何うした因果なことだらう。コラ大方あの娘婆アの計略にかかつてこんな所へ入れられたのかも知れぬぞ……ヤア同じ女が澤山に映り出した。ハハア此奴ア鏡で作つた家だ、一つの影が彼方へ反射し、此方へ反射し、澤山に見え出しよつたのだ。ヨーヨー俺達の姿も四方八方に映つてるぢやないか、此奴ア閉口だ。コレ娘婆アさま、そんな意地の悪いことを言はずに出して下さいな」

女「ホ、娑婆亡者とはお前のことだ。それならもう好い加減に出して上げませう、折角の水晶の館が汚れて曇つて了ふと、あとの掃除に此婆アも困るから」

と云ひながら、二人の手をつないで、外へ出した手を引張つてくれた感覺はするが、聲が聞えるばかりで、少しも姿は見えなかつた。

女「サア此處が外だ。もう安心しなさい」

レーブ「ヤア有難う、おかげで助かりました。ヤアお婆アさま、そこに居つたのか」

女をんな「サア之これから幽界いっかいの館やかたを案内あんないしませう、私わたしについて來くるのだよ」

レーブ「神界しんかい現界げんかいの立派りっぱなお家うちを拜見はいけんしたのだから、幽界いっかいも矢張やっぱり序ついでに見みせて貰もらはうか。のうカル公こう」

カル「定きまつた事ことだ。ここ迄までやつて來きて幽界いっかい丈だけ見みなくては歸いんで嬢かかアに土産みやげがないワイ」

女をんな「ホ、お前まへさま達たち、歸いなうと云いつても、モウス冥途めいどへ來きた上うへは、メツタに歸かへることが出で來きませぬぞや、ここは三途せうづの川かはの渡場わたしばだ。それ、ここに汚きたない藁わら小屋こやがある、これが幽界いっかいのお館やかただ」

と言いひながら俄「はかに白髮しひびがの婆ばばアになつて了しまつた。

レーブ「ヤア、カル公こう、あの娘むすめは本當ほんたうの婆ばばアになりよつたぞ。いやらしい顔かほをしてゐるぢやねえか」

婆ばば「いやらしいのは當然あたりまへだ。亡者まうじやの皮かはを剥はぐ脱衣だつい婆ばばアだから、サアこれからお前まへさまの衣ころもをはがすのだ」

カル「エ、洒落しやれない、なんだ此この小つぽけな雪隠せんちこ小屋こやのやうな家うちを見みつけやがつて、

モウ俺は止めた。矢張り現界の家の方へ行つて休まう。と踵を返さうとすれば、婆アはグツと兩の手で二人の首筋を掴んだ。二人はゾツとして、

「オイ婆アさま、離れた離れた、こらへてくれ、こらへてくれ」

婆「何と云つても離さない。ここは幽界の關所だから、お前を赤裸にして、地獄

へ追ひやらねばならぬのだ。此三途の川には神界へ行く途と、現界へ行く途と、

幽界へ行く途と三筋あるから、それで三途の川といふのだよ。伊奘諾尊様が黄泉

國からお歸りなされた時御楔をなされたのも此川だよ。上つ瀨は瀨強し、下つ瀨

は瀨弱し、中つ瀨に下り立ちて、水底に打ちかづきて御楔し給ひし時に生りませ

る神の名は大事忍男神といふことがある。それあの通り、川の瀨が三段になつて

るだろ。眞中を渡る靈は神界へ行くなり、あの下の緩い瀨を渡る代物は幽界へ行

くなり、上の烈しい瀨を渡る者は現界に行くのだ。三途の川とも天の安河とも稱

へるのだから、お前の靈の善悪を檢める關所だ。サアお前はどこを通る心算だ。

眞中の瀨はあゝ見えても餘程深いぞ。グツグツしていると、沈没して了ふなり、

下の瀬の緩い瀬を渡れば渡りよいが其代りに幽界へ行かねばならず、どちらへ行  
くかな。モ一度娑婆へ行きたくば上つ瀬を渡つたがよからうぞや」

レーブ「何程瀬が緩いと言つても幽界の地獄へ行くのは御免だ。折角ここまでや  
つて来て現界へ後戻りするのも氣が利かない。三五教に退却の二字はないのだから……併しカルの奴、マ一度現界へ歸りたくば婆アさまの言ふ通り、あの瀬をバ  
サンバサンと渡つてみい。俺はどうしても神界行だ、虎穴に入らずんば虎兒を得  
ずといふから、一つ運を天に任し、俺は神界旅行に決めた。時に途中で別れた連  
中はどこへ行つたのだらうか、婆アさま、お前知つてるだらうな」

婆「あいつかい、あいつは一途の川を渡つて、八萬地獄へ眞逆様に落ちよつたの  
だよ」

カル「一途の川とは今聞き始めだ。どうしてマア彼奴等はそんな所へ連れて行か  
れよつたのだらう」

婆「一途の川といふのは、善一途を立てたものか、悪一途を立てた者の通る川だ。  
善一途の者はすぐに都率天まで上るなり、悪一途の奴は渡しを渡るが最後八萬地



獄くに落ちおる代物しろものだ、本當ほんたうに可哀相かあいさうなものだよ。カルカルの部下ぶかとなつてみたあはちの八人にんは今頃いまごろはエライ制敗せいばいを受けてるだらう。それを思おもへば此婆このばばアも可哀相かあいさうでも氣きの毒どくでも何なんでもないわい。オホ、

カルカル「コリヤ鬼婆おにばば、俺おれの部下ぶかがそんな所ところへ行いつてゐるのに、何なんだ氣味きみがよささうに、其笑そのわらひ態ざまは：貴様きさまこそよい惡垂婆あくたればばだ。何故なぜ一途いちづの川かはをこんな婆ばばが渡わたらぬのだらうかな、のうレーブ」

婆ばば「何いづれ幽界いうかいの關所せきしよを守まもるやうな婆ばばに慈悲じひぢやの情なさけぢやの同情どうじやうなどあつて堪たまるか、惡人あくにんだから三途せうづの川かはの渡守わたしもりをしてゐるのだ。善人ぜんにんが來くれば直すぐに最前さいぜんのやうな娘むすめになり、現界げんかいの奴やつが來くれば上皮うはかだけ綺麗きれいな中面なかつらの汚きたい娘むすめに化ばける。惡人あくにんが來くればこんな恐おそろしい婆ばばになるのだ。約つまりここへ來くる奴やつの心次第こころしだいに化ばける婆ばばアだよ」

レーブ「それなら俺おれはまだ一途いちづの川かはへ鬼おにが引張ひっぱつて行きゆよらなんだ丈だけ、どつかに見込みこみがあるのだな。ヨシヨシそれなら一つ奮發ふんぱつして神界旅行しんかいりよかうと出でかけよう。オイ、カル、貴様きさまも俺おれについて中なかつ瀨せを渡わたれ」

カル「ヨシ、どこ迄までもお前まへとならば道伴みちづれにならう」

兩人「イヤお婆アさま、大變なお邪魔を致しました。御縁があつたら又お目にかかりませう、左様なら、まめで、御無事で、御達者で……ないやうに、早く「くたばり」なされ、オホ、く、く」

婆「コリヤ貴様は靈界へ來てまで不心得な、惡垂口を叩くか、神界へ行くと云つても、やらしはせぬぞ」

と茨の杖を振り上げて追っかけ來る其凄じさ。二人はザンブと計り中つ瀨に飛込み、一生懸命拔手を切つて、あなたの岸に漸く泳ぎついた。

(大正一一・一一・二 舊九・一四 松村眞澄録)

## 第一二章 心の反映(一〇九六)

秋風切りに吹きすさぶ

玉山峠の谷間で

バラモン教の大棟梁

イソの館の征討に

上りしラン子將軍の

部下に仕へしカル司

鬼熊別の家の子と

仕へて名高きレープ等と

衝突したる其結果

互に谷間に墜落し

人事不省に陥りて

いつとはなしに幽界の

枯野ヶ原を歩みつつ

野中の巖に休む折

カルの部下なる八人は

赤黒二人の鬼共に

引つ立てられて枯草の

莽々茂る野原をば

一途の川を指して行く

レープとカルの兩人は

青き鬼奴に誘はれ

三途の川の渡場に

漸く辿り来て見れば

果しも知らぬ廣い川

清き流れは滔々と

白き泡をば吐きながら

大蛇のうねる如くなり

川の畔の一つ家は

金光きらめく玉樓の

眼まばゆきばかりなり

金門をあけて青鬼は 館の中に身を隠し

二人の男をやうやうと ここ迄誘ひ参りしぞ

受取りめされと云ふ聲の 聞えて暫し経つ間に

以前の鬼は會釋して 何處ともなしに消えにける

二人は川邊に佇みて 思はぬ美しき此家は

土地に似合はぬ不思議さと 囁く折しも金鈴を

振るよな清き女聲 早く來れと呼びかくる

不思議の眼をみはりつつ 近づき見れば鬼婆と

思ふた事は間違か 花も恥らふ優姿

年は二八か二九からぬ 神妙無比の光美人

いとニコニコと笑ひ居る 二人は驚き川端の

女と暫し掛合ひつ 一閒を奥へと入りみれば

奥の一間は草野原 三途の川の滔々と

以前の如く鳴りゐたり 水晶館に導かれ

鏡かがみの如ごとく透すきとほる  
館やかたの中なかで出口でぐちをば

失うしなひ互たがひに辟易へきえきし  
千言萬語せんげんばんごを竝ならべつつ

救すくひを乞こへば川端かはばたの  
美人びじんは二人ふたりの手てを取とつて

醜しこけき小屋こやの其前そのまへに  
立たちあらはれて言いひけらく

今迄いままでなんぢ汝たの立入たちいりし  
家屋かをくは娑婆しやばと神界しんかいの

住居すまゐの姿すがたの模型もけいぞや  
此茅屋このあばらやは鬼婆おにばばの

彌いやとこしへ永久とこしへに鎮しづまりて  
娑婆しやばにて重おもき罪つみかさね

十萬億土じふまんおくどの旅立たびだちを  
致いたす亡者まうじやの皮かはを剥はぐ

脱衣だつい婆ばさまの關所せきしよぞと  
いふより早はやく忽たちまちに

娘むすめは醜みにくき婆ばばとなり  
瘦やせからびたる手てを伸のべて

二人ふたりの素そツ首引くびひつ搦つかむ  
其そのいやらしさ冷つめたさに

三途せうづの川かはの中なかつ瀬せに  
身みを躍をどらして兩人りやうにんは

ザンブとばかり飛とび込こんで  
拔手ぬきてを切きつて向むかふ岸きし

やうやう渡わたり着つきにけり。

二人は着衣の儘、際限もなき廣い川を、意外にも易々と無事に渡つたのを、非常な大手柄をしたよな気分になり、爽快の念に堪へられず、川の面を眺めて、紺青の波を見入つてゐた。

レーブ「鬼婆アさまに首筋を掴まれ、生命カラガラ此川へ飛込んだものの、これだけ廣い川、到底無事には渡れまいと眞中程で思うたが、此激流にも似合はず、弓の矢が通つたやうに、一直線に易々と、而も勿急に渡られたのは何とも知れぬ不思議ぢやないか」

カル「そこが現界と神界との異なる點だ。ヤアあれを見よ。何時の間にか川はどつかへ沈没してしまひ、美はしい花が百花爛漫と咲き匂うてるぢやないか。ア、何とも知れぬ芳香が鼻をついて來る。あれ見よ。川ぢやないぞ。エデンの花園みたいだ」

「ヤアほんにほんに、何とマア不思議な事ぢやないか。ようよう白梅の花が大きき木の枝に所々に咲いてゐる。バラの花に牡丹の花、紫雲英に白連華其外いろいろの草花が所せき迄咲いて來た。ヤツパリ天國の様子は違つたものだ。モウこん

な所へ来た以上は虚偽ばかりの生活をつづけ、現界へは、萬劫未代歸りたくな  
ないワイ。なあカル公、お前と俺とは、少しばかりの意地から、忠義だとか義務  
だとかいつて主人の爲に互に鎬を削り、名譽を誇らうと思つて、獵師にケシをか  
けられた虬犬の様に「いが」み合ひ、恨も何もない者同士が、命の取りやりをや  
つてゐたが、龍虎互に勢全からず、とうとう玉山峠の谷底で寂滅爲樂急轉直下、  
神界の旅立となつたのだ。が之を思へば現界の奴位可哀相な者はないのう」  
併し乍ら、お前と俺と偽善の行り比べをやつたおかげに、互に娑婆の苦を逃れ、  
こんな天國淨土へ來られるやうになつたのだから、何が御都合になるとも分らぬ  
ぢやないか。昨日の敵は今日の味方、虎狼の唸り聲も極樂の花園を渡る花の薫風  
となりけりだ。モウ斯うして神界へ來た以上は、名位壽福の必要もなければ互  
に争ふ餘地もない。勝手に廣大無邊な花園を逍遙し、自由自在に木の實を取つて  
食ひ、一切の系累を捨てて單身天國の旅をするのだから、これ位愉快な事はない  
ぢやないか。併し乍ら善因善果、惡因惡果といふからは、斯様な所へ來られる様  
になるのは餘程現界に於て善を盡したものでなければならぬ筈だ。俺達の過去を

追懐すれば、決してかやうな所へやつて來られる道理はない。ヒヨツとしたら、神様が人違を遊ばしたか、感違をなさつたかも知れぬぞ。モシそんな事であつたなら、俺達は大變だ。此美はしき樂しき境遇が忽ち一變して、至醜至苦の地獄道へ落されるかも知れない。之を思へばヤツパリ執着心が起つて來る。何程執着心をとれと云つても、此天國に執着が残りてたまらうか。あゝ惟神靈幸倍坐世。どうぞ神様、夢でも構ひませぬから、どこ迄も此境地において下さいますやうにと手を合して一生懸命に天地を拜んでゐる。何時の間にか、二人の立つてゐた地面は二十間ばかり持上り、左右の低い所に坦々たる大道が通じて、種々雑多の人物や禽獸が右往左往に往來してゐるのが見えて來た。

レーブ「ヤア俄に又様子が變つて來たぞ。オイ、カル、氣をつけないと、どんな事になるか知れぬぞ、チツとも油斷は出來ないからな」

かく話す折しも、二三丁前方に當つて猿をしめる様な悲鳴が聞えて來た。二人は物をも言はず、其聲を尋ねて何人か惡魔に迫害され居るならむ、救うてやらねばなるまいと、無言のまま驅出した。近よつて見れば、白衣をダラリと着流した



丸ポチヤの青白い顔をした男が、右手に血刀を持ち、左手に四五才ばかりの美はしき童子の首筋を引掴み、今や胸先へ短刀を突き刺さむとする間際であつた。

レーブ、カルの二人は吾を忘れて、其男に飛びかかり、血刀を引つたくり、童子を助けむと、力限りにもがけども、白衣の男は地から生えた岩のやうに、押せども突けどもビクとも動かぬ。みるみる間に其童子を無残にも突き殺して了つた。レーブ「コリヤ悪魔奴、此處は何處と心得てゐる、勿體なくもかかる尊き天國に於て、左様な兇行を演ずるといふ事があるか」

男「アハ、阿呆らしいワイ。悪魔の容物の分際として、此方を悪魔呼ばはりするとは何の事だ。糞蟲は糞の臭氣を知らぬとは貴様の事だ。サアこれから其方の番だ、そこ動くな。イヒ、なんとマアいぢらしいものだなア、いかさま野郎のインチキ亡者奴、身魂の因縁に依つて、此天來菩薩が之から汝を制敗致すから、喜んで此方の刃を受けたがよからうぞ」

レーブ「アハ、天來菩薩とはソラ何を吐かす、苟くも菩薩たる者が凶器をふりまはし、天國の街道に於て殺生をするといふ事があるか。況して罪のない童子

を殺害するとは、以ての外の代物だ。コリヤ悪魔、イヤ天來、よつく聞け、此方こそはバラモン教にて英雄豪傑と世に謳はれた武術の達人、カル、レーブの兩人だ。汝の如き小童共、假令幾百萬人一團となつて武者ぶりつくとも、千引の岩に蚊軍の襲撃した様なものだ。サア今に此方の武勇を現はし、汝が劍をボツたくり、寸断にしてくれむ、覺悟を致したがよからうぞ。神界の名残に神文でも稱へたがよからう』

男『ウツフ、うろたへ者奴が、神界の法則に依つて、此方が使命を全くする爲、此童子を制敗してゐるのだ。汝はいつも現界でホザいて居るだらう、神が表に現はれて、善と惡とを立別ける、神でなくて、身魂の善惡が分るものか。貴様達の容喙すべき限でない、人間は人間らしく黙つて自分の行くべき所へ行けばいいのだ。譯も知らずに安つぱい慈悲心だとか、義侠心を發揮しようと思つても、そんな事は、鏡の如き明かな神界に於ては通用致さぬぞ』

レーブ『假令此童子に如何なる罪があらうとも、神界に於ては何事も善意に解し、神直日大直日に見直し聞き直し宣直し給ふのが大慈大悲の神様の御恵だ。其方は

使命だと申すが、娑婆地獄ならば知らぬこと、天地の神の分靈たる人間を自ら手を下して制敗するといふ道理があるか

男「エへ、ぬかしたりなぬかしたりな、それ程よく理屈の分つた其方なれば、此方を神直日大直日に見直し聞き直し宣直さぬか。娑婆で少しく覺えた武勇を鼻にかけ、吾々を惡魔呼ばはりになし、此方の刀を掠奪して盜賊の罪を重ね、又此方を寸斷せむとは自家撞着も甚だしいではないか。そんな事で如何して神界の旅が出来るか。てもさても分らぬ奴だな。オツホ、鬼の上前を貴様は「はね」ようと致すのか、何と恐ろしい我が強い代物だなア

カル「コリヤ惡魔、ここは神界だぞ、貴様の居る世界は幽界だらう。かやうな所へやつて來るといふ事があるか、早く立去れ。グツグツ致して居ると、神界幽界の國際談判が始まり、遂には談判破裂して、地獄征伐の宣示が渙發されるやうになるかも知れぬぞ」

男「イツヒ、其方は現界に於て一つの善事もなさず、まぐれ當りに神界へふみ迷うて來よつて、一角善人面をさらして、ツベコベと理屈を轉つてゐやがるが、

此悪魔も此血刀も、皆貴様の心の反映だ。貴様は八岐大蛇の悪魔の憑いた大黒主の部下に仕ふる鬼春別の乾兒の乾兒の其乾兒たる小悪人で居ながら、三才の童子に等しき天の下の青人草の生血を吸ひ、少しの武勇を鼻にかけ、修羅の戦場に疾驅した其罪が今ここに顕現してゐるのだ。要するに此方は貴様の罪が生んだ悪魔だから、貴様が本當に神直日大直日に見直し宣直し、發「ごん」と改心を致したならば、かかる尊き神界の大道に如何して俺が現はれる事が出来ようか。俺が亡ぼしたくば、貴様の心から改心したがよからう。人が悪魔だと思つて居れば、みんな自分の事だぞ。コリヤ、レーブ、其方は今の先黄金姫に出會ひ、三五教の教理を聞いたであらう。人が悪いと思つてゐると皆われの事ぢやぞよ……と玉山峠の岩蔭で聞かされたぢやないか」

レーブ「成程さうすると、お前は俺の言はば副守護神だなア。何と悪い副守が居やがつたものだなア」

男「アハ、ハ、都合のよい勝手な事をいふな。副守護神所か、貴様の本守護神の断片だ。トコトン改心致さぬと、まだまだ此先で貴様の生んだ鬼が貴様に肉迫し

て、どんな目に會はずか知れぬぞ。己が刀で己が首切るやうなことが出来致すから、早く改心致したがよからう。レーブばかりでない、カルも其通りだ、此童子はヤツパリ、カルの身魂の化身だ。どうだ判ったか」

レーブ「ヤア判った、斯うして二人仲よくして神界の旅行をやつてゐるもの、本當のことを言へば、おれも淋しくて仕方がないから、道伴れにしようと思ひ、表面こそ親切に打解けたらしくしてゐるもの、行く所まで行つたならば斯様な悪人は此下に見ゆる地獄道へつき落してやらうと、心の端に思つてゐたのだ。ヤア悪かつた、オイ、カル公、俺は本當に濟まなかつた。心の罪を赦してくれ」

カル「あゝさうか、おれも實はお前と打解けて歩いて居るもの、何時お前が俺の素首を引抜くか知れぬと思つて、戦々競々と心の底でしてゐたのだ。さうするとあの童子は俺の恐怖心が塊つて現はれたのだな。お前がさう改心してくれる以上は、最早お前も恐れはせぬ。互に打解けて心の底から仲よくして、此天國を遊行しようぢやないか。あゝ惟神靈幸倍坐世」

と兩手を合せ、兩人は目をとどて天地に祈願をこめた。暫くあつて、目を開きあ

たりを見れば、男の影も童子の影もなく、大地に流れた血潮と見えしは紅の花、  
紛々と咲き匂ひ、白黄紫青などの美はしき羽の蝶翩翩と花を目がけて舞ひ遊んで  
ゐる。兩人は初めて心の迷ひを醒まし、天津祝詞を奏上しながら、北へ北へと手  
をつなぎつつ、いと睦じげに進み行く。

(大正一一・一一・三 舊九・一五 松村眞澄録)

第一三章 試の果實(一〇九七)

芳香薫じ花匂ひ

蝶舞ひ小鳥は謳ひ

地は一面に花毛氈

空地もなしに敷きつめし

極樂浄土の光景を

眺めて通る頼もしさ

紺碧の雲ただよへる

空に日月相並び

其光彩は七色に

輝き渡り暑からず

又寒からず其氣候

中和を得たる眞中を

カルとレーブの兩人は

足に任せて進み行く

浄土の旅と云ひながら

少しく足は疲れ來て

腹は空虚を訴へつ

五體の勇氣は何時しかに

衰へ來りて道の邊に

ドツカと坐して息休め

天國浄土の旅路にも

娑婆の世界と異ならず

饑渴のなやみあるものか

神の御諭に説かれたる

樂中苦あり苦中亦

樂しみありとの御教は

今目のあたり實現し

とても天地は苦と樂の

互に往き交ふものなるか

至喜と至樂の境遇は

神と云へども得られない

これが天地の眞相か

あゝ惟神々々

御靈幸はひましまして

苦樂の道をほどほどに

まくばり與へ吾々を

安く守らせ給へよと 心に深く念じつつ  
道の傍に座を占めて 大空仰ぎ地に伏して  
悔悟の涙にくれにける。

かかる處へ五色の薄絹をしとやかに着流したる妙齡の美人、忽然として現はれ、  
両手に二個の美はしき名の知れぬ果物を携へ二人に向ひ聲も静かに、

「貴方はレーブ、カルの御兩人様でムいませう。貴方は三途の川を渡つてから早  
已に一萬里の道程を徒歩して、お出でになりましたのだから、嘸お腹が空いたで  
せう。妾は都率天より月照彦神様の命を奉じ、ここに現はれたもので、生魂姫命  
と申します。此果實は、貴方の飲食に授けたいと存じまして態々ここ迄持ち参り  
ました。何卒食つて下さい」

レーブは、

「ハッ」

と頭を下げ、



「宏大無邊の神様のお慈悲、美はしき花は道の兩側に咲き匂うて居りますれど果實は一つもなく、飢に迫つて兩人が苦しみ悶え、もはや一步も行かれませぬので、ここで休んで居りました。天道は人を殺さずとやら、實に有難う存じます」

カル「お禮の申様もなき有難き、その仰せ、慎んで頂戴致します」

と兩手を擴げて早くも體を前へつき出す。

女神「此果物は都率天より下されしもの、二つに割つて食ふわけには行きませぬ。一つの方は、足魂と云ふ果物、一つは玉都賣魂と云ふ果物でムいます。かう見た處では色も香も容積も同じやうに見えて居りますが、此足魂の實は得も云はれぬ甘い汁を含み、五臟六腑を爽かに致し、此實を食へば五年や十年は腹の空かぬ重寶なものでムります。又玉都賣魂の果物の方は僅かに飢を凌ぐ事は出来ませんが、石瓦の如く固く味も悪く苦い汁が出て參ります。然し乍ら空腹を凌ぐ丈は、どうなと出来ますから、何れか一個づつ進ぜたうムいます。レーブ、カルの兩人様、お心に叶うたのをお食り下さいませ」

レーブ「ハイ、有難うムいます。それなら私は玉都賣魂の果實を頂きます。足魂

の果實は何卒カルに與へて下さいませ」

カル「もし女神様、私が玉都賣魂の果物を頂きますから、何卒レーブに足魂の果實を授けてやつて下さいませ」

女神「オホ、何方も揃ひも揃うて此苦いまづい固い果實がお好きでムいますなア」

レーブ「ハイ、嫌ひと云ふ譯はムいませぬが、甘いと云つても喉三寸を通る間だけ、味ないと云つても其通り、なるべくは己れの欲する處を人に施し、欲せざる處は人に施すなどのお諭を守つて居ります吾々、どうしてカルに味ないものを廻す事が出来ませうか」

カル「私も實はレーブと同様の意見でムいます」

女神「オホ、何とまあ、偉い偽善者ですこと。貴方は神のお諭によつて、そんな善い心になれたのですな。それでは、まだ駄目です。天然自然惟神の心から起つた誠でない駄目ですよ。自分は味ないものを辛抱して食ひ、人に甘いものを與へ、大變な善を行つたと云ふやうなお心のある間は、矢張眞の善心ではあ

りますまい。左様な虚偽的善事を行ひ、其酬いによつて天国浄土に行かうと云ふ矢張野心があるのでせう。何故本能を發揮して赤裸々に自分の好みを請求なさらぬのか。まだまだ貴方は表面を飾る心が盛に發動して居ますよ』

レーブ『ヤア、恐れ入りました。腹の底までエツキス光線で見透かされて了ひました。ほんにまだ私には虚偽の精神が、どつかに伏在して居ます。よく御注意を下さいました』

カル『私もレーブと同様の心でムいました』

女神『それなら今ここで此果實を貴方はどちらをとりますか』

レーブは頭を掻きながら、

『ハイ、どうも決しかねます。仰せの通り分ける譯には行かぬのですから、一層のこと、どちらも私は頂きますまい』

女神『天の與ふるを取らざれば災其身に及ぶと云ふ事を貴方は覚えて居りますか』

レーブ『ハイ、それも確に存じて居ります』

女神『それなら何故此果物をお受けなさらぬか』

レーブ「エー、何ともはや善悪邪正の道に踏み迷ひ、どう致してよいか私には合  
點が参りませぬ」

女神「これカルさま、貴方は如何思ひますか」

カル「ハイ、私は正直に味の良い足魂の方を頂戴致します。レーブさまには氣の  
毒だけど吾々個體たる一人前の魂として持身の責任がムいます。今飢渴に迫る此  
際、自分の本心の欲求する足魂を頂戴致しませう」

女神「オホ、、、それならカルさまの欲せざる玉都賣魂の果實をレーブさまに  
與へても宜しいかな。それで貴方は満足しますか」

カル「愈むつかしくなつて來ました。もう斯うなつては何とも申上げやうがムリ  
ませぬ。人間の判断では駄目です。此上は、神様にお任せ致します。貴方が下さ  
るのを頂戴致しませう。決して私の方から好きだの、嫌ひだの、彼是と請求は致  
しませぬ」

女神「あゝそれでお前さまも初めて神界旅行の資格が出來た。何事も人間の道徳  
や倫理説では解決がつかずまい。神にお任せなさるが第一だ。サア、カルさま、

神様に代つて足魂の果物を貴方に進ませせう

カル「天の御恵、有難く頂戴致します」

と女神の手より受取り嬉しげに飛びつくやうにしてガブリガブリと食い始め、

「あゝうまい、味が良い、何とした結構な果物だらう」

と頻りに褒めちぎつて瞬く間に平げて了つた。

女神は玉都賣魂の果實を忽ち地上に投げ打てば五色の火光發射し、數多の美は

しき女神となつて天上に歸り行く。二人は此光景を眺めて思はず知らず手を合せ、

伏し拜んでゐる。女神は懷中より又もや足魂の果物をとり出し、

「さあ、レーブさま、不公平のないやうに神に代つて生魂姫の此果物を上げませ

う、直様お食いなさい」

とつき出すを両手を合せて押戴き、

「あい、有難う」

と嬉し涙をこぼしながら、これも飛びつくやうにして瞬く間に平げて了つた。

今生魂姫の神が大地に投げつけたる玉都賣魂の果物より現はれ出でたる數多の

女神は一旦天上にかけ上り、再び盛装を凝らし此場に降り來つて生魂姫の四方を圍み、お手車に乗せたまま囀鳴たる音樂の響と共に中空に舞ひ上り、天の羽衣軟風に翻へりつつ虹の如き道を開いて天上に上り行く。後見送つて兩人は互に顔を見合はせながら、此解決に又もや心を揉むのであつた。

レーブ「これ、カルさま、大變良い心持になつてきたぢやないか。九死一生の場合に當り斯様な結構な果物を下さつて、これで吾々も生返つたやうな心持になつたぢやないか。九分九厘になつたら神が助けてやらうと仰有るのはここの事だ。それにつけても玉都賣魂の果實から、あの様な數多の女神が現はれた處を見ると、あの玉都賣魂の果實を頂いたら、どんな結構な事になつたか知れないよ。然し天から與へられないのだから、之も仕方がないわ。神様も皮肉ぢやないか。石、瓦の様な味で苦い汁が出ると仰有つた、あの果實から、あんな美はしい女神が出るとは思はなんだ。これは何かのお諭かも知れないぞ」

カル「何程天國と云つても、やはり苦い目、苦しい目を致さねば、都率天へは上れないと云ふお示しだらうよ。一つの功もたてずに天國だと思つて、よい氣にな

つて、ブラついて居つては本當の榮えと喜びは出て來ない。一時の幸福を充すだけの御神徳ではつまらぬぢやないか。これから一つ心を取直して天國で一働きをやらうぢやないか

「あゝさうだなア」

と話しながら又ボツボツと歩み出した。右側の二三十間ばかり下の大道から阿鼻叫喚の聲が聞えて來た。二人は期せずしてこれを見下せば、馬車、自動車、人力車、其外種々雑多の人々が往來してゐる。これは現界の人間の生活の有様であつた。よくよく見れば自動車の中には角の生えた鬼や口の耳まで裂けた夜叉の様な女がシガレットを薰らしながら、意氣揚々として大道を吾物顔に走つてゐる。憐れな正直な人間が自動車、馬車に轢き倒されたり或は肉を削がれたり、血を絞られたり、餓鬼となつて重い荷を負ひ、生命から往復してゐる。

其慘状は目もあてられぬ許りであつた。さうしてゐると又二三十間右側の大道から阿鼻叫喚の聲が聞えて來る。二人は又もや此聲の方に身を寄せ走り寄り、足下を見下せばバラモン教のランチ將軍が黄金姫、清照姫に出會し、弓矢を射かけ

槍を打振り血刀を揮つて十重二十重に取圍み、二人の命をとらむと息まいて居る。母娘二人は一生懸命に言靈を奏上するや數限りなき狼現はれ來つて、ランチ將軍の率ゐる軍隊に向ひ縦横無盡に荒れ狂ひ噛み倒し、互に血潮を流して争ひ狂ふ光景が歴然と見えて來た。これは幽界の地獄道の眞中であつて戰慄すべき慘劇が繰返されて居たのである。

かかる處へ以前の女神何處ともなく現はれ來り、

「レーブさま、カルさま、貴方は何か今御覽になりましたか。いや何か高見から御見物をなさいましたか」

レーブ「ハイ、いろいろ雑多の慘劇が目に映りました。吾々は幸ひ斯様な天國へ救はれ神のお諭の如く「高見から見物致さうよりも仕方がないぞ」と云ふ境遇におかれしました。これを思へば人間は決して悪い事は出來ませぬなア、何事も神のまにまに任すより、人間としては採るべき手段もムりませぬ」

女神「カルさま、貴方は此慘状を目撃してどう御考へですか」  
カル「ハイ、何とも申上げやうのない可憐想の事と存じます」



女神「國治立大神様は斯くの如き現界幽界の亡者を救はむために三五教をお開き遊ばしたのでムいますな。一掬同情の涙があれば、如何してもこれを看過する事は出来ずまい。貴方の御感想否今後の御採りなされる手段をお伺ひ致し度いものでムいますなア」

カル「ハイ、私は何事も惟神に任すより道はムりませぬ。人間がどれほど焦慮つた處で如何する事も出来ませぬから……」

女神「二十世紀の三五教の信者のやうに貴方も餘程惟神中毒をして居られますなア。盡すべき手段も盡さず、難を避け易きにつき、吾身の安全を守り、世界人類の苦難を傍觀して……到底人力の及ぶ限りでない、何事も惟神に任すより仕方がない……とは實に無責任と云はうか、無能と云はうか、卑怯と云はうか、人畜と申さうか、呆れはてたる其魂、左様な事で如何して衆生濟度が出来ませう。お前さま達兩人は神の恵によつて高天原の門口へ臨みながら、そんな利己主義の心では局面忽ち一變して八萬地獄の底の國へ、たつた今落ちますぞや。今日は他人の事、明日は貴方の事、因果は巡る小車の罪の重荷の置き所、どうして貴方は何時

までも、悠々樂々と天國の旅行が續けられませうか。實にお可憐な方だなア。  
少しは貴方の良心に御相談して見なさい。左様な事で、能うまあバラモン教だの、  
三五教だのと云つて世界を歩けたものですか。貴方のやうな無慈悲な方には最  
早これきりお目にはかかりません。左様ならば足許に御注意遊ばして御機嫌よ  
うお越しなさいませ

と云ふかと思れば後は白煙、女神の行衛は見えずなりぬ。  
(大正一一・一一・三 舊九・一五 北村隆光録)

## 第一四章 空川(一〇九八)

レーブとカルの兩人は、兩側の低き大道の慘劇を見て、傍觀する譯にも行かず、  
心を定めて、

レーブ「オイ、カル、お前は現界の方に向つて宣傳歌を歌ひ、娑婆の慘狀を幾分

でも輕減するやうに努力せよ。俺は幽界の大道に向つて、此慘劇を輕減すべく宣傳歌を歌ふから、兩方一度に手分けして自分の天職を全うしようではないか」  
カル「それなら俺は左道に向つて宣傳歌を歌ふ事にしよう」  
「ヨシ、さうきまらば兩方一時に言靈戦を開始しよう」  
と云ひながら兩人左右に別れ、眼下の大道に行はれてゐる慘劇を見下ろしながら歌ひ始めた。

レーブの歌、

神が表に現はれて

善と惡とを立別ける

此世を造りし神直日

心も廣き大直日

只何事も人の世は

直日に見直せ聞直せ

身の過ちは宣り直す

尊き神の御教

三五教やバラモンと

教の區劃は立ちぬれど

其源を尋ぬれば

仁慈無限の五六七神

誠まことの神かみは一柱ひとしじう 開ひらき給たまひし三界さんがいの

喜き怒ど哀あ樂らくの有あり様さまは 殘のこらず神かみの御ご經けい綸りん

仕組しぐみにもるるものはなし バラモン教けうの神柱かむばしら

大黒主おほくろぬしに仕つかへたる ランチ將軍しやうぐんはし初はじめとし

それしたがに従したがふ身魂みたまたち 玉山たまやまたうげ峠たにあひの谷間たにで

神素かむすさ盞の鳴を大神のおほかみの 御言みこと畏かしこみ月つきの國くに

曲津まがつの神かみを言こと向むけけて 天國てんごく淨土じやうどを地ちの上うへに

建設けんせつせむと進すすみゆく 黄金わうごん姫ひめや清照きよてるの

姫ひめの命みことの前ぜん途とをば 擁ようして戰いく挑さいみつつ

其その慘劇さんげきは何なんの事こと 短みじき浮世うきよに永ながらへて

永遠えいゑん無窮むきうの靈界れいかいの 苦惱くなうの種たねを蒔まくよりは

一日ひとひも早はやく大神おほかみの 元もとつ教をに省かへりみて

心こころの駒こまを立たて直なほし 互たがひに睦むつび親したしみて

天地てんちの中うちに生うまれたる 神かみの御子みこたる職責しよくせきを

完全うまらに委曲つばらに盡つくせかし

人ひとは神かみの子こ神かみの宮みや

假令たとへ天地てんちはかへるとも

現幽神げんいうしんの三界さんかいに

さまよふ人ひとは神かみの御子みこ

神かみの宮居みやゐに違ちがひない

八十やその曲津まがつや醜神しこがみに

心こころの根城ねじろを占領せんりやうされ

小さき欲よくにからまれて

貴重きちような命いのちの取合とりあひを

手柄てがら顔がほして始はじむるは

道みちを知らぬも程ほどがある

現幽神げんいうしんの三界さんかいの

誠まことの道みちを悟さとりなば

無慈むじ悲極ひきはまる戦たたかひは

どうでも止やめずにやおかれまい

あゝ惟かむながら神々かむながら

御靈みたま幸さちはひましまして

仁慈じんじ無限むげんの大神おほかみの

瑞みづの御靈みたまのあれませる

イソの館やかたに立向たちむかふ

醜神しこがみたちを言向ことむけて

誠まことの道みちに甦よみがへり

現幽神げんいうしんの三界さんかいの

教のりになびかせ給たまへかし

黄金わうこん姫ひめや清照きよてるの

姫ひめの司つかさは云いふも更さら

ラン子しやう將軍ぐん其外そのほかの

百の強者悉く 神の御水火の言靈に

救ひ助けて大神の 御子とあれます天職を

完全に委曲に永久に 立てさせ給へ惟神

神の御前に祈ぎまつる 一二三四五つ六つ

七八つ九つ十百千 萬の災悉く

拂はせ給へ天地の 尊き神の御教に

科戸の風の百草を 吹き靡かせる其如く

あしたの深霧夕暮の 深霧を朝風夕風の

吹拂ふ如悉く 心の汚れ身の曇り

潮の八百路八潮路の 青海の原の底深く

かかのみ給へ惟神 國治立大神の

御前に畏み願ぎまつる

カルの歌、

バラモン教の大教主

大黒主の開きます

教に従ひ日に夜に

靈を洗ひ浄めむと

盡せし功も荒風に

吹かれて散りし玉山の

峠の麓の谷底に

落ちて現世を立退きし

カルの司はわれなるぞ

吾は幸ひ大神の

深き恵に抱かれて

今は嬉しき靈界の

中にも尊き眞秀良場や

天國淨土の旅の空

神のまにまに進み行く

時しもあれや目の下に

忽ち聞ゆる鬨の聲

何者ならむと振返り

眼下をキツト見わたせば

うつし世に住む人々が

喜怒哀樂や愛惡欲

名利の鬼に捉はれて

手ぶり足ぶりするさまは

二目と見られぬ慘状ぞ

互に生血を搾り合ひ

或は互に肉をそぎ

膏を搾り【いが】み合ふ

地獄か修羅か畜生か

比喩へ方なき娑婆世界　これが人世の行路かと

思へば涙自ら　瀧の如くに流れ来る

あゝ惟神々々　御靈幸はひましまして

假令肉體朽ちはてて　靈體ばかりの吾なれど

之が見すてておかれうか　目下を通る人々よ

カルの言葉をよつく聞け　死生禍福を超越し

生なく死なき神さまの　御靈を受けし人々は

現界ばかりが永久の　住處にあらず劫因の

結果によりて天國に　生るるもあり幽界に

おちて焦熱大地獄　無限の永苦を受くるあり

心一つの持様ぞ　人は神の子神の宮

かかる尊き御諭しを　聞きたる人は省みよ

言心行の三大を　合一させて現世に

命のつづく其限り　神の御子たる職責を



盡つくして魂たまの行末ゆくすゑは 天津御神あまつみかみの永久とこしへに

住すまはせ給たまふ花園はなぞのに 常世とこよの春はるを送おくるべく

誠まことを勵はげみ現世うつしよの 青人草あをひとぐさの魂たましひに

神かみの教をしへの眞諦しんたいを 完全うまらに委曲つばらに宣のり傳つたふ

あゝ惟かむながらかむながら神々々かむながらかむながら 御靈幸みたまさちはひましまして

現世うつしよの人ひとことごとく 欲よくの惡魔あくまにひしがれて

朝あさな夕ゆふなに地獄道ぢごくだう 無限むげん永苦えいくの魁さきがけを

根本こんぽん的に改革かいかくし 神かみの御子おんこと生うまれたる

誠まことの道みちをおしなべて 守まもる眞人まびととなさしめよ

あゝ惟かむながらかむながら神々々かむながらかむながら 御靈幸みたまさちはひましまして

レレーブレやカルレの願言ねぎごとを 完全うまらに委曲つばらに聞きこし召めせ

尊たふとき神かみの御前おんまへに 畏かしこみ畏かしこみ願ねぎまつる

二人ふたりはかく歌うたひ了をはり、眼がんか下かをみれば、今いままで目めに映えいじたる慘劇さんげきは煙けむりの如ごとく消きえ、

右道には三角の靈衣を被つた亡者連が三々五々杖を曳いて、力なげに北へ北へと進んで行く。何れも瘦せ衰へ腰屈み、或は跛者の亡者も澤山交つてみた。目を轉じて左道を見下せば、今まで轟々と唸りを立てて走つてみた自動車は忽ち窮屈な山駕籠と變じ、數多の男女が肩に棒を擔ぎ、汗をタラタラ流しながらエチエチと往來してゐる。二人は物をも言はず、左道右道を互にキヨロキヨロと見まはしてゐた。いつの間にやら、左道右道はチクチクと高くなり、恰も自分の通つてゐる道の兩側を垣の如くに塞いで了つた。今迄一番高い道だと思つてゐたる神界道路は水の無い川の底を行くやうに見えて來た。そして兩側の現界道路と幽界道路は自分の頭よりも二三間も高くもり上り、其上を人馬の往來する音盛に聞えて來るのであつた。

レーブ「オイ、カル公、天國忽ち化して川底となつて了つたぢやないか。そして俄に喉が渴いて來たやうだ。最前貰つた足魂の木の實の效能も最早消え失せたと見えるなア」

カル「最前の女神の言つたには、五六年が間は飢渴く事はないとの示しであつた

が、最早五六年の歲月が暮れたのであらう。何事も現界と神界とは様子が変わるか  
らなア、神界で三千年と言へば現界で云ふ五十六億七千萬年の事だから、神界の  
一分間が娑婆の五六年に當るだらう」

かく話す折しも何處ともなく、

「オーイ オーイ」

と二人の名を呼ぶ者がある。二人は聲する方を見つめると、青々とした山の頂か  
ら三四人の男が此方に向つて手招きしながら呼ばはつて居た。

レーブ「オーイ、カル公、あの山の上から俺達を呼んでゐるのは、如何やら三五教  
の宣傳使の様だぞ。あの連中もヤツパリ神界旅行をやつて、俺たちとは一足先に  
行つたのだらう。これ丈喉が渴き腹がすいて來ては、到底あんな高い山へは上  
事は出來ない、だと云つてこんな狭い石だらけの空川の底にまごついて居つても  
約らぬぢやないか」

カル「何は免もあれ、聲する方に向つて突喊する事にしよう。倒れたら倒れた時  
の事だ」

かく話す折しも、兩方の土手の上をけたたましく砂ぼこりを立てて走りゆくものがある。よくよく見れば數千頭の狼の群であつた。二人の佇む兩側の土手の上から力一杯口をあけて、ウーウー……と唸り立てる其凄じさ。二人は川底にガワと伏し、狼の一時も早く此場を立去れかすと念じつつあつた。どこともなしに冷やかな水、二人の頭上にポトポトと落ちかかつて來た。

(大正一一・一一・三 舊九・一五 松村眞澄録)

第四篇 關風沼月

第一五章 氷囊(一〇九九)

照國別の宣傳使 仁慈無限の大神の

教を四方に傳へつつ 月の都にバラモンの

教を開き世を亂す 大黒主の神司を

三五教の御教に 言向和し照國の

尊き御代と立直し 一切衆生の身魂をば

救はむものと勇み立ち 險しき山を打渉り

荒野ヶ原を踏み越えて 岩彦、照公、梅公の

三人と共にクルスの森 進み來りて疲れをば

休むる折しも向ふより イソの館に攻め上る

鬼春別の一部隊 片彦、久米彦兩將が

先頭に立ちて進み來る 此は一大事と一行は

森の茂みに身をかくし 敵の様子を窺へば

大膽不敵の命令を 采配振つて號令する

その態度の忌々しさに 照國別は木影より

聲張りあげて宣傳歌 涼しく清く宣りつれば

敵は驚き照國の 別の命に四方より

攻めかけ来る猪口才さ 無抵抗主義の三五の

教を傳ふる神司 善言美詞の言靈に

成るべくならば言向けて 悔悟させむと思へども

暴逆無道の敵軍は 何の容赦も荒風の

吹きまくる如迫り来る 正當防衛と云ひながら

青春山より現はれし 岩彦司は杖を振り

縦横無盡に敵軍に 阿修羅の如く打込めば

負傷者を残し馬を棄て 皆散々に逃げて行く

照國別は敵軍の 手傷を負ひて倒れたる

二人の男を介抱し 信書を認め青春の

醜の岩窟を守り居る ポーロ司を戒めつ

イソの館に三五の 教の道を學ぶべく

遣はしやりて照、梅の 二人と共に駒に乗り

轡を竝べてシトシトと テームス山にさしかかる

折から吹き来る風の 風に面を吹かれつつ

これぞ尊き神風と 勇氣日頃に百倍し

蹄の音も夏々と 險しき坂を登り行く

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ。

照國別は岩彦の所在を失ひ、彼が行衛を求めて、森の小蔭や薄原隈なく探り、

一行は漸くにしてテームス山を登りつめ、頂上の關所に着いた。ここには大黒主

の命を奉じて春公、雪公、紅葉他二人が小さな庵を構へて名ばかりの關守をやつ

てゐる。大酒を煽つては大地に倒れ、風に吹かれ酔醒めの風を引いては熱を出し、

手拭で鉢巻をしながら狐の泣き聲の様な百日咳に悩んで居る。何奴も此奴もコン

コンカンカンの言靈の競争をやつて居た。風の神を追ひ出すのは、磐若湯に限る

と云ふので捻鉢巻をしながら、酒の勢で晝夜風の神と競争をやり、藥罐から熱を

出し汗をタラタラと流しながら格闘してゐる眞最中であつた。

春公「ウンウン、痛い痛い、風の神の奴、暴威を逞しうしやがつて、此春さまの頭蓋骨を鐵鎚でカンカンと殴りやがるやうな痛さだ。腹の中へは狐でも這入りやがつたと見えて、コンコンと吐すなり、チームス山の關守も中から斯う咳が出ては副守の奴、關守に早變りしやがつたと見える。本當に咳がチツとやソツとぢやない、痰と出やがつた。アハ、ハ、ハ、イヒ、ハ、ハ、痛い痛い、こりや雪公、一つ天

眼通で風の神の正體を透視してくれないか」

雪公「あまり酒を喰つて寒風にあたると凍死するものだ。何卒凍死してくれと云つても、俺は凍死ばかりは御免だ。それよりも萬劫末代生【とほし】になりたいからなア」

「こりや、貴様も餘程譯の分らぬ唐變木だな。俺の云ふ透視と云ふのは、そんな怪體の悪い凍死ぢやないわい。腹の底まで何が憑いて居るか透視してくれと云ふのだ。アイタ、ハ、ハ、オイ早く透視せぬかい」

「おれは雪さまだから、あまり雪さまばかりに溺れて居ると凍死する虞があるぞ。



貴様の腹の中を一寸見ると大變な腹通しだ。上げる下す、まるで此チームス峠の頂上の關守には持つて來いだ。貴様も生命の大峠が來たのだから、これ迄の因縁と諦めて潔く成佛せい。風聲鶴唳にもド肝を冷し微軀付いて居る様な關守では到底生存の價値がない。よい加減に娑婆塞ぎは冥土參りした方が社會の爲だからなア

「こりや雪、貴様は何と云ふ冷酷な事を云ふのだ。ド頭をポカんと【ハル】公にしてやるぞ」

「雪と云ふものは火のやうに温かいものでも、熱いものでもない。冷酷なのが當り前だ。冷然として人の病軀を冷笑するのが雪さまの特性だ。然しそれだけ熱があつては貴様も堪るまい。氷嚢の代りに此雪公さまの冷たい尻を貴様の藥罐頭に載せてやらうか。さうすれば、少しは熱が減退するかも知れないぞ」

「斯う熱が高うては仕方がない。貴様の尻で俺の熱が下る事なら臭うても幸抱せうかい」

「よし、時々風が吹くかも知れぬが、前以てお斷りを云うておく」

と云ひながら冷たい尻をまくつて春公の頭の上にドツカと載せた。

雪公「おい、随分冷たい尻だらう。血も涙もない冷【ケツ】動物だから……熱病の

對症療法には持つて來いだ。實に【ケツ】構な療治法だ、アハ、ハ、ハ、ハ」

春公「こりや、俺の鼻の上に何だか袋を載せたぢやないか。冷いやりするが、怪

體な香がするぞ」

「これは豚の氷嚢代理に鞆を張り込んでやつたのだ。イヒ、ハ、ハ、ハ、ハ」

「あゝ苦しい、重たいわい。チツと重量を軽減する様に中腰になつてくれないか」

雪隠の【またげ】穴をふん張つたやうな調子で中心を保つて居るのだから重た

い筈はない。熱病と云ふものは頭の重いものだ。おもひおもひにお神徳をとつた

が宜からうぞ。（義太夫）あゝ思へば思へば前の世で如何なる事の罪惡を、やつ

て來たのか知らねども、そりや人間の知らぬ事、現在チームス山の關守を仰せ付

けられながら、其職責を完うせず、肝腎要の蜈蚣姫、小絲姫を知つて見逃した其

天罰が報い來つて、今ここに臆病風の神様に襲はれたるか、いぢらしやア……惡

い事とは【しり】ながら、【しり】のつぼめが合はぬよな、【しり】滅裂の報告

が、如何してハルナの神館に、鎮まりみます大黒主に、致されうか……許して下されバラモン天王様、お願い申すと計りにて、コンコンコンとせき上げて、苦し涙にくれにける。シヤシヤ シヤン シヤン シヤン

「ウンウンウン、こら雪公、そんな氣樂な事どこかい。俺や、もう生命の【ゆき】つまりだ。もちとシツカリ尻をあててくれぬかい」

「（義太夫）「【ゆき】つ、戻りつ、とつおいつ、又もや咳の聲すれば、これがお聲の聞きをさめと……思へば弱る後が……み……寂滅爲樂も近づきて、無情の

風は非時に、吹き荒ぶこそ哀れなり、トテチン トテチン トツトツチン、テン「いやもう瀕死の病人に對し應急療法も最早駄目だ。お前の一生も最早「け

つ」末がついた。「【けつ】して決して娑婆に執着心を残し、踏み迷うて來てはならぬぞ。大黒主様の御目が届かぬと思うて慢心を致し、神を尻敷きにした天罰で、

此清明無垢の雪のやうな身魂の雪さまに尻敷きにしられるのだ。因果應報、罰は觀面、憐れなりける次第なり。エへ、へ、へ」

紅葉「こりや雪、貴様は俺が最前から聞いて居れば、春公さまに對し親切にして

居るのか、不親切にして居るのか、或は介抱するのか、虐待するのか、テンと譯  
が分らぬぢやないか」

雪公「かう「ゆき」つまつた世の中、譯が分らぬのはあたり前だ。俺は「ゆき」  
つまつた社會の反映だから、これで普通だよ。親切さうに見せて不親切の奴もあ  
り、善の假面を被つて悪を行ふ奴もあり、人を助けてやらうと云つて甘くチヨ口  
まかし、其實人は死なうが倒れやうが吾不關焉だ。自分さへ甘い汁を鱈腹吸うて  
自分が助からうとする奴ばかりだ。こんな惡魔横行の世の中に如何して眞面目な  
事が出来ようか。俺の天眼通だつてその通りだ。當る時もあれば外れる事もある。  
社會の利益になる事もあれば社會の害毒になる事もある。それだから善惡不二、  
正邪一如と云ふのだわい。オツホン」

「人の難儀を見て貴様は平氣で居やがるが、本當に怪しからぬ奴ぢやないか」  
「貴様何だい、袖手傍觀してるぢやないか。貴様こそ本當に友人に對し冷酷な代  
物だ。大方觸らぬ神に崇なしと云ふ狷い考へを持つて俺ばつかりに介抱させ、さ  
うして善だの惡だの親切だの不親切だのと小言を垂れやがるのだな。尻でも喰つ

たがよいわい。屁なつと吸へ

俺は貴様等の二人の手が塞がつてゐるなり、あと二匹の奴はズブ六に酔ひやつて役に立たぬなり、仕方がないから貴様の代りに關守を勤めて居るのだ。もしも斯んな處へ三五教の宣傳使が堂々とやつて來よつたら如何するのだ

そりや、その時のまた風が吹くわい。春公の風邪ぢやないがコンコンと懇談して關守としてのベストを盡すだけのものだ。これだけ熱が多いと此春公も黒死病になりやせぬか知らぬて、困つたものだ。俺の尻がソロソロ焼けて來だしたぞ。

大變な熱だ

おい、あんまり貴様が大きな尻で志士仁人たる春公を壓迫するものだから、如何やら息が絶れたと見え、呼吸が止まつたぢやないか

俺は智慧の文珠師利菩薩だ。今朝も文珠師利菩薩が獅子に乗つて、此處を大變な勢で通つたぢやないか。それだから俺も春公の頭に腰掛け、尻からブン珠利菩薩となつて、あらゆる最善の知識を傾けて治療に従事してるのだ。此辛い時節に藥禮も貰はず、これだけ親切に介抱するものが何處にあるかい

かく話す處へ關所の押戸をポンポンと叩くものがある。紅葉は慌てて戸外に飛び出し仰ぎ見れば照國別一行であつた。

照國「此處はテームス山の大黒主の關所だと聞いて居るが、關守の頭に一寸お目にかかりたい」

紅葉「ハイ、關守の大將は、……實は……今年の今月の始めから……今日今夜に至るまで臆病風を引きましてコンコンと【せき】をやつて居ますので、生憎【こん】回はお目にかかる事は出来ずまい」

「それは氣の毒な事だ。斯様な峠の吹きはなしでは風も引きませう。吾々が一つ神様にお願ひ致して鎮魂をやつて上げませうかな」

「エー滅相もない。貴方は三五教の宣傳使、左様なお方に鎮魂とやらをやらましては、サツパリ【コン】と駄目になつて了ひます。何卒【こん】度に限つてお斷わりを申します。サアお通りなさい」

「決して吾々は貴方等がバラモン教の關守だからと云つて、悪くするのではない。よくして上げたいと思ふからだ」

「何程御【こん】切に仰有つて下さつても、三五教のお方にお世話になるのは一寸【こん】難でムいます」

「お前は同僚が九死一生の場合を助けたい事はないのか」

「農の紅顔、夕べの白骨、どうで一度は死なねばならぬ人生の行路、夢の浮世でムいますから、春公も一層の事ここで死んだ方が、彼の爲めには好都合かも知れませぬ。親切が却つて無になりますから、何卒鎮魂ばかりは平に御容赦を願ひます」

「何とバラモン教は友人に對してさへも随分冷淡なやり方ですなア。一切衆生に對しては尚更冷酷なと云ふ事は此一事にても看取される、かう云ふ事を聞くと如何してもバラモン教を改造してやらねばなるまい」

「實は此通り五人の關守が四人まで手抜きが出来ませぬので、困つて居る所でムいます。何卒御存じの通り取り込んで居りますから、御用があれば又明日来て下され」

「アハ、ハ、ハ、まるで吾々を乞食扱ひにして居よるわい。然し乍ら假令バラモン

教にもせよ、人の困難を見て之を救はずに素通りする事は出来ない。照公さま、梅公さま、お前は奥へ這入つて此處に屁垂つてゐる病人を鎮魂してやつて下さい。メ、滅相な、病人は春公一人でムいます。外の奴は風を引いたといつてもホンの鼻腔加答兒をやつただけ、風の神をおつ拂ふとてスヤスヤと寝んで居るのですから、何卒お構ひ下さるな。」

照公、梅公は委細構はず奥に入り、兩方より天の數歌を歌ひあげた。雪公は驚いて春公の頭の上のせて居た尻をあげ、番小屋の小隅に蹲んで震うて居る。天の數歌を二三回唱へた時、春公はカツカツと大きな咳を二つした。その途端に小さい百足蟲が二匹飛んで出た。見る間に五六尺の大百足蟲となり一目散に टीम ス峠を矢の如くに逃げ下り行く。春公は初めて熱もさめ、身體元の如くなり汗を拭きながら、

「何れのお方か知りませぬが九死一生の場合、よくまあ助けて下さいまして、誠に有難うムいました。」

と感謝の聲と共に不圖見あぐれば、三五教の宣傳使照國別一行の三人であつた。



春公は生命の親の宣傳使様と喜び勇み、これより四人を後に残り照國別に從つて心の底より悔い改め、案内役として月の御國へ從ひ行く事となつた。

(大正一一・一一・四 舊九・一六 北村隆光録)

## 第一六章 春駒〔一一〇〇〕

春公は宣傳使に重病を助けられ、命の恩人と感謝し、茲に全く三五の神徳に歸順して、一行に從ひ月の都へ道案内として進み行くことになつた。春公はチーム又峠の急坂を下りながら足拍子をとつて歌ひ出した。

私の生れはアーメニヤ  
ウラルの彦の御教を  
親の代から奉じたる  
尊き清き家柄だ  
二人の親は世を去りて  
後に残りし兄弟は

浮世の風にもまれつつ 離れ離れとなりはてて  
兄の行方はまだ知れぬ ウラルの神の御教を  
大和田中に漂へる 龍宮島に開かむと  
神の司と任けられて 進み出でたる岩彦ぞ  
兄の所在を尋ねむと フサの國までやつて来て  
小舟を操り和田中を 渡り行かむとする時に  
大足別の神司 タルの港に現はれて  
バラモン教の御教を いと細々と説諭す  
群衆に紛れて御教を 聞くともなしに聞き居れば  
どこともなしに味ありと 思ひ込んだが病み付きで  
ウントコドツコイきつい坂 皆さま用心なされませ  
バラモン教に迂り込み 遂には大黒主神  
御許に仕ふる身となりて 元の名前の春公を  
名乗りて茲に關守と 拔擢されてバラモンの

鬼熊別の妻や子の  
所在を探ね三五の

教司を悉く  
捕へて月の都まで

送る使となりました  
チームス山は峰高く

吹來る風は荒くして  
人の通らぬ難所なり

さはさりながらイソ館  
ウブスナ山へ進むには

ここが第一近道ぢや  
三五教の司等は

大半ここを越えるだらう  
峠の上に関所をば

作つて待てとの命令を  
遵奉しつつ朝夕に

酒に心をとろかして  
肝腎要の關守は

つまり私の副事業  
お酒を呑むのが本職と

勤めて暮す折もあれ  
バラモン教の蜈蚣姫

小絲の姫は駒に乗り  
ハイハイハイと登りくる

よくよく見ればどことなく  
威嚴備はる勢に

辟易なして知らぬ顔  
一大雅量を發揮して

やすやすと關所を通しけり　かかる所へ三五の

教の道の空助が　さも恐ろしき獅子に乗り

數多の群を引連れて　登り來りし其時は

心をのき身はふるひ　生きてる心地はなかりけり

アイタタタツタ躓いた　ウントコドツコイこれわいな

それから一同自暴になり　こんな危険な山の上

素面でどうして勤まらう　お酒の酔に紛らして

一時なりと恐怖心　ごまかし呉れむとガブガブと

木の實の酒に酔ひつづれ　風吹く峠に大の字と

なつて倒れた其結果　風邪の神めがやつて來て

ウントコドツコイ　ドツコイシヨ　私の體に侵入し

忽ち起る頭痛　カンカンカンと鐵鎚で

腦天くだくよな苦しさに　悶え居たりし折もあれ

三五教の神司　照國別の生神が

現あらはれまして命いのちをば 助たすけてドツコイ下くださつた

こんな尊たふとい神かみの道みち 如何どうして外ほかにあるものか

バラモン教けうやウラル教けう 何程なにほど尊たふとい道みちぢやとて

朝あさから晩ばんまで眞心まごころを こめて祈いのれど寸效すんかうも

現あらはれ來こない馬鹿ばからしさ 私わたしは嫌いやになりました

照國てるくに別の神かみ様さまよ これから先さきにライオンの

水勢みなせ激はげしき川かはがある とはいいふものの易々やすやすと

渡わたれる個所かしよが一所ひとところ あるのを私わたしは知しつてゐる

流ながれはゆるく瀬せは淺あさく 恰好かつかうの場所ばしよでムごいます

少すこしく道みちはまはれども 唯一ゆめいの安全地帯あんぜんちたいなら

急いそがば廻まはれといふ比喩たとへ そこをえらんで渡わたりませう

それから先さきは玉山たまやまの チヨツと小ちひさい坂さかがある

地理ちりに詳くはしい春公はるこうが 先頭せんとうに仕つかへまつりなば

月つきの御國みくにへ易々やすやすと 知しらず知しらずに行ゆけませう

私わたしを信しんじて下くださんせ  
ウントコドツコイ ドツコイシヨ

さつき行ゆかれた蜈蚣むかで姫ひめ  
小絲こいとの姫ひめは今頃いまごろは

どこに如何どうしているだろ  
お供ともに仕つかへたレーブさま

定さだめて原野げんやにふみ迷まよひ  
一泡ひとあわふいてゐるだろと

思おもへば俄にはかに氣きがもめる  
心こころの駒こまに鞭むちうつて

一いちじ時じにかけ出す膝栗毛ひざくりげ  
あゝ惟神かむながらかむながら々々

神かみの御靈みたまの幸さちはひて  
此この一いつ行かうを恙つつなく

勝利しょうりの都みやこへ易々やすやすと  
進すすませ給たまへ天地あめつちの

神かみの御前みまへに春公はるこうが  
眞心まごころこめて願ねぎまつる

ウントコドツコイ ドツコイシヨ  
そこには平坦なるい路みちがある

照國てるくに別の宣傳せんでん使し  
一ひとつ休やすんで行ゆきませうか

甘うまそな木この實みがなつてます  
あんまりきつい坂路さかみちで

喉奴のどめが笛ふえをふきかけた  
お酒さけの酔よひがさめて來きて

頭あたまの具合ぐあひが何なんとなく  
ボンヤリしたよな心地こころちする

ウントコドツコイ、ヤットコシヨ」

と勢よく歌ひながら、チームス峠を一行四人潔く下りゆく。

坂の七八分下つた所に稍緩勾配の廣き道がついてゐる。そこには無花果が柘榴のやうにはじけて、人待顔である。

春公「モシ宣傳使様、この無花果は有名なもので、善人が通ればあの通り柘榴のやうに大きくなり、紫赤の顔色をして、通行人に接待を致しますなり、悪人が通れば小さくカンカンの蒼になり、人の目につかないやうに隠れて了ふ妙な無花果です。私は前から噂は聞いて居りますが、何時通つても今日のやうに口をあけ、甘そな顔をしてゐた事はありません。キット誠の生神様がお通りだから、あんな姿をして現はれたのでせう。ここで一つ一服して腹を拵へ、喉をうるほし、無花果さまの御厄介に預つたら如何でせうかなア」

照國「大分里程も来た様だから、一つ休息する事にしよう。春さま、お前御苦勞だが、あの無花果を少しばかり頂いて来てくれないか」

春公「ハイ承知致しました。モシモシお二人のお供、私と一緒に参りませう」

梅公「そりや面白からう」

照公「私も春さまと一緒に往つて來ます。宣傳使様、どうぞ此處に待つてゐて下さいませ」

さいませ」

照國「ウン、ヨシヨシ一人待つてゐるから、早く頂いて來てくれ」

ここに三人はイソイソとして、辛うじて細い谷川を渡り、甘さうな無花果を懐

に一杯「むし」つて歸り來り、四人は喉をならしながら、天の恵と押戴いて腹に

つめ込んだ。

照國「春さま、最前お前の道々の歌によると、兄があるさうだが、其兄は岩彦と

いつたやうだなア」

春公「ハイ、私の兄は岩彦と申しまして、少し腰の屈んだ男でムいます。ウラル

彦の神様の命令に依つて、音彦、梅彦等といふ神司と龍宮島へ渡つたきり、今に

何の消息もムいませぬ。アーメニヤの本山は今孤城落日、昔の勢もなく、僅に

残つた信者が神館を守つてゐるばかり、何でも月の國のカルマタ國とか云つて、



地教山の西南麓の可なり廣い國の都へ神館が移つたさうでムいます。そしてウラ  
ル彦様の子孫たる常暗彦様が教主となつて、再び昔日の勢をもり返してみられる  
といふ事でムいます。私は兄の岩彦に俄に會ひたくなり、大膽にも小舟に乗つて  
龍宮の一つ島へ渡らうとする時、バラモン教の大足別の神司がタルの港でバラモ  
ンの宣傳をしてゐられたのを聞き、俄に有難くなつて、とうとうバラモン教へ入  
信しました。併し乍ら月日が経つに従つてバラモン教の金箔がはげ、生地が分つ  
て来て面白くなく、とうとう焼糞になつて大酒呑になつて了ひ、チームス山の關  
守の長を任せられてゐた所、性の悪い風邪にかかり、蜈蚣の靈に憑かれて、九死  
一生の場合を神様の御引合せ、あなたの御手を以て救はれたのでムいます」  
「それならお前は岩彦の弟であつたか。私は其時の梅彦である。岩彦はクルスの  
森で別れ、バラモン教の騎馬隊の中に躍り入つたきり、まだ顔を見せないのだが、  
何れ近い中に會ふやうな心持がしてゐるから、マア樂しんでついて來なさい」  
「あなたが、それなら梅彦さまでムいましたか。さう仰有ると何處とはなしに見  
覚えがあるやうに思ひます。兄の岩彦は貴方と一緒に今日迄活動して居りました

か  
』

『岩彦さまは實に立派な宣傳使だ。今日迄バラモン教の大足別が本據たる青春山の岩窟に化け込み、ヤツコスと名乗つて居つた男だ』

『あのヤツコスは私の兄の岩彦でムいましたか。噂は聞いて居りましたが、まだ會つた事はありません。同じバラモンの内に居りながら、餘り所を隔てて居るので、それとは知らずに居りました。あゝ有難い、兄の行方が分つたのも全く神様の御引合せでムいませう。あゝ惟神靈幸倍坐世』

と合掌し、感涙に咽んでゐる。

照公『春さま、お前も日頃の望みの達する時が來たのだよ、三五教の神様は有難いだらう。モウ滅多にウラル教へ裏返つたり、バラモン教へ後戻りするこたある

まいなア』

春公『如何して如何して、そんな事が出來ませう。どうぞ一日も早く神様のおかげで岩彦に會はして貰ひたいものでムいます。そして兄弟が三五の教に盡したいと思ひます』

梅公うめこう「モウ、ウラル式しきの大酒飲おほざけみはやめますかな」

春公はるこう「餘あまり好すきでもない酒さけだけれど、世よの中なかが淋さびしくて堪たまらないので、やけ酒ざけを煽あふつて居ゐたのですから、今後こんごは一滴いってきも飲のみませぬ。大體だいたいが餘あまり好すきな酒さけではありませぬから」

照國てるくに別わけは路傍ろぼうの石いしに腰打掛こしうちかけながら、

天津神あまつかみ國津御神くにつみかみの御惠みめぐみに

兄あにの行方ゆくへを知しりし今日けふ哉かな。

三五あななひの神かみの教をしへの幸さちはひて

ライオン川がはも安やすく渡わたらむ。

テームスの峠たつげを守まもる關司せきつかさ

春公はるこうさまの病やまひいやしつ。

身みの病やまひ直なほすばかりか魂たましひの

病やまひを直なほす三五あななひの道みち。

風吹かばさぞ寒からむ Teams の

峠にたてる春の關守。

あらし吹く風に身魂をもまれつつ

今は誠の人となりぬる

と口ずさめば、春公は之に答へて、

三五の神の司の來まさずば

われはあの世に旅だちしならむ。

玉の緒の命も魂も助けられ

いかで背かむ三五の道。

朝夕に大酒あふり曲神の

すみかとなりし吾ぞ忌々しき。

蜈蚣姫醜の司を捉へむと

あせる心こころに蜈蚣むかですみけり。

小糸こいと姫神ひめかみの小糸こいとに結むすばれて

三五教あななひけうの道みちを悟さとりぬ。

岩彦いはひこの兄あにの所在ありかを聞ききし時とき

生うまれかはりし心地こころちしにけり。

惟神かむながらかみの御爲おんため世よの爲ために

盡つくさにやおかぬ春はるの魂たましひ

と歌うたひをはり、照國てるくに別わけに従したがつて、一行いっかう四人よにんは又またもや宣傳せんでん歌かを歌うたひながら、テーム  
又また峠たうげを西南せいなん指さして下くだり行ゆく。

(大正一一・一一・四 舊九・一六 松村眞澄録)

一行四人は漸くにしてチームス峠を下り、ライオン川の川邊に着いた。

春公「大分に足も疲れしました。この儘川中を渡ると層一層足が疲れるものです。

貴方等は馬があるから差支ないと云ふやうなものの、矢張馬だつて疲れてゐませ

う。私が最前歌つた通り、少し廻り道になります、これから十四五丁下へ下る

と川幅の廣い瀬の緩い淺瀬がムいます。それはバラモン教の連中でもあまり知ら

ない祕密場所です。如何でせう、それから渡れば大變に無難ですが

照國「さうだのう、安全な渡り場があるのに危険を冒して急流を渡る必要もある

まい。それなら少し迂回でも下流を渡りませう

かく話す處へ、バラモン教の神司が乗り棄てた一匹の馬、道端の草を目を塞い

で「むし」りながら、ノソリノソリとやつて来る。

春公「ヤア何と神様と云ふお方は親切なものだなア。三人は駒、自分は親讓りの

膝栗毛で「てく」つてお供をして来たが、折よく一匹の駒が落ちてゐる。これで

愈四馬に跨がると云ふものだ。宣傳使様、乗つても宜しいか

照國「落ちて居る馬だから別に盗んだものにもなるまい。もし落とし主が分つたら

其時返してやればよいから遠慮なしに乗ったがよからう」

此言葉に春公は勇み立ち、馬の側に近づき首筋を撫でながら、

「オイ馬公、御苦勞だが頼むよ。今日から俺がお前の假の主人だ」

と云ひながらヒラリと飛び乗った。比較のおとなしき馬で稀代の尤物である。こ

れはバラモン教の釘彦が乗つて居た名馬であつた。いかなる激流も大海も少しも

屈せず渡り行くと云ふ奴である。ここに四人は轡を並べシヤンコ シヤンコと足

竝揃へて下流の淺瀬に到着した。水の深さは四五寸から一尺迄位な淺瀬である。

其代りに川幅は外の場所に比べて三倍ばかりも展開して居る。四人は悠々として

四方山の話に耽りながら四馬の首を一緒に並べて渡り行く。

春公「宣傳使様、バラモン教の清春山の岩窟に仕へて居たヤツコスと云ふ男が私

の兄の岩彦だと聞きました。此川を渡るについて此ヤツコスに關し面白い話が

ムいますから話して見ませうか」

照國「何卒話して下さい。随分珍談が……あの男の事だからあるだらうなア」

「私もヤツコスが兄ぢやと聞いて此川が一入床しうなつて來ました。此川にライ

オン川がはと名なのついたのは此川上このかはかみに天幽窟てんいうくつと云いふ樹木じゆもくの茂しげつた人間にんげんの寄よりつかれな  
い大秘密境だいひみつきやうがあつて、そこにはライオンが幾百千いくひやくせんとも限りなく棲居すまゐを致いたして居をり  
ます。それでその天幽窟てんいうくつを一名ライオン窟くつとも稱とへ、従したがつて此川このかはをライオン川がはと  
名付なづけられたさうです。昨年さくねんの春はるの頃ころ、ヤツコスと云いふ男をとこが此川このかはを渡わたる時とき、川上かはかみ  
に居をつた唐獅子からじしの子こが二匹川にひきはへ遊あそびに來きて、誤あやまつて激流げきりうに落おち入りブカブカと流なが  
れて來きました。そこをヤツコスが通とほりかかり、溺おほれ死しなむとする獅子ししの子こを二匹にひき  
ながら取とつかまへて川堤かはどてへ救すくひあげ、色々いろいろと介抱かいほうして水みづを吐はかせ、背せなか中に負おうて天  
幽窟いうくつまで大膽至極だいたんしごくに踏ふみ込み、獅子ししの巢窟さうくつへ送おくり届とどけてやつたと云いふ話はなしでムいま  
す。それから其そのヤツコスには獅子ししが守護しゆごをしてヤツコスの身みに危難きなんの迫せまつた時ときは、  
何處どこともなしにライオンが澤山たくさん現あらはれて來きて、危急ききふを救すくふと云いふ専もつぱら評判ひやうばん……い  
や事實じじつださうでムいます。それを聞ききこんで、青春山きよはるやまの大足別おほたるわけがこんな男をとこを抱かかへ  
て置おいたら、まさかの時ときに大丈夫だいぢやうぶだと思おもひ、自分じぶんの家來けらいにしたと云いふ事ことですが、  
其そのヤツコスが果はたして兄あにの岩彦いはひこならば本當ほんたうに嬉うれしい事ことでムいます。昨日きのふも文珠師利もんじゆしり  
菩薩ぼさつが獅子ししに乗のつてテームス峠たうげの關所せきしよを越こえたと云いふ事ことを聞ききました、丁度私ちやうどわたし



の兄は文珠菩薩の様な男でムいますなア<sup>□</sup>

何と珍らしい話を聞いた。ライオン川でライオンの話を聞くとは之も何かの神界の攝理だらう<sup>□</sup>

斯く話しつつ漸くにして難なく廣き川を向ふ岸に渡り、再び道を十四五丁ばかり北にとり、玉山峠の麓にさしかかり、ハイハイハイと秋風に吹かれながら頂上さして登り行く。

一行四人は、玉山峠の頂上から馬を飛び下り、各自馬の口をとりながらハアハアハイハイと注意を駒に促しつつ七八分ばかり下つて来た。俄に一匹のかなり大きな狼現はれ来り、先頭に立てる春公の裾を銜へて無理やりに引つぱらうとする其舉動の怪しさ。

春公「こん畜生、人間様の裾を喰ひやがつて貴様は狼ぢやないか。こりや畜生、俺を喰はうと思つても貴様の手には合はないぞ。此方さまは勿體なくも此世をお造り遊ばした大自在天……オツトドツコイ國治立大神様のお道を開く三五教の金の線の宣傳使照國別様のお供に仕ふる春公別さまだぞ。人間違ひを致すな。人間が

喰ひたければ टीमス峠の頂上に酒に喰ひ酔うて倒れて居る半死半生の關守がある。彼奴をガブリとやつて鱈腹、腹を膨らすが宜からう。シートどけどけと右の手を打ちふつて追ひ除けようとすれども、狼は別に怒つた氣色もなく、尾を犬の様に左右に打ちふりながら裾を唧へ引張つて放さぬ。

春公「こりやこりや、俺は急ぐ旅だ。往來の妨げを致すと、交番へ往來妨害罪で訴へてやるぞ。何だ飼犬の様に尾をふりやがつて、ハハア此奴ア山犬だなア。もとは人間の家に飼はれて居やがつたのが、主人の没落の爲め貴様も一緒に流浪して到頭山に逃げ込み、山犬となり、デモ狼に進化したのだなア。人は境遇によつて人相迄變ると云ふ事だが矢張畜生でも其道理に洩れぬと見えるわい。こりや狼て人相迄變ると云ふ事だが矢張畜生でも其道理に洩れぬと見えるわい。こりや狼犬畜生、放さぬかい、十七八のナイスに引張られるのならチツとは氣分が宜いが、貴様等に裾を引張られると、あまり宜い心持がせぬわい。エー畜生、合點の悪い奴だな。貴様狼犬ならチツとは獸の中でも王の部分だから人間さまの言靈位は分る筈だ。グツグツ致すと馬に踏み殺さしてやるぞ」

狼は尾を頻りにふり裾を唧へ道の傍の木の茂みへ無理に引き込まうとする。

春公はるこう「もし宣傳使様せんでんしさま、此畜生このちくしやう、洒落た奴しやれやつで、柄がらにも似合にあはぬ四足の分際よつあしぶんざいとして吾々われわれに擲から拵かひやがるのです。一層いっそうの事こと蹶けり殺ころしてやつたら如何どうでせうか」

照國てるくに「狼おほかみと云いふ奴やつは義獸ぎじうだから、そんな亂暴らんぼうな事ことをしてはならない。何か吾々われわれに變事へんじを知らして呉くれるのだから。先まづ狼おほかみの引張ひっぱつて行く方ほうへついて行いつて見みたら如何どうだ。千匹せんびき狼おほかみが通とほるので吾々われわれ一同いちどうを助たすけてやらうと思おもつて隱家かくれがへ引ひき行ゆかうとするのかも知しれぬぞ」

「さうだと云いつて狼おほかみに引張ひっぱられて行くのはあまり氣分きぶんの宜よいものぢやありませんわ」

「おい狼おほかみ、お前まへの行く處ところへついて行くから春公はるこうの裾すそを放はなしてやつて呉くれ」

此聲このこゑに狼おほかみは啣くはへた裾すそをパツと放はなし、照國てるくに別の前まへにスタスタとやつて來きて、一寸ちよつと頭かづへを下さげ挨拶あいさつをしながらガサリガサリと谷川たにがは目がけて下くだつて行く。照國てるくに別わけ一行いっかうは狼おほかみの後あとについて、水みづのチヨロチヨロ流ながれて居ゐる谷川たにがはへ下くだつた。見みれば其處そこに十人じふにんばかりの人間にんげんが、顔かほを擦すり剥むき肩かたを外はづして人事不省じんじふせいになつて横よこたはつてゐる。

「ヤア、澤山たくさんの怪我けが人にんだ。大方おほかたバラモン教けうの連中れんちゆうと黄金姫様わうごんひめさまとの一隊いったいとが衝突しよつとつの

結果であらう。さア照、梅、春の三人、一人々々谷水を手に掬つて口に含ませ、面部に吹きかけてやつてくれ。私はここで天津祝詞を奏上し魂呼びをするから」

「ハイ」

と答へて三人は各自に種々と介抱に力を盡した。漸くにして一人も残らず蘇生した。肩の外れた男がある、此奴は氣のつかぬ間に元へ骨を直しやり、さうして鎮魂を施した。漸くにして息吹き返したのは黄金姫、清照姫をここ迄送つて来たレールブであつた。も一人の顔に大變な擦傷を負うてみた男は、バラモン教の軍隊の先頭に立つて居たカルであつた。此二人を始め一同は救命の恩を謝し、三五教の大神の慈徳を感謝しながら宣傳使の後に従ひ玉山峠を下り、魔神の猛び狂ふ大原野を前後を警戒しながら守り行く事となつた。

照國別外四人は馬に乗りレーブ、カルを始め八人は前後を守りつつ荒野ヶ原を進み行く。前方にピタリと行き當つた淺き廣き沼がある。漸くにして日は暮れかかつた。照國別は一同に向つて此處に一夜を明かすことを命令した。照國別の先導にて天津祝詞を奏上し神言を唱へ各自疲れはてて熟睡して了つた。望の夜の月

は玉山峠の頂きから皎々と輝きつつ昇り始めた。一同の姿は手に取る如くハツキリして来た。スガル、チルと云ふ男は熟睡を装ひつつ一同の寢息を考へてゐた。夜の正子の刻、月は頭上を照らす刻限、スガル、チルの兩人はソツと起き上り、懷中から捕縄を出し、一々數珠つなぎに照國別、照公、梅公、春公、レーブ、カルの六人を縛つて了つた。さうして外の六人をソツと揺り起してゐる。熟睡の夢を破られたキルと云ふ男「ウンウンウン」と云ひながら匆ね起き、

「ダ、ダ、誰だい、人が小氣味良う寢て居るのに鼻をつまんだり、【こそばし】やがつて宜い加減に寢ぬかい。困つた奴だなア」

チルは小さい聲で耳の端に口を寄せ、

「おい、キル公、大きな聲で云ふな。今三五教の宣傳使や裏返り者をフン縛つた處だから、貴様等之から目を覺まして彼奴等の頭を【かち】割つてしまふか、但は鬼春別様のお馬の側へ引連れて行つて手柄をするのだから」

キルはド拍子の抜けた銅羅聲で、

「お前はチルぢやないか。折角命を助けてくれた宣傳使を縛ると云ふ事が何處に

あるかい。こんな事をすることと罰ばちがあたるぞ」

チル「エー困こまつた奴やつぢやな。氣きの利きかぬにも程ほどがある。あんな奴やつを助たすけて堪たまるものかい」

キル「俺おれア、貴様きさまが何なんと云いつてもあの宣傳使せんでんしに恩おんがあるのだ。恩おんを仇あだで返かへさうとは人間にんげんのなすべき事ことでないぞ。チツと誠まことの心こころとなつて考かんがへて見みい」

スガルは又また次つぎの男をとこを小聲こごえで、

「オイオイ」

と云いひながら、鼻はなをつまんだり腋わきの下したを「こそばかし」て目めを醒さまさうとしてゐる。

セル「だゝゝ誰だれぢやい、セルさまの鼻はなをつまみやがつたり腋わきの下したをくすぐる奴やつは。こら寝ねる時ときはトツトと寝ねて働はたらく時ときには精せい出して働はたらくのだぞ。安眠あんみんの妨ぼう害がいをさらすと俺おれや了れう簡けんせぬから、さう思おもへ」

スガルは小聲こごえで耳みみに口くちを寄よせ、

「おいセル、大おほきな聲こゑで云いふな。宣傳使せんでんしが目めを覺さましちや大變たいへんだ。何奴どいつも此奴こいつも

皆俺みなおれが引括ひっくくつておいたのだから、之これから皆寄みなよつて目を覺さまして彼奴あいつを叩たたき伏ふせるか、但ただしは將軍様しやうぐんさまの前まへへ引張ひっぱつて行くつもりだ。さうすれば貴様達きさまたちの手柄てがらになるのだから」

セルは寢ねぶた目を擦こすりながら、

「何なに、俺おれを何なにか、將軍様しやうぐんさまの前まへへ引張ひっぱつて行くと言いふのか。そりや怪けしからぬ。俺おれや何時いつそんな悪い事ことをしたかい。勝負しやうぶは時ときの運うんだ。俺おれが負まけて九死きうしいつ一生しやうの場合ばあひに陥おちつたと云いつて、それが罪つみになると云いつては戦いくさに行く事ことも出来できぬぢやないか。そりや一寸ちよつと無理むりだよ。(大きい聲こゑで)おい皆みなの奴やつ、起きてくれ、スガルの奴やつ、俺達おれたちを片かたつ端はしから引張ひっぱつて將軍様しやうぐんさまの前まへへつれて行くと言いつて吐ぬかしよるわいのう」

照國てるくに「アツハ、ハ、ハ、」

レーブ「ウツフ、ハ、ハ、」

照國てるくに「六踏りくたうさんりやく三略へいはふの兵法みかたも味方なかの中から破やぶれるか、面白おもしろいものだなア。グウグウグ

ウ」

と又また躰いびきをかく。

レーブ「こりやスガル、チルの兩人、俺が狸寝をして居れば懐から捕縄を出しやがって、俺等六人を縛りつけやがらうとしやがったな。ヘン馬鹿にするない。此レーブさまは神變不思議の神術を以て、縛られた様な顔をして貴様の捕縄をグツと握り、貴様等八人を知らぬ間に括つておいてやつた。俺が一つ此の縄を引張るが最後、貴様等八人の首は一遍に締つて息がとまるやうにしてあるのだ」  
と云ひながらグイグイとしやくつてみた。不思議や八人の首は徳利結びになり忽ち息がつまり、ウンウンと目を剥き手足をジタバタさせ苦しみ悶え出した。  
レーブ「アハ、面白面白、もしもし宣傳使様、梅さま、照さま、カルさま、起きた起きた。これから一つ猿廻しの藝當だ」

照國「アハ、うまくやつたなア」

「貴方の御内命通り、内々で私の得意の捕縄で何奴も此奴も縛りあげてやりました。一つ綱を引きませうか」

「一人づつ綱を解いてやつたが宜からう」

「さう早く解いてやると根つから興味が薄いぢやムいませぬか。照さま、梅さま、



春さま、カルさまにも一つ面白い處をお目にかけて其上でも滅多に遅くはありま  
すまいぜ」

「グツグツして居ると息が絶れて了ふぢやないか」

「何構ひますものか。此奴ア今私等と一緒に冥土の旅をして来た奴です。も一遍  
一途の川を渡らしてやるも宜しからうぜ」

八人はウンウンと呻き出した。

照國「おい、照、梅、春、カルの四人、早く綱をゆるめてやれ」

此命令に四人は慌しく徳利結びをチクリチクリと弛めてやつた。急に解くと又  
もや息が絶えるからである。八人はムツクと起き上り、蛙つく這ひとなつて震へ  
て居る。

「おい、スガル、チルの兩人、貴様は命の御恩人に對し仇を以て酬いむとした犬  
畜生だ。サア外の奴六人は免も角も、貴様等兩人は俺が一つ活を入れてやる。貴  
様の魂は死んで居る。否腐つて居る。烙鐵でもあててやらねば到底元の正念には  
なるまい」

スガル、チルは、

「ハイハイ」

と云ひながらチリチリと一步々後へ寄り、隙を見すまし沼を目がけて一生懸命にバサバサと飛び込み逃げ出した。セル、キル外四人の奴も二人の後について沼の中を一生懸命に、バサバサバサと沼に映つた満月を粉碎しながら一生懸命に逃げて行く。

「レーブ、アハ、ハ、ハ、到頭蛙突這ひになつて往生しやがつたな。まるつきり蛙の様な奴だ。蛙の行列向ふ見ずとは此事だ。到頭水で助かりやがつたなア」  
無心の月は皎々と照り輝き、此活劇を密かに見下してゐる。

（大正一一・一一・四 舊九・一六 北村隆光録）

第一八章 沼の月（一一・一〇二）

十五夜の満月は水清き可なり廣き葵の沼に浮いてゐる。空には圓満清朗の月、池の面にも亦月影をうつして、小波にゆらいでゐる。そこを通りかかった二人の宣傳使があつた。これは黄金姫、清照姫の二人である。

黄金「今日の御機嫌のよいお月さまの御かむばせ、まるで黄金色のやうだ。一つ此池の畔で月を賞翫しながら休息致しませうか」

清照「お母アさま。お月様の色は黄金姫で△いますなア、そして清く照り輝き給ふ所は清照姫といつてもいいやうですなア。さうするとヤツパリ貴方が體で私が用といふやうなもの、一日も早く此娑婆世界をして黄金世界に化せしめ、清く照り渡る三五の教を天下に輝かしたきもので△います。此沼は何といふ沼で△いませうか」

「何でも葵沼とかいふ事だ。青空が映つて、星の影さへ浮んでゐる。何ともいへぬ景色だ。一つここで歌でもよみませうか」

「ハイ宜しからう、お母アさまから一つ出して下さい、私が下の句をつけますから」

黄金わうごん……大空おほぞらも水底みなそこまでも葵沼あひひぬま

清照きよてる……黄金色わうごんいろに月つきは輝かがやく。

黄金わうごんの玉たまの姿すがたは天あめと地つちに

輝かがやきわたり清きよく照てりぬる。

清きよくてる月つきの光ひかりの一ひとしほに

沼ぬまに映うつりていとどさやけし。

月つきうかび星ほしさへ浮うかぶ此沼このぬまは

高天原たかあまはらの姿すがたなるらむ。

三五あななひの月つきの教をしへをまつぶさに

上うへと下したとに照てらしゆかなむ。

照てりわたる此池水このいけみづを眺ながむれば

雲井くもゐの空そらにまがふべらなり。

風かぜさへも凧なぎわたりたる池いけの面もに

黄金わうごんの月つき清きよく照てるなり。

望もちの夜よの月つきの姿すがたを眺ながむれば

心持こころもちよき沼ぬまの面おもかな。

沼ぬまの月波つきなみに碎くだけてなみなみと

動うごく姿すがたを見みれば飽あかぬかも。

今宵こよひこそ沼ぬまの畔ほとりに熟睡うまゐして

身魂みたまの疲つかれ休やすめむとぞ思おもふ。

吾魂わがたまは今いま見みる月つきの如ごとくなり

碎くだけむとしていかな碎くだけず。

大空おほぞらに澄すみ渡わたりたる月影つきかげは

清照きよてる姫ひめの姿すがたならまし。

清きよく照てる月つきの姿すがたは素盞すさのを鳴をの

神かみの尊みことの光ひかりなるらむ。

月讀つきよみの神かみの姿すがたや瑞御靈みづみたま

沼ぬまの底そこまで照てりわたる哉かな。

黄金「オホ、清さま、中々お上手ですこと、黄金姫も如何やら歌の種が切れ

ました」

清照「お母アさま、それなら私が始めますから、どうぞ後の句をつけて下さい」

黄金「それも面白からう、やつて見なさい」

清照「われは今葵の沼の月を見る

黄金「…月の教を開く道にて。」

月見れば此世の中も楽しけれ

みちかけ繁き人の世なれど。

清く照る月に心をあらはめや

天が下をば照らし行く身は。

此沼の主は幸も多からむ

夜な夜な清き月を眺めて。

日の光打仰ぐ度に目は晦む

月のみ獨り眼養ふ。

日の光隅なく照らす世の中に

又もや月の光めでたし。

日も月も世人の爲に大空に

輝き給ふ神の御恵。

有難し三五の月の御教の

旭の如く照りわたる世は。

日も月も波間に浮ぶ葵沼

心も赤きわれは眺めつ。

母と娘が葵の沼を打眺め

月の光をめづる今日かな。

バラモンの神の教は晦日の

暗夜の如き姿なるらむ。

暗の夜を照らし清むる黄金の

月の光ぞ雄々しかりけり。

晦日の大空遠く眺むれば

大黒主の暗夜なりけり。

鬼熊の別の命の魂は

空行く雲に包まれし月。

大空もやがてハルナの神館

三五の月の清く照るらむ。

清照「オホ、私もこれで小出しが切れました。又暇な時、倉庫よりドツサリ

出してお目にかけてませう」

黄金「オホ、清さま、お前さまも随分空助さまの側に居たおかげで、滑稽

が上手になりましたな」

清照「コツケコと東雲つぐる鶏の聲



やがて日の出の神や昇らむ

黄金「オホ、早速の滑稽が始まった。ドレ此母も一つ旅の疲れを慰むる爲、駄句つて見ませう。」

葵沼に赤い心の神司

白い三五の月を見る哉。

黄金の姫の司が現はれて

葵の沼のわれた月みる

清照「われた月そりや母さまの事ですよ

私の月はまん丸い月

黄金 『オツホ、手にも足にも合はぬお嬢さまだなア』

『われぬ月とは言ふものの友彦の

波に碎けし半われの月』

『うまうまと母の前にて嘘をつき

つき通さむとするぞ可笑しき』

『片われの月さへ望の夜となれば

どこもかけない黄金の月』

黄金 『オホ、余り月々云うてると、月がひつくり返つて、キズが出て来ま

す。モウいい加減に歌の材料も【つき】だ。サアサアここでゆつくり寝【つき】

ませう』

清照 『私も【つき】合ひにお側に【つき】添うて、寝【つき】ませう。オ

ホ、ホ、』

と笑ひながら、月の光を浴びつつ、蓑を布いて沼の畔に「たわい」もなく横はる。  
斯かる所へ、沼に浮んだ月を砕いて、バサバサバサと波を蹴破り、走つて来た  
七八人の黒い影、

エル「あゝあ、ドテライ目に會うた。蜈蚣姫、小絲姫の兩人に、テツキリと玉山  
峠の南坂で出會し、カルの大將の命令で、遮二無二攻めかけた所、苦もなく谷底  
へ取つてほられ、氣絶して一途の川まで鬼に引きゆかれ困つてゐる所へ、三五教  
の宣傳使がやつて來やがつて、何とも知れぬ甘露水を吞ませて呉れやがつたと思  
へば、谷底にブツ倒れて夢を見てゐたのであつた。本當にこはい夢だつたが、氣  
がついて見ると馬鹿らしい、それにも拘らず、カルの大將奴、安眠中に起されて、  
命の御恩人などと、御追従を百萬陀羅竝べ、胸糞が悪くつてたまらない、とう  
と彼奴ア三五教に沈没して了ひやがつた、猫の目の玉程よく氣の變る奴だ。俺達  
はどこ迄も初心を變ぜず、大黒主神様の爲に身命を捧げたのだから、あんな柔弱  
な事は出來ない、なあキル公、本當に約らぬ腰弱ぢやないか」  
キル「オ、さうだ、おれも餘りケツ體が悪くて、あんな宣傳使に………ハイハイ

おかげで命を助けて貰ひました………などと、馬鹿らしい、其場逃れにお世辭を云つてやつたが、何だか打たぬ博奕に負けた様で、氣色が悪くて堪らない。一つは仇討の爲、一つは大黒主様の前に功名を立てる爲、皆の奴の寢息を考へて、ソツと宣傳使の腰に綱をつけ、一ぺんにグイと引張つて喉のしまる仕掛をしておいた所、宣傳使の奴、大變な古狸だから、寢眞似をしてをつたと見えて、いつの間にか魔法を使ひ、あべこべに俺達をフン縛り、レーブに綱を引かしゃがつた時の苦しさを、今度こそ本當に幽界旅行をせねばならぬかと心配したよ。一體貴様達ア氣の利かぬ奴だから、大きな聲を出しやがつて………命の御恩人に恩を仇で返すよな事をしたら神罰が當るなんて吐しやがるものだから、とうとう計略が外れ、虻蜂取らずになつて了つたぢやないか。今度から氣をつけぬと、どんな目に會はされるか知れやしなないぞ。本當に馬鹿だなア。今にも蜈蚣姫や小絲姫が此沼を迂回して、ここに來るに違ないから、今度はぬかつちやならないぞ。おれ達や貴様達は大黒主様のおかげで、女房子を安樂に養うてゐるのぢやないか。よう考へて見い、果物ばかり食つて命をつなく譯にもゆくまい。大黒主様から御扶持を頂か

なかつたら、家内中が皆かつゑて死なねばならない。それ程大恩深き御主人様の事を打忘れ、たつた自分一人の命を助けてくれた宣傳使が、ナニそれ程有難いか、而も安眠してゐる所を起されたと云つていい様なものだ。大勢の命を常住不斷につながして下さる大黒主様に、如何して替へる事が出来ようか。皆の奴、さうぢやないか」

一同「さう事を分けて説明して貰へば、大黒主さまは有難いなア。此御恩に酬ゆるには如何しても蜈蚣姫、小絲姫の二人を捜して連れ歸るのが第一の御恩報じだ。最早將軍はイソ館へ進軍され、遠く行かれたに違ないから、俺達は到底本隊をはなれて、此小部隊では險呑で進む事も出来ないから、せめては母娘二人の行方を捜して、彼奴を捕縛して凱旋する方が、何程手柄になるか知れたものぢやないぞ。浅い沼ではあるが、時々泥深い所があつて、鞆丸も禪もズクタンボーになりよつた。何とかして此奴を早く干かさぬと、氣分が悪くて仕方ない。月は照つてゐるが、彼奴はあつてもなうてもよい奴だから、俺の禪一つよう乾かす力を持つてゐやがらせぬワイ。其事思へば、日輪さまはエライものだなア。三五教は月の教だ

とか吐ぬかして居ゐるが、夜よるの守護しゆじだから、サツパリ駄だ目めだ。サア皆みなの奴やつ、ここで一ひとつ一いつ服ぷく致いたさうかい」

黄金わうごん姫ひめは草くさの中なかから、

「われこそは一途いちづの川かはの鬼婆おにばばだぞよ、其方そのほうは此處ここを葵あひひの沼ぬまと思おもうて居ゐるか、ここは冥途めいどの關所せきしよだ。サア早はやく其衣そのころもを脱ぬげ」

キル「オイ皆みなの奴やつ、ヤツパリ此奴こいつア夢ゆめかも知しれぬぞ。宣傳使せんでんしが助たすけよつたと思おもうたのは嘘うそだつたかいな。一途いちづの川かはのヤツパリここは連れんぞく續ぞくだ。エ、もう斯かうなつてはヤケクソだ。どつかここの草くさの中なかに脱衣婆だついはばの聲こゑがして來きた。サア突貫とつくわんとつくわん々々」

と號令がうれいする。黄金わうごん姫ひめ、清照きよてる姫ひめは草くさを分わけて八人はちにんの前まへにスツクと立現たちあらはれ、黄金わうごん「バラモン教けうの惡人あくにんども共ども、サア之これから蜈蚣むかで姫ひめが武勇ぶゆうの試ためし時とき、覺悟かくごいたせ」

キル「ナ、何なんだあ、蜈蚣むかで姫ひめだ、甘うまい事こと吐ぬかさない、一途いちづの川かはの星々ほしほし婆ばばア奴め、ガキも人數にんずだ。八人はちにんと一人ひとりでは叶かなふまい。サア突貫とつくわんとつくわん々々」

清照きよてる「妾わらはは三五教あななひけうの宣傳使せんでんし小絲こいと姫ひめだ。バラモン教けうの惡人あくにんども共ども、一人ひとりも殘のこらず冥途めいどの旅立たびだちをさしてやらう。サア覺悟かくごはよいか」

キル「ヤア此奴は又若い脱衣婆アだ。コリヤ兩人、蜈蚣姫や小絲姫の名をかたつても駄目だぞ。一イニウ三ツ」

といひながら、八人は二人に向つて武者振りつくを、

「エ、面倒」

と母娘二人は首筋つかんで葵の沼の真中へ、一人も残らず、バサリバサリと投げ込んだ。八人は此勢に辟易し、一生懸命に再び沼の真中をバサバサバサと北を指して逃げて行く。

八人の奴は驚きの餘り、照國別の休んである所へ、以前の怖さを忘れて又もやバサバサバサと命からがら上つて來た。レーブは此姿を見て、

「アハ、ハ、ハ、コリヤ八つの蛙、如何したのだ。いかにカヘルだと云つて、再び元の所へ逃げカヘル奴があるかい」

キル「ヤア………此奴アしまった、餘りビツクリして忘れてゐた。前門の狼、後門の虎だ。オイ、レーブ、こらへてくれ。向ふへ渡ると蜈蚣姫、小絲姫の名をかたつて婆や娘がヒュードロドロと出やがるなり、こつちへ來れば又此通り、進

退たいこれ谷きはまるだ。モウ改かい心しんするから許ゆるしてくれ。頼たのむ頼たのむ

レーブレーブ「たとへ宣せん傳でん使しがお赦ゆるしになつても、貴き様さまの樣やうな不ふ都つ合がな奴やつは此このレーブが赦ゆるさぬのだ。オイ、カル、貴き様さまも一ひとつ手て傳つたつてくれ。この八はつ匹びきの蛙かへるを元もとのドブ池いけへ突つ込こんでやるのだから

「ヨシ來きた」

とカルは立たち上あがり、手てに唾つばして、片かたつぱしからドブンドブンと沼ぬまを目めがけて投なげ込こんだ。八はち人にんは又またもやバサバサと淺あさき沼ぬまを命いのちカラガラ南みなみを指さして逃にげて行く。

春はる公こう「モシ宣せん傳でん使し樣さま、ヒヨツとしたら、黄わう金こん姫ひめ樣さま、清きよ照て姫ひめ樣さまは此この沼ぬまの向むか方かたあたりにお休やすみになつてるのかも知しれませぬぜ

照て國くに「いかにもさうかも知しれない、一ひとつ此この沼ぬまを渡わたつて、追おつついて查しらべてみよう。サア一いっ同どう用よう意いだ」

と云いひながら、早はやくも照て國くに別わけは裾すそをからげ、淺あさき沼ぬまをバサバサと歩あゆみ出だした。照て、梅うめ、春はる、レーブ、カルの一いっ行かうは照て國くに別わけの後あとに従したがひ、月つき照てり渡わたる沼ぬまの中なかをバサリバサリと、波なみに圓ゑんを描えがきながら急いそぎ行く。



(大正一一・一一・四 舊九・一六 松村眞澄録)

第十九章 月會(一一一〇三)

葵あひひの沼ぬまの南岸なんがんに黄金わうごん姫ひめ、清照きよてる姫ひめは沼ぬまの面おもを眺ながめながら、  
八人はちにんの惡者わるもの共どもの逃にげ行ゆ  
く後姿うしろすがたの隠かくるまで打眺うちながめて居ゐた。

黄金わうごん 沼ぬまの面おもにきらめき渡わたる月影つきかげを  
打うち碎くだきつつ逃にぐる醜神しこがみ

清照きよてる 「いと清きよくすみ渡わたりたる月影つきかげも  
水みづにおちては枉まがにふまれつ

水清き葵の沼の月影は

再びもとの姿とやならむ

碎けたる月の姿も今暫し

波をさまれば又照り渡る

空清く水底清き此沼を

醜のしこ人掻き亂しけり

バラモンの月の都の大黒主の

身の滅び行くしなるらむ

望もちの夜よの月つきの光ひかりは月つきの國くに  
バラモン教けうのつきと異ことなり

此この月つきの輝かがやく見みれば清照きよてるの

姫ひめの命みことの昔むかし偲しのばゆ。

バラモンの醜しこの司つかさが踏ふみ碎くだく

此この月つき影かげは運うんのつきかな。

運うんのつきとは云いふものあななひの三五さんごの

教をしへの道みちのつき影かげでなし。

バラモンの月つきの都みやこに螢火ほたるびの

光ひかりを投なげし大黒主おほくろぬしのつき。

大御空おほみそら雲くもに隠かくれて大黒おほくろの

月つきの姿すがたは見みえずなりぬる。

月つきも日ひも天津御空あまつみそらに輝かがやけど  
大黒主おほくろぬしの雲くもにかくれつ㊦

又またしても沼ぬまの月つきをば碎くだきつつ  
此方こなたに來きたる人影ひとかげぞ見みゆ㊦

又またしても醜しこの枉日まがひの來くるならむ  
天津御空あまつみそらの雲くも深ふかければ㊦

望もちの夜よの月影つきかげかくす黒雲くろくもの  
沼渡ぬまわたり來くる枉人まがひと忌々ゆゆしき

刻々に近づき来る人影は  
先の八人の醜人ならむ  
向ふ岸渡りし處に照國の  
別の命の居ませしならむ

玉山の峠に現はれ攻め来る  
醜の片われ八つの醜人

斯く悠々と三十一文字を歌つてる處へ、  
にか追はれたやうにバサバサと逃げ来る其様子の可笑しさ。  
た黒雲はさらりと晴れて、  
エル一行は依然として母娘二人の此處に佇めるを見て打驚き岸にも得上がらず、  
道を左に取り、東の方面さして一目散に水中をバサバサと驅けて行く。續い

て勢いきほひよく水みづをきつて馬うまに跨またがり來きたる物影ものかげがある。月つきの光ひかりに照てらし見みれば、どうやら  
照國てるくに別のわけ一行いっかうらしい。四人よにんは馬うま、二人ふたりは徒歩とほ、次第しだい々々しだいに岸きしに向むかつて近ちかづき來きたる。  
黄金わうごん姫ひめは聲こゑをこゑかけ歌うたひかけた。

☞ 天あめも地つちも葵あふひの沼ぬまを渡わたり來くる

照國てるくに別のわけ姿雄すがた々をしき

清照きよてる ☞ 望もちの夜よの月影つきかげこそは明あきけく

照國てるくに別のわけ司來つかさましぬ

照國てるくに別のわけ此聲このこゑに驚おどろき、黄金わうごん姫ひめ母娘おやこは此處ここに居ゐませしかと、馬ば上じやうより聲こゑを張はり上あげて歌うたひ返かへした。

□ 黄金の光にまがふ月影の

清照姫はここに居ますか。

望の夜の月は照國別の神

神のまにまに渡り來にけり□

斯く歌ふ間に馬は早くも岸邊に着いた。照國別一行はヒラリと馬を飛び下り黄

金姫に向ひ會釋しながら、

照國□貴女は黄金姫様、清照姫様、不思議な所でお目にかかりました。随分途中

は種々の困難事が起つたでせうな□

黄金□照國別さま、大變にお早うムいました。貴方は馬上の扮装、吾々母娘は女

の足弱で山坂を跋渉したものですから、一足お先へ出ながら到頭追つつかれまし

た。後の鳥が先になるとは此事で御座いますわ。ホ、ホ、ホ、ホ、

照國□どうも魔神の猛ぶ荒野原、御先頭にお立ち遊ばした貴女は大變な御苦勞で

ムいましたな。實は貴女方のお蔭であまりの障害もなく、ここ迄やつて來ました。

清照姫様もお元気で結構でムいます」

清照「ハイ有難う。随分脾肉の嘆に堪へないやうな事が屢々ムいましたか神様の

お諭しにより、無抵抗主義をとり、ここ迄來ました。實に惜しい事が幾度もムい

ましたよ」

照國「なるほど、私もバラモン教であつたならば随分暴れて來たのですが、本當

に残念な事でした。然しこれが却つて神様の御經綸、五十や百の小童子武者に武

力を示した處で「はづみ」ませぬからな」

清照「照國別さま、今晚はここで母娘二人が満月を浴びながら一宿を試みて居り

ますと、バラモン教の連中が此沼を渡つて慌しく逃げ來り一寸手向ひを致しまし

たので、生命さへ取らねば神様の御神慮にも背くまいと思ひ、睡け醒しに八人を

此沼へとつて投げた處、思うたよりは弱い奴で、バサバサバサと眞北を指して沼

の中をもと來し道へ引返しました。其時の狼狽さ加減随分見物でしたよ。暫くす

ると又もや其連中が鯨におはれた鯛の様に先を争うて逃げ寄せ來り、二人の姿を

見るより直に沼の中を東へとり、只今逃げ散つた處でムいます。まるつきり彼奴



等は水鳥の様な奴ですよ。オホ、、、、、」

照國「あれ位困つた奴はありませぬわ。玉山峠を通る折、一匹の狼現はれ春公の

袖を啣へて放さないの、狼によく云ひ聞かし其後へついて行つて見れば、谷底

に此レーブ、カルを始め八人のバラモン教の小童子武者共が人事不省になつて倒

れて居るので、色々と介抱をし命を助け、此沼の北岸迄やつて來るとズツポリと

日が暮れましたので、一同そこで蓑を敷き寢に就きました。さうすると夜中時分

に八人の奴、吾々の寢息を考へ縛り上げようと致すので素知らぬ顔して其綱をと

り、レーブに一々酸漿をつないだやうに彼等の知らぬ間に首に綱をソツとかけさ

せおき、一寸しゃくつて見た處、忽ちウンウンと苦悶を始めドタンバタンに暴れ

まはるので、餘り可愛相だと思ひ綱を解いてやると、蛙突這になつて謝りながら

此沼へ八人連れ飛び込み、南をさして一目散に逃げて行つたと思へば、又しても

怖しく元の處へ歸つて來る。彼等は再び自分の姿を見て又南をさして驅け出しよ

つたのです。彼奴等は水鳥の進化した奴と見えますわい。アハ、、、、、」

黄金「ホ、、、、、」

清照「レーブ、お前も矢張谷底で氣絶して居たのかい。私は又何處へ逃げて行つたのかと思つてゐたのだ。まあ神様のお蔭で助けられて結構だつたのう」

レーブ「はい有難うムいます。到頭氣絶致しまして三途の川を渡り、天國の道中を致して居りますと、向ふの青々とした山の上からレーブレーブと呼ぶ方がある。私は此處に居る、貴方にとつて放られたバラモンの部下カルと共に、其聲のする方へ一目散に走らうとした途端、氣がついて見れば玉山峠の下に肩骨をぬき倒れられましたのを照國別様一行に助けられたのでムります。カルも其時同じく助けられ、今逃げて行つた八人の奴も命を助けて貰ひながら、其大恩を忘れて右の如き怪しからぬ振舞に及んだのでムります。實に人間の心ほど悪いものはムりませぬ」

黄金「照國別様、よくまあ、レーブを助けてやつて下さいました。此男は鬼熊別様に仕へてゐる忠實な男でムいますから、神様の思召に違ふか知りませぬが、下僕として旅行に連れて歩かうかと思ひますが、どんなものでせう」

照國「それは誠に好都合です。貴女も女二人きりでは大變不便でせう。その事に

就て私も一寸日の出別様に誰かお供をお命じになつたらどうですかとお尋ねした  
處、日の出別様は首を左右にふつて仰有るには、決して心配は要らぬ、御兩人は  
途中に於て屹度二人のよい供が出来ると仰有いました。只今になつて考へて見れ  
ば、日の出別神様の天眼通には實に驚嘆致します」

黄金「貴方は之からどちらのお道をおとりになりますか」

照國「私は此沼の縁を傳つてデカタン高原へ出て、イドムの國からヤスの都へ渡  
り靈鷲山に立寄り、バラモンの處々の神司を言向和せとの日の出別様の御命令な  
れば、直様にハルナの都に參る譯には往きませぬ」

黄金「あゝさうでしたか。私はこれから右へとり、フサの國を横斷し、タルの港  
へ出て海上をハルナの都へ進む積りでムいます。何卒氣をつけておいで下さいま  
せ」

照國「左様ならばここでお別れ致しますせう。何卒レーブ、カルの兩人を御厄介な  
からお願ひ致します」

黄金わうごん 『いざさらば照國てるくに別の神司かむつかさ』

名殘なごり惜をしくもここに別わかれむ』

清照きよてる 『照國てるくにの別わけの司つかさを初はじめとし』

照てる、春はる、梅うめの司つかさと別わかれむ』

照國てるくに 『黄金わうごんの姫ひめの命みことや清照きよてるの』

姫ひめの司つかさよ安やすく行ゆきませ。

惟かむながら神かみの惠めぐみの深ふかければ

フサの海原つなばらも安やすく渡わたらむ』

照公てるこう 『月の色つきいろは黄金色わうごんしよくに輝かがやきて  
清照姫きよてるひめの野邊のべを行ゆきませ』

梅公うめこう 『大野原月おほのはらつきの光ひかりを浴あびながら  
母娘おやこふたり二人は安やすく行ゆきませ』

春公はるこう 『左様さやうなら黄金姫わうごんひめや清照きよてるの  
姫ひめの司つかさよレ、ブル、カルさま。  
一日いちにちも早はやくハルナの都みやこまで  
無事ぶじに行ゆきませ神かみのまにまに』

此處ここに照國てるくに別一行いつかうよにん四人よにんと黄金姫わうごんひめ一行いつかうよにん四人よにんは東西とうざいに袂たもとを別わかち、各命おのおのめいぜられたる道みち

を傳うて征途に登り行く。

(大正一一・一一・四 舊九・一六 北村隆光録)

## 第二〇章 入那の森(一一一〇四)

黄金姫は照國別一行と葵沼の畔で東西に別れ、西へ西へと進み行く。日も漸く黄昏れて、百鳥は埒を求め、彼方此方の森に歸り行く、其羽音の騒がしさ。一行四人は八夕とつき當つた相當廣い川邊に着いた。比較的水が少なくて徒渉するにも餘り困難を感じない様に見えて居る。一行は薄暗がりには裾をからげて流れを渡り、二三丁西に當るコンモリとした森蔭を目當に辿り着いた。後の夜の月はまだ姿を現はさぬ宵暗である。森の中には古ぼけた相當に大きい祠が建つてゐた。黄金「秋の日は暮れ易く、餘り足も草臥れない内に又休まねばならぬ様になりました。幸ひ此森の祠の中で一休み致しませう」

清照「お母アさま、今晚は斯様な所で休まずに、やがて月も出ますから、それまでここで月待をして進むことにしませう。夜半頃迄歩けば、餘程里程がはかどりませうから……」

黄金「長い道中のことだから、夜が明けたら歩き、何程樂でも日が暮れたら泊つてゆくことにしませう」

清照「それでも何だか氣がせいてなりませぬ。ハルナの都にましますお父さまの身の上にか變事でも起つてゐるやうに思はれて、氣が氣でなりませぬ」

黄金「何程焦つた所で遠い里程、何事も神様にお任せして、ボツボツ行きますせう。草臥れて道で倒れるやうな事があつては、惡神の跋扈する世の中、困りますから」

レーブ「お二人さま、ここで今晚は御一宿なさつたらどうです。吾々兩人は互に交代で不寢番を致しますから……」

黄金「それなら何神様の祠か知らぬが先づ天津祝詞を奏上し、此お宮を拜借すること致しませう。清照姫……さうが善いぢやないか」

清照「お父さまの身の上の事は、ここでトツクリ神様に御願ひ致しまして、寢む

ことに致いたしませう」

黄金姫わうごんひめは軽かるくうなづきながら、型かたの如ごとく祝詞のりとを奏上そうじやうし、祠ほくらの中なかに進すすみ入り、蓑みのを布しいて母娘枕おやこまぐひを竝ならべ寢しんに就ついた。レーブ、カルりやうにんの兩人りやうにんは祠ほくらの床下ゆかしたに横よしたはりつつあつたが、何時いつの間まにか、ウトウトと眠ねむつて了しまつた。

ここへスタスタとやつて來きた二三人にさんにんの男をとこがある、足音あしおとを忍しのばせながら祠ほくらの前に立たちよ寄り、

アルマ「オイ、テク、何でもここらあたりの祠ほくらの中なからしいぞ」

テク「オイ、アルマ、こんな所ところに何なにが居をるものかい」

アルマ「それでも何なんだか妙めうな響ひびきが聞きこえて來くるぢやないか、メツタわなずみに鼠ねずみの躰いびきぢやあるまいぞ。イルナの刹帝利せつていりさまから聞きいたには、キツと黄金姫わうごんひめの一行いっかうは此處ここを通とほるに違ちがひないと仰おつしや有あつた。ママア黙だまつて様子やうすを考かんがへたら如何どうだ。彼奴あいつさへ捉つかまへたなら、結構けつこうな御褒美ごほうびが頂いたげるのだからなア。小ちひさい國くにの一ひとつも貰もらつてハムとなつて威張あばらうと儘ままだよ」

テク「併しかし乍ながら黄金姫わうごんひめといふ奴やつは中々なかなかの豪傑がうけつで、俺達おれたちの手てには合あはないぞ。只所ただあり



在さへ分れば黙つて報告し、強い奴に掴まへさせばいいのだ。それが餘程利口な  
行方ぢやからなア、おい、テム、貴様はどつちにするか」

テム「俺はどつちかといへば中立だ。併し乍ら同じことなら生擒にしたいものだ。  
オイオイどうやら本眞物の人間の躰がして來だしたぞ」

レーブ、カルの兩人は床下から三人の話を息をこらして聞いてゐた。三人は床  
下に二人がひそんでゐるとは夢にも知らず、ドシドシと階段を登り、  
アルマ「ヤア此縁側は數百年來の風雨の侵害に依つて、餘程老朽してると見える  
ワイ。氣をつけぬと底がぬけて、脛でもかすつたら、又此間の様に吠面かわいて、  
負うてくれの何のとダダをこねねばならぬやうになるぞ。氣をつけたり 氣をつ  
けたり」

レーブは床下から、そこらの石を拾つて、古板を下からガンガンと力をこめて  
なぐり立てた。三人は此聲に驚き、飛上がった途端に、階段から眞逆様に祠の前  
に轉落し、

「アイタ、ウ、ウンウン」

と唸り出した。

テク「オイ、貴様等チトしつかりせぬか。あれ位な聲にビツクリしやがつて、擧措其度を失し、こんな所からヒツクリ返るといふことがあるものか。そんな臆病なことで如何して吾々の御用が勤まると思ふか」

アルマ「テク、お前もヤツパリ落ちたぢやないか。人を責むること急に、己の失敗は口角につかねて知らぬ顔の半兵衛とはチツと蟲がよすぎるぢやないか」

テク「貴様等二人が轉げやがったものだから、俺も一緒にいて落されたのだ。

いはば俺は被害者だ。貴様等二人は證據充分なる加害者だから、刹帝利様に報告して相當の處分をやつて貰ふから、さう思へ」

アルマ「アハ、旃陀羅成上がり奴、エラさうに吐すない。俺はかう見えても、チヤキチヤキの首陀の家柄だ。貴様等とは人種が違ふのだからなア」

テク「コリヤ俺が旃陀羅なんて、無禮なことを言ふな、勿體なくもバラモン族だぞ」

アルマ「バラモンが聞いて呆れるワイ、のうテム、此奴は今日も道の真中で旃陀

羅に會ひやがつて、心安さうに何だか囁いてみたぢやないか。彼奴に近よつて物をいふ奴は矢張其系統でなければ、汚らはしくて寄り付く者はないからのう」  
テク「コリヤ兩人、上官に對して何といふ無禮なこと申す。吾々捕手の役人は旃陀羅であらうが首陀であらうが、一々出會ふ奴の面を檢めねばならず、物も言はして見ねば人間の程度が分らないから、仕方なしに職務を重んじて物を言つたのだ。そんな冷淡なことで此役目が勤まるか、萬々一蜈蚣姫が此搜索の嚴しいのを悟つて、人のいやがる旃陀羅に化けて通るかも知れない。さうだから、此方が職務忠實に勤めてゐたのだ。馬鹿野郎だなア。左様な不心得な奴は只今限り暇をくれてやるから、さう思へ」

テム「オイ大將、口ばかりエラさうに言つてるが、お前の腰は立つのかい」  
テク「貴様の知つてゐる通り、腰が立ちやこそ此處までやつて來たのぢやないかい。譯の分らぬことを吐すものぢやないワイ。サア只今限り暇をくれる、どつこへなりと、天下に放ち飼ひだ。「うせ」たがよからうぞ」

アルマ「どこへ行けと云つても、俺達は兩人共ビツクリ腰が抜けたのだから、暫

く免職めんしょくは保留ほりうしてゐて呉くれ。同じ免職めんしょくなれば、依願免職いぐわんめんしょくといふ形式けいしきでやつて貰もらはねば、今後こんごの就職口しゅうしょくぐちに付ついて迷惑めいわくだから、貴様きさまを旃陀羅せんだらと云いつた位くらゐで、此結構このけつこう……でもない職しやくを免めんぜられて堪たまるものかい。のうテム公こう」  
テク「武士ぶしの言葉ことばに二言にごんはないぞ。いひ出だしたら後あとへは引ひかぬテクさまの氣性きしやうを知しつてゐるだらう」

アルマ「へん、テクテクと何なんだ「テク」せの悪いわる、泥棒上どろぼうあがり奴めが、モウ斯かうなつては、破やぶれかぶれた。オイ、テム公こう、貴様きさまはテム公こうだから、テクの奴やつがかぶりついで來きたら、手向てむかふ役やくとなつて格闘かくとうするのだ。萬々まんまん一形いちけい勢危せいあやぶしと見みたら、俺おれが助すけ太刀たちをする、併しかしモウ少すこし經たたぬと駄目だめだ。まだ抜ぬけた腰こしが元もとの鞘さやへ、少すこしばかり納をさまつてゐないからのう。併しかしテクの奴やつもきつく腰こしを打うちやがつたに違ちがひない、あの聲こゑの色いろを見みい、大分だいぶに痛いたさうだぞ。大體だいたい旃陀羅せんだらがこんな尊たふとい御神前ごしんぜんへ土足どそくのまま昇のぼるものだから、神罰しんばつが當あたり、俺達おれたち迄までがマキ添ぞひに會あつたのだ」

かく話はなす時ときしも、又またもや床下ゆかしたから一層いっそう大おほきな怪あやしい聲こゑが聞きこえてきた。先さきのはレーブ一人ひとりが石いしで床板ゆかいたをコツいたのであつたが、今度こんどは兩人りやうにんが力ちから一杯いっぱい石いしにて床下ゆかしたを叩たた

いたのだから、四五層倍の響音に聞えて来た。三人はキヤツと悲鳴をあげ、逃げようとして手ばかり「もが」いてゐるが、チツとも腰が立たない。さうかうしてゐる間に、月は容赦なく下界を照らし、森の隙間から強き光がさして、三人の體を照らした。

レーブ、カルは床下よりニタリと笑ひながら這ひ出し、階段の上につかつ力と登り、あたりに響く大音聲にて歌ひ出した。

レーブ 神が表に現はれて 善と惡とを立別ける

刹帝利淨行畏舍首陀や 旃陀羅族の索性をば

立別け給ふ時は來ぬ 此世を造りし神直日

心も廣き大直日 唯何事も人の世は

直日に見直し宣直し 大黒主は知らずして

唯惟神に刹帝利の 流れのはてとあやまりつ

旃陀羅族のテク公を 神の司の供人と

使ひ居たりし可笑しさよ かかる矛盾を見るにつけ

バラモン教の神司 大黒主の盲神

ぢやといふ事はハツキリと 今や隈なく知れわたる

三五の月の御光に 照らされ苦む三人連

中にも賤しきテク公は 天地の間も恐れずに

勿體なくもバラモンの 鬼熊別の奥さまや

小絲嬢をば馬に乗せ お供に仕へしさへあるに

冥加知らずのテク公は 怪しき眼を光らして

心に何か企むてふ 容子の色に見えければ

神に齊しき黄金の 姫の命や清照の

姫の司はそれとなく 玉山峠の麓にて

レーブにかこつけ暇やると 言はれた時の天眼通

これぞ誠の生神と 敬ひ慕ひ後を追ひ

いろいろ雑多と苦勞して ここ迄従ひ來りしぞ

此床下にひそみ居て  
汝等三人の囁きを

残らず聞いたレーブ、カル  
最早叶はぬ百年目

腰の抜けたを幸ひに  
弱目をみかけて俺達が

つけ込むのではなけれども  
耳をさらへてよつく聞け

汝は鬼熊別の神  
下僕とならむというるに

手をかへ品を變へながら  
頼み込んだが明察の

ほまれも高き神司  
鬼熊別は忽ちに

看破なされて御首を  
左右りとふり給ひ

男を下げてベソをかき  
大黒主の下僕等に

うまく取り入り漸くに  
下僕の數に加へられ

よからぬ事のみ行ひつ  
又もや此處に現はれて

イルナの國の刹帝利と  
心を合せ奥様や

嬢様たちを捉へむと  
向ひ來るぞ可笑しけれ

命知らずの馬鹿者よ  
心の鬼に責められて

チヨツとの音に膽ひやし 階段上から轉落し

腰を痛めて吠面を かわき苦む憐れさよ

あゝ惟神々々 御靈幸はひましまして

惡に返つた旃陀羅の テクの心を立直し

仁慈無限の三五の 神の教に逸早く

進ませ給へ天地の 尊き神の御前に

愼み敬ひ願ぎまつる 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも

攝取不捨の御誓ひ 人間界に交こりて

賤しき身分とさげしまれ 排斥されし旃陀羅も

其源を尋ぬれば 天地の神の御分靈

御分體ぞと聞くからは 一切平等神の御子

大慈大悲の御心に 見直しましてテクの罪

許させ給へと願ぎまつる



カルはレーブの後あとについて又また歌うたふ。

おつたまげたか、たまげたか  
テクにアルマにテムの奴やつ

天てんに口くちあり壁かべに耳みみ  
汝等なんぢら三人みたりの悪わるだくみ

残のこらず聞きいた床ゆかの下した  
コリヤ面白おもしろい面白おもしろい

一つおどして膽玉きもたまを  
試ためしてやらうとレーブさま

カルふたりの二人ふたが二つの目め  
見合みあしながら床下ゆかしたの

石いしを拾ひろひて古板ふるいたを  
ド、ド、ド、と打叩うちたたき

おどしてみれば面白おもしろや  
汝等なんぢら三人みたりは膽潰きもつぶし

道路神だうろしんにさいなまれ  
つまみ出だされた其その如ごとく

階下かいかにドーツと打倒うちたふれ  
腰こしをぬかしてウンウンと

吠面ほえつらかわき愚癡ぐち竝ならべ  
旃陀羅族せんだらぞくだ刹帝利せつていりと

味方みかた同志どうしが内亂ないらんを  
起おこし居をるこそ馬鹿ばからしい

あゝ惟神かむながらかむながら々々  
神かみの神罰しんばつ立たちどころ

悪あくの企たくみの年ねんの明あき 大黒主おほくろぬしに仕つかへたる

おれは名高なだかきカルさまよ 今床下いまゆかしたで聞きき居をれば

アルマやテムの兩入りやうにんを 只今ただいま限かぎり免職めんしよくと

エラさうにほざいて居をつただる おれは貴様きさまに比くらぶれば

十三段上役じふさんしだんうはやくだ 此このカルさまが神様かみさまに

代かはつてテクを免職めんしよくし 息いきの根ねとめて根ねの國くにや

底そこの國くになる地獄道ぢごくだう 派遣はけんしてやるテクの奴やつ

雙手もろてを合せ感謝あはかんしやせよ 大慈大悲だいじだいひのカルさまが

お前まへの好すきな底そこの國くに 青赤黒あをあかくろの鬼共おにどもが

手具脛てぐすねひいて待まつてゐる 焦熱地獄せうねつぢごくのドン底ぞこへ

紹介状せうかいじやうをつけるから 安心致あんしんいたして行ゆくがよい

アハ、ハツハ オホ、、 誠まことに誠まことに氣味きみがよい

それに引替ひきかへテムアルマ 二人ふたりの奴やつはカルさまが

拔擢致ばつてきいたして今いまよりは 改心次第かいしんしだいで三五あななひの

司のお供に任けてやる  
サア嬉しいか嬉しいか

二人の奴らよ返答せよ  
返答次第で天となり

或は地獄と早變り  
極樂地獄の境目ぢや

あゝ惟神々々  
祠の中にひそみます

黄金姫や清照の  
姫の司の御前に

カルが眞心捧げつつ  
只今仲裁仕る

あゝ惟神々々  
叶はぬならば逸早く

兩手を合せ尻をふり  
頭を下げつ四つ這ひに

三べん廻つてワンワンと  
吠えて改心したと云ふ

證據を早く見せてくれ  
それをばシホにカルさまが

神の司に取持つて  
お前を許し結構な

これから役目にする程に  
昇る身魂と又降る

身魂とさばく神の道  
テク公は降る兩人は

天國淨土に昇るよな  
心一つの持様で

ハツキリ區別がつく程に　メソメソ吠えずに確かりと

早く改心した上で　感謝の誠を現はせよ

あゝ惟神々々　御靈幸はひましませよ

三人は體の身動きもならぬままに、兩手を合せ、

「お助け　お助け」

と叫んでゐる。此騒ぎに黄金姫、清照姫は目を覺まし、何事ならむと祠の戸を開いて外に現はれ見れば、三人の男の此慘状、

黄金「コレ、レーブ、カル兩人、ここにどうやら三人の男が倒れてゐるやうだ。早く神様にお詫をしてやつて下さい。先づ鎮魂を施して、腰を立たしてやらねばなるまいぞや」

レーブ「ハイ、畏まりました。併し乍ら此奴はチームス峠を登る時、清照姫様の馬の口を取つて、玉山峠の麓迄送つて來たテクといふ悪者でムいます。外の二人は助けてやつても宜しいが、此奴丈はみせしめの爲に此儘に捨ておき、頭から糞

でもひつかけてやった方が將來の爲かも知れませぬぜ」

テク「モシモシ、レーブさま、そんな殺生なことをいはずに、わしも今日から改心しますから、どうぞ助けて下さいな」

レーブ「何と云つても此レーブさまとしては許すことが出来ないワ。今日こそ思ふ存分貴様をいぢめてやるのだ。貴様もツツと小手の利いてる代物だから、こんな時に仕返しをしてやらぬと、千載一遇の機會を逸するといふものだ。いつやら俺の頭をなぐりやがつて、其爲に俺は治療二週間を要する傷を負うたのだ。それでも長いものには巻かれ主義で、今日迄辛抱して来たのだから、今日は仇討ちの時節が到来したのだ。エへ、へ、へ、神が仇をうつてやるぞよと仰有るのはこの事だ、こりやテク、觀念致せ」

黄金「コレ、レーブ、お前も無抵抗主義と忍耐と慈悲との三五教へ入つたのだから、今までの恨みはサラリと川へ流し赦してやりなさい」

「奥様の御言葉なれど此奴に限つて赦すことは出来ませぬ。恨み骨髓に徹してる不俱戴天の仇敵ですから、どうぞ仇を討たして下さいませ」

「お前は神様の御言葉を忘れたのかな」

「イエイエどうして、忘れてなりますものか、片時の間も、尊き三五の教は忘却致しませぬ」

「それなら何故仇を赦してやらないのか、チツとお前の信仰と、矛盾しては居ないかなア」

「矛盾が撞着か知りませぬが、此奴ばかりは赦す事は出来ませぬ。普通の人間に擲られたのなら辛抱も致しますが、こんな旃陀羅にやられたと思へば残念で堪りませぬ。こんな奴に擲られて其儘にしておいては出世の時節がありませぬから、どうぞ頭を一つ力チ割らせて下さいませ。何と仰有つてもこれ丈は思ひとまる譯には参りませぬ」

と手頃の石を拾ひ、そこに倒れて居るテクの頭を打割らうとするのを、黄金姫は大喝一聲、

「レーブ、暫く待てツ。これ程事を分けて申すのに、女宣傳使と侮つて、吾言を用ひないのか。只今限り免職を致すから、さう思うたがよからうぞや」

レーブは頭を掻きながら、

「あゝ又免職が傳染したと見えますわい。エ、仕方がない、それなら奥さまの御命令に従ひませう」

テク「コレ、レーブ、さうしたがよいぞや。人を免職させると、又自分が免職になるぞや」

レーブ「エ、貴様まで人を馬鹿にするない、アタ忌々しい」

黄金「オホ、、、」

清照「ウフ、、、あのマア、レーブさまの悄氣た顔わいのう」

カル「エツへ、、、コリヤ面白い面白い」

黄金「三人の者共、黄金姫が赦すから、何處へなと勝手に行ったがよからう。今

度は決してこんな割のわるい商賣は致す事はなりませんぞ」

三人「ハイ有難う」

と涙聲に感謝してゐる。不思議や三人の腰は忽ち舊に復し、喜び勇んで匆々に此森を後に逃ぐるが如く姿を隠した。

黄金姫一行は夜の明くるを待ち、悠々として此場を立出で、イルナの國の都を指して進み行く。

(大正一一・一一・五 舊九・一七 松村眞澄録)

~~~~~

靈界物語 第四〇卷 舍身活躍 卯の卷

終り